

## D 工房の区画施設と建物

ここではまず南地区の工房を区画する塀について記す。工房を区画する塀は、東の谷では、東岸の工房2の東北辺を画す掘立柱塀SA1236、これを接続して東の谷の初期の陸橋上に建つ掘立柱塀SA1235、東の谷の西岸に沿う掘立柱塀SA1237が発見されている。西の谷では、工房の西を限るとみられる南北塀SA1660がある。区画施設の全容は明確でないが、断続的に発見されたこれらの区画塀から、工房はおよそ外周を区画すると想定できる。

次に南丘陵北斜面の平坦面で検出した2棟の掘立柱建物について述べる。この2棟は柱筋をそろえるため、併存すると考えられ、その柱穴の大きさや深さから、いわゆる工房の覆屋ではない特異な性格が想定される。さらに東の谷東岸の工房2の下層遺構について記す。下層遺構は上層遺構の保存のため、部分的に検出したにすぎないが、下層遺構どうしも重複あるいは近接するため、一時期には納まらず先後関係がある。

### i 工房を区画する塀

**掘立柱塀SA1236** (PLAN 7・12, PL. 52) 東の谷、東岸の丘陵裾と工房2との間に建つ掘立柱塀で、北で西に約30°振れる。丘陵裾との距離は9mで、南では掘立柱塀SA1235が鈍角(約100°)に接続する。第98次調査区内で11間、約28m分を検出したが、これより北は削平されて柱穴が残存せず、また南は調査区外となるため、どこまで延びるかは不明。柱間寸法は、柱位置を特定できないため明確でなく、2.4~3.0mと若干の疎密があるようである。柱掘方は一辺が1m前後の方形だが、深さは50cm程度で、南方の柱穴の残りがよい。掘方底部の標高は北に向かってわずかずつ高くなり、北端を含めた3柱穴は110.2mを測る。柱はほぼ抜き取られている。東岸の工房2の東北辺を画す塀と推定される。

**掘立柱塀SA1235** (PLAN 7・8・12・34, PL. 54) 陸橋SX1232の下層にある初期の陸橋SX1233上に造られ、東の谷を横断する掘立柱塀。南西-北東方向に延び、東端で掘立柱塀SA1236と接続し、それよりも東方へは延びないことを第99-6次調査で確認した。また東の谷の西岸沿いに建つ掘立柱塀SA1237に接続し、さらに南丘陵上へと続く。本報告ではSA1237を境にその東をSA1235、西をSA1238と遺構番号を分けて扱う。つまりSA1235は、東のSA1236と西のSA1237の間となり、全長は20.4mを測る。

SA1235は、第98次調査区で東半にあたる5間、約13m分を検出した。柱間寸法は、SA1236に取り付く東から1間目が2.1mと短く、以下3間目が2.8mで、5間目が2.4mとばらつく。西端のSA1237まではさらに約7.4mある。この部分は第87次調査区の東端部にあたるが、ここでは柱穴を検出していない。この部分を等間とすれば3間分で、

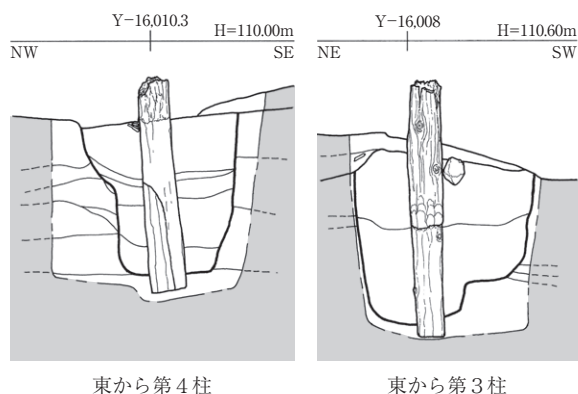


Fig. 76 掘立柱塀SA1235の柱穴断面図 1:50

東岸工房2  
を画す塀

東の谷を  
横断

柱間寸法は2.5m弱となり、第98次の検出状況に類似する。すなわちSA1235の全長は8間の可能性がある。

SA1235の  
全長は8間カ

柱掘方は上層に造られた陸橋SX1232の築土に覆われており、これを除去して検出した。平面は0.8～1.1mの方形で、陸橋築土に覆われた部分の深さは0.95～1.1mで、これがほぼ掘方掘削時の深さとみられる。掘方底面の標高は、東端の柱穴で109.65m、西端の柱穴で108.05mと西方が低い。また東北端の柱穴と、それを含んだ第3・4・6柱穴には柱根（順に本文編〔I〕第IV章5節「建築部材」119・118・121・120、図版編〔I〕PL.284）が遺存していた。第6柱穴には掘方底部に川原石を詰め込んでいたが（図版編〔I〕PLAN34）、第3・4柱穴には基礎固めの施設はなく、柱根が掘方底から10cmほど沈下していた（Fig.76）。また第4柱穴の柱根は、下流側に傾いていた。柱根の径は18～22cmで、東北端の柱は長さ53cmと短い、他の3本は1.2～1.6mあり、掘立柱の根入れとなる下部50～70cmを焼いて焦がしている。また利用していないホゾ穴があることから、転用材とみられる。

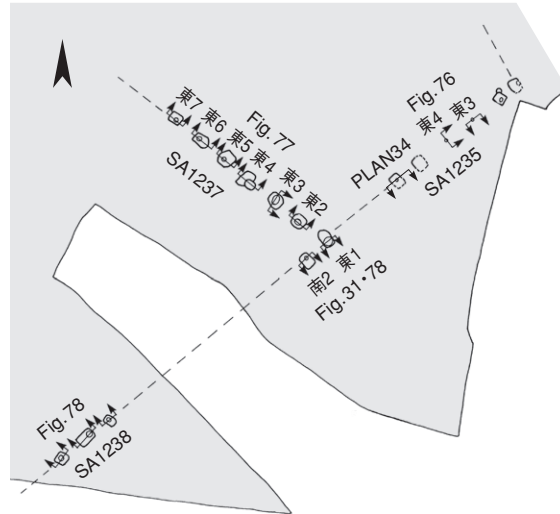
柱は転用材

東方の第98次調査区では、SX1232Bの北裾で柱根の頂部を検出している。また、柱根は掘方検出面（陸橋SX1233上面）よりも30～40cm突出して遺存している。この柱根頂部の高さは、SX1232Aの北裾よりも北に位置しており、それよりも高い。SA1235がどの時点で廃絶したのか、すなわちSA1235の柱根がどの時点で切断されたのかは明確でないが、廃絶時の地表面付近で切断されたとすれば、少なくともSX1232Aへの付け替え時には、水溜SX1230から建つ形で存続していたと考えられる。このとき、SX1232を素掘溝SD1260～1269で越えた水がSX1230に流れ込むが、堀の下部を空けて水を流しつつも、遮蔽施設としても機能したと推定し、堰の機能をもつものではないと考える。

一方、第87次調査区で検出した西端の柱穴（SA1237・1238と共有）は、Fig.31（55頁）およびFig.78（東1）にみるように浅く、先述したような2.5m弱の柱間寸法であれば、この断面にさらに柱穴がかかるはずである。本来もっと高い位置から掘り込まれたとみられるが、陸橋SX1233などとの関係を含め明確でない。西端の3間分は堀として連続していなかった可能性もあり、西端部は谷の中央部や堀東端部とは様相が異なると考えなければならない。これは西の谷の西岸に沿う掘立柱堀SA1237のあり方とも関係する。

**掘立柱堀SA1238**（PLAN 6・8・11・12、PL.53） 掘立柱堀SA1235の西方に続く掘立柱堀。東の谷西岸沿いの堀SA1237の東南端の柱穴を起点として、南丘陵の東斜面から頂部にかけて北東－南西方向に延びる。東の谷を横断する堀SA1235と柱筋をそろえた一連の堀とみられるが、説明の都合上、SA1237の東西で遺構番号を分けた。SA1237のとりつき部で1間分を確認し、そこから20mほどは調査区外となるが、南西方向に延長した丘陵の頂部付近で再び3基の柱穴を確認した。確認できた堀の平面距離は28.8mである。急な斜面に設けられた堀で、柱掘方の底面も標高123.3～120.6mと階段状に落ち、上部はかなり削平を受けている（Fig.78）。柱間寸法は、2.1～3.0mと一定しない。柱掘方は平面が長方形～正方形で、長辺が1.0～1.4m、現存する深さは最大で1.0m。東北端（SA1237と共有）から南西へ1基めの柱穴には柱根を残す。柱根は長さ38cm、径21cmのヒノキ材で、底面に加工痕をよく残す（本文編〔I〕第IV章5節「建築部材」75、図版編〔I〕PL.284）。その他の柱抜取穴から推定される柱の径も同程度である。飛鳥池工房の南を限る堀と推定される。

工房の南  
を限る堀



SA1235・1237・1238の平面模式図と断面位置

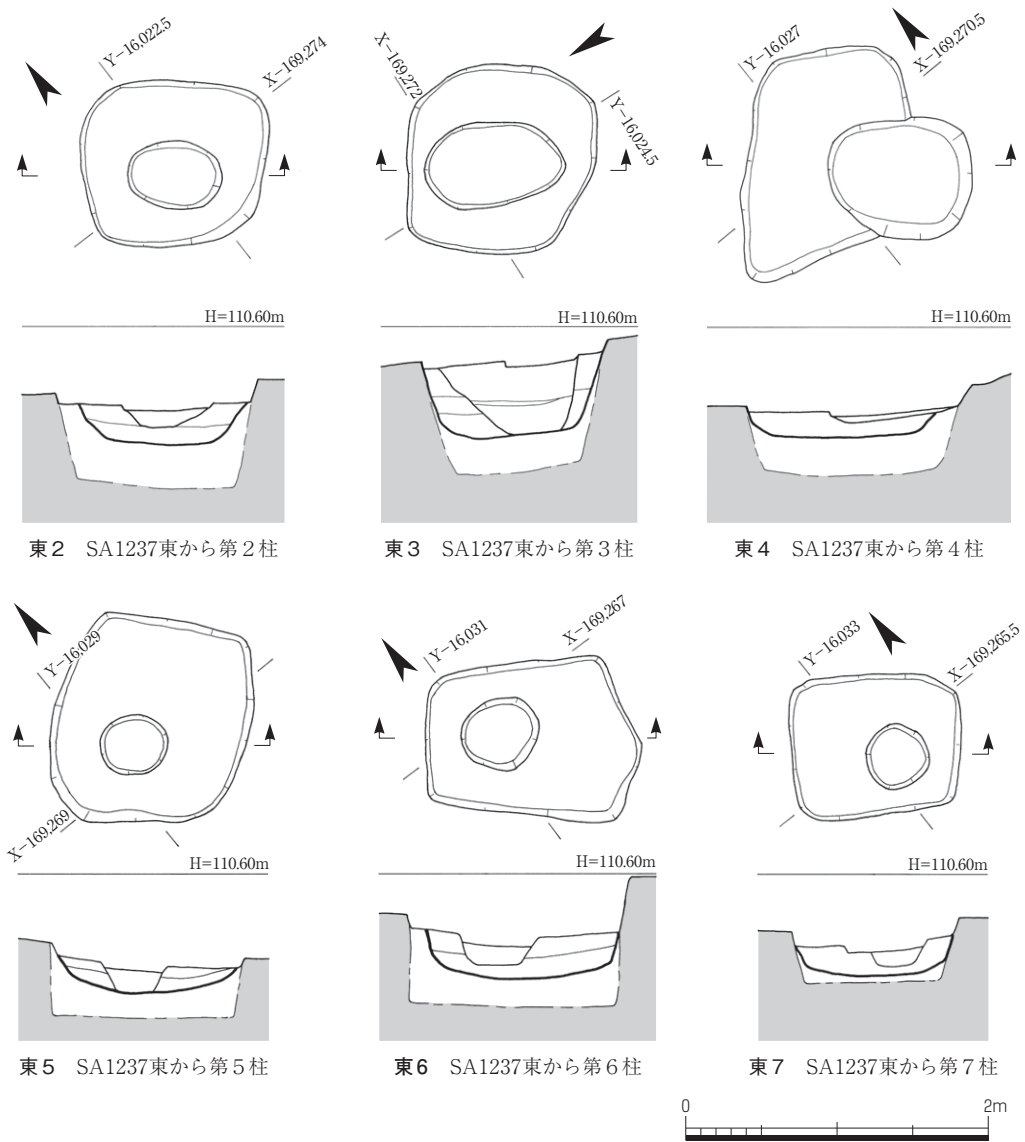


Fig. 77 掘立柱塼SA1237の柱穴平面図・断面図 1:50

**掘立柱塼SA1237** (PLAN 6・8・12, PL. 51・53) 掘立柱塼SA1235・1238とT字に接続し、南丘陵下の東の谷西岸に沿って南東-北西方向に延びる掘立柱塼。SA1235・1238を共有する柱穴を含んで計7基の柱穴を検出した。柱間寸法は2.7m前後で、東南端の1間は3.0mと若干長い。柱掘方の平面は楕円形～正方形を呈し、長辺が1.1～1.3mと比較的大きいが、現存する深さは40cm程度のもが多く、上部はかなり削平を受けているようである。柱はいずれも抜き取られている (Fig. 77)。確認できる範囲では、大半は淡灰黄褐色シルト (旧河川SD1176もしくは7世紀中頃の流路SD1173の堆積土と推定される) を掘り込んでいるが、東南端の柱穴 (SA1235・1238と共有) は、炭を含む整地土を掘り込んでいる (Fig. 31, 55頁)。これは陸橋SX1233に由来する整地土の可能性はあるが、明確でない。SA1235の解説でも述べたように、SA1235は東の谷の陸橋SX1233上に造られた塼だが、西端部の3間分ほどの柱穴が検出できておらずSX1233との関係を含

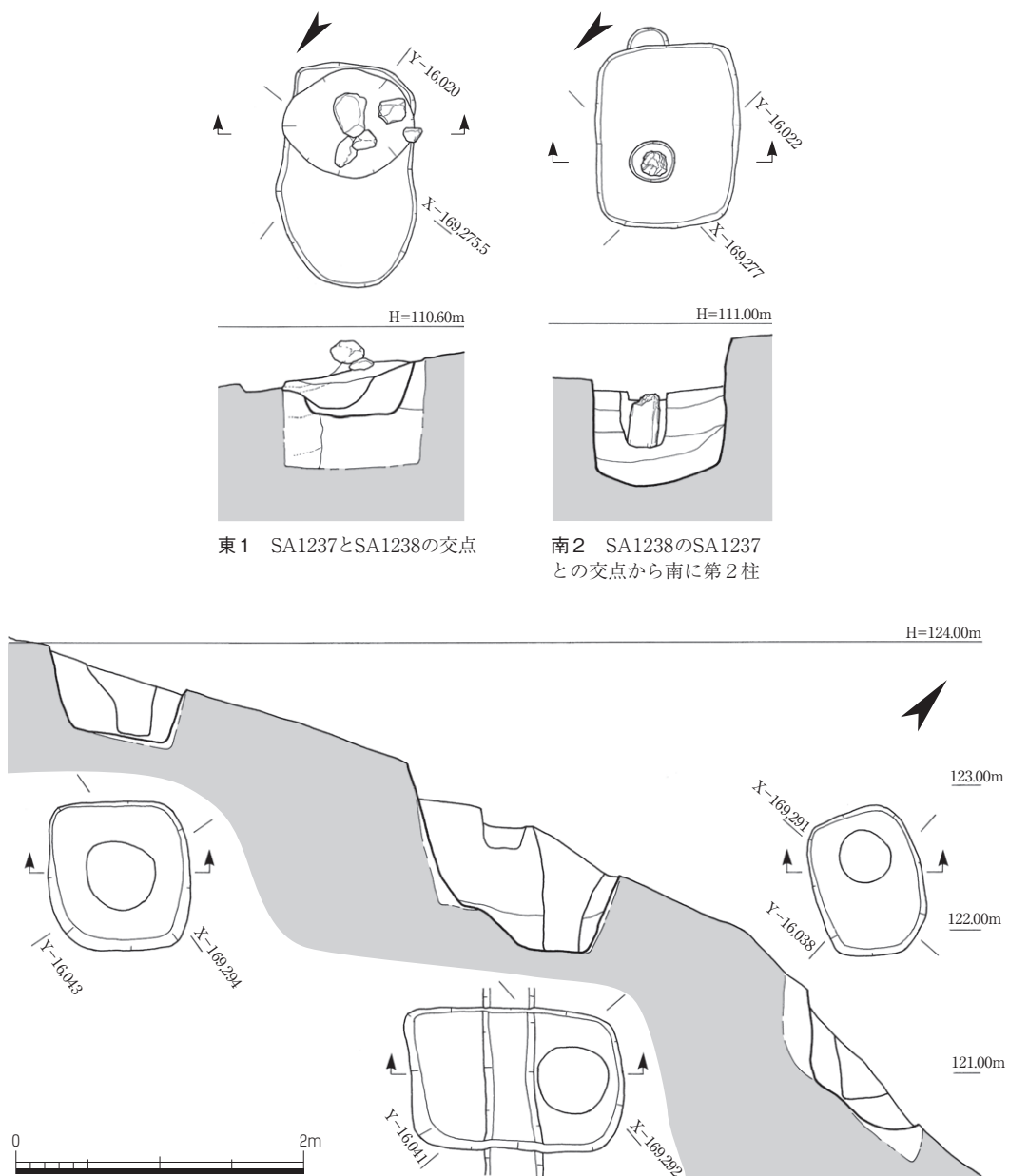


Fig. 78 掘立柱塼SA1238の柱穴平面図・断面図 1:50 (位置はFig. 77平面模式図参照)

め不明な点が多い。その解釈によっては、SA1237の柱穴が浅いこととも関係すると思われるものの、合わせて解明できる物証を欠く。

堀の北西延長部は近世飛鳥池の南岸にあたるため、削平されて遺存しないが、延長部にある西の谷南岸に沿う掘立柱堀SA753に接続する可能性もあるだろう。

延長部はSA753に接続？

**南北堀SA1660** (PLAN 5・6、PL.54) 西の谷西斜面の第106次調査I区西端で検出した掘立柱南北堀。3基の柱穴が並ぶが間隔が1

m前後と近接しており、北端と南端の柱穴が組み合うと考えられる。この場合、柱間寸法は約2.1m(7尺)となる。柱掘方はいずれも一辺約80cmで、深さは検出面から約1.4mと深い(Fig.79およびFig.9、17頁)。北端の柱穴は、約15cmの厚さで西北隅に残る整地土を掘り込む。他は地山面で検出した。3基並ぶうち中央の柱穴には柱抜取穴があり、掘方は北端の柱掘方に壊されている。南端の柱穴には径約25cmの柱痕跡を残す。したがって、この中央の柱穴を用いた堀を建て替え、北端と南端の柱穴を用いた堀が造られたと考えられる。37頁および70頁で述べたように、このSA1660は現状の下段平坦面の西端に建つ。この付近には整地が施されているが、この場所は平坦面の造成では整地が不要な場所であることから、掘立柱堀の基礎固め、あるいは基壇状の盛土がなされていた可能性がある。

SA1660は建替あり

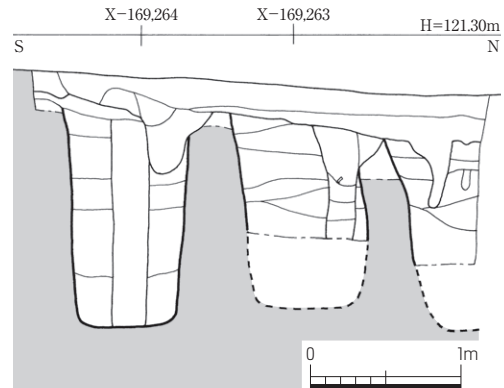
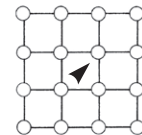


Fig.79 掘立柱堀SA1660の柱穴断面図 1:50

## ii 南丘陵の建物

**掘立柱建物SB1603** (PLAN 6・8・11・33、PL.48~50) 西の谷の東方、南丘陵の北斜面の削平された平坦面で検出した総柱形式の掘立柱建物。桁行・梁行ともに3間で、柱間寸法はいずれも1.5m(5尺)前後とみられるが、北東-南西方向がそれより若干短い傾向がある。次に述べるSB1604と柱筋



SB1604と併存

をそろえており、同時に存続したことは疑いない。SB1604と棟方向を合わせた北東-南西方向が桁行と考えられる。柱掘方の平面は、一辺0.7~1.0mのほぼ正方形を呈する。柱はすべて抜き取られており、抜取穴から柱径は約25cmと推測できる。旧地表面は後世の削平を受けて、東南部が高く西北部が低い現状の地形となるが、東北隅と東南隅の柱穴底面の標高は、他よりも10~20cm低いものの柱穴底面の標高は114.8m前後とほぼ一定である。ただし、したがって、旧地平面は水平に近いと考えられ、平坦面を造成して築かれたものであろう。現状の柱穴の深さは、西北隅柱穴が63cmであるのに対して、東南隅柱穴は1.9mに達しており、柱の根入れ深さはいずれも1.5mを超えることになる。仮に地表面に傾斜があったとしても、柱穴の底面の標高を合わせていることから、柱の長さを一定にしていたことがうかがえ、その上に築かれた上部構造もしっかりしたものと想像される。いずれにしても掘方の平面規模に対して深さはかなり深く、その堅固な掘立柱の構造から重要な倉庫建築であったと推定される。

重要な倉庫建築

**掘立柱建物SB1604** (PLAN 6・8・11、PL.48~50) 掘立柱建物SB1603と柱筋をそろえ、約4.5m(15尺)北東に離れて建つ掘立柱建物。桁行・梁行とも3間だが、北東-南西方向に長く、

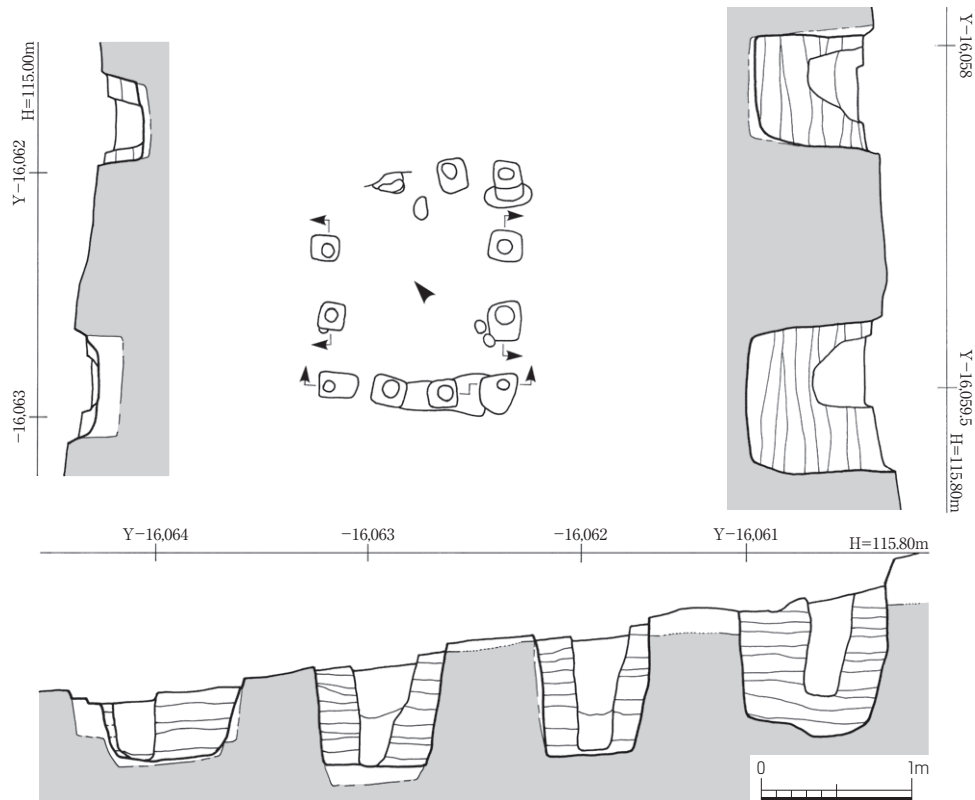


Fig. 80 掘立柱建物SB1604柱穴断面図 1:50

これが棟の向きとみられる。SB1603が総柱建物であるのに対し、このSB1604は内部の柱をもたない身舎のみの建物である。柱間寸法は桁行が1.8m（6尺）、梁行が1.5m（5尺）。柱掘方は平面が一辺0.7～1.0mの正方形で、深さは最も深い東南隅柱で1.2mを測る（Fig. 80）。西北隅柱は削平を受け残存しない。柱穴底面の標高は114.3～114.6mとほぼ一定しており、SB1603より浅いものの、建物規模と柱間寸法の割には深い。大半の柱は抜き取られており、抜き取穴から復元できる柱径は20cm程度である。南西辺に幅80cm前後、深さ約20cmの布掘状の浅い溝が柱穴をつないでいるが性格は不明。建物の柱間装置に関連する施設であろうか。

SB1604は、SB1603とは建物構造に加えて柱の根入れ深さが異なり、同様の倉庫建築とは考えがたい。ただし身舎のみの建物としては柱間寸法が小さく、その割に柱穴の深さが深いなど、堅固な構造の建物であったと推定される。倉庫SB1603と一体的に計画・配置された付属施設であり、SB1603に次ぐ重要な建物とみられる。

堅固な構造  
の重要建物

### iii 東岸の工房2の下層建物と堀

**掘立柱建物SB1253** (PLAN 7・12) 東の谷東岸の工房2の下層で検出した桁行4間以上、梁行2間の掘立柱建物。掘立柱堀SA1236と重複し、それよりも古い。梁行2間の北妻とそれに続く桁行4間分の柱穴を検出した。棟方向は北西-南東。柱間寸法は、梁行が1.35m（4.5尺）等間、桁行は若干ばらつきがあるが、およそ1.5m（5尺）と考えられる。柱掘方は、西側柱が長辺70cm、短辺40cm程度の整った長方形平面であるのに対して、東側柱は不整形ながら70～90cmと一まわり大きい。柱掘方はほぼ垂直に掘り込んでおり、検出面からの深さは40～50cm。柱の多く

は抜き取られているが、西側柱に残る柱痕跡の径は10cm程度にすぎない (Fig. 81)。大型方形炉最古の建物 SX1250を壊しており、重複する掘立柱建物SB1254および掘立柱塀SA1255より古い。

SB1253以前の  
工房施設

東側柱の東北隅から第2柱穴には、坩堝片が出土したSX1259がある。柱抜取穴に破壊されるかたちで、焼土や炭化物が幅30cm、長さ70cmほどに浅く固まっており、炉跡の可能性もある (Fig. 82)。『年報2000-II』32頁では、柱穴の抜取穴を利用して、炉SX1259 (年報では炉跡SX257) が造られているとしたが、断面図からは、掘方よりも古いとみられ、柱穴以前、すなわちSB1253以前の工房に関わる施設と推測する。

**掘立柱建物SB1254** (PLAN 7・12) 東の谷東岸の工房2の下層で検出した方2間の掘立柱建物。棟方向は北西-南東。柱間寸法は桁行が1.95m (6.5尺)、梁行が1.5m (5尺)。柱掘方は60~70cmで、深さは30cm前後 (Fig. 83)。柱痕跡から柱径は15cm程度に復元できる。前述した掘立柱建物SB1253と重複し、それより新しい。

**掘立柱塀SA1255** (PLAN 7・12) 東の谷東岸の工房2の下層で検出した南西-北東方向に延びる2間の掘立柱塀。柱間寸法は1.8m (6尺)。柱掘方は一辺が60~70cmの方形で、検出面からの深さは35cm程度 (Fig. 84)。掘立柱建物SB1253と重複し、それより新しい。

**掘立柱塀SA1256** (PLAN 7・12) 東の谷東岸の工房2の下層掘立柱建物SB1253の内部北方にある南北方向の柱穴2基。柱掘方は一辺40cm前後の隅丸方形で、北方の柱穴の柱痕跡は径約15cm。性格不明。

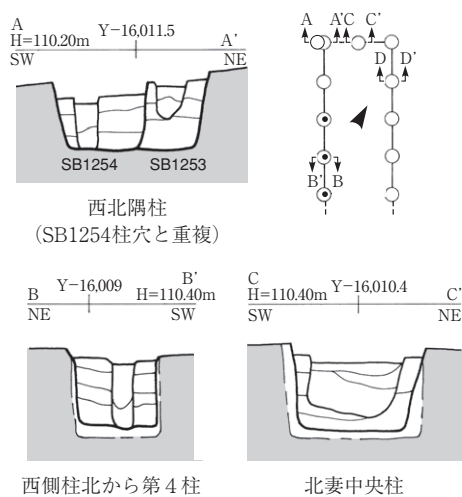


Fig. 81 掘立柱建物SB1253柱穴断面図 1:40

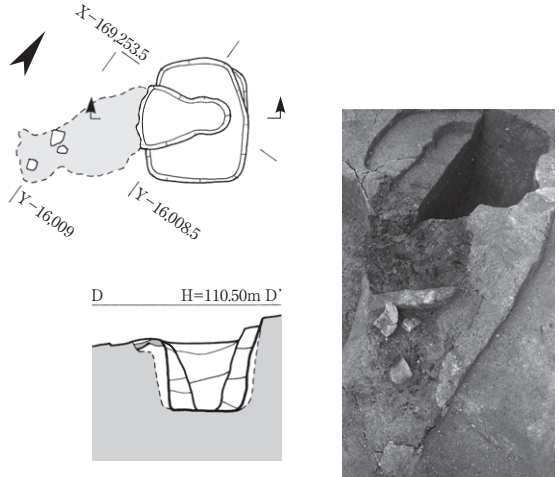


Fig. 82 掘立柱建物SB1253よりも古いSX1259 (図面は1:40)

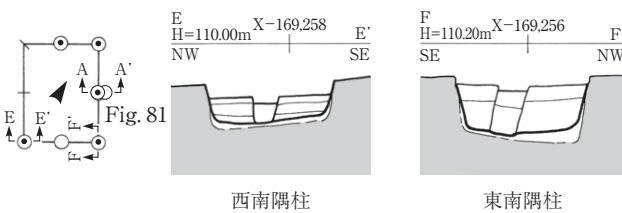


Fig. 83 掘立柱建物SB1254の柱穴断面図 1:40

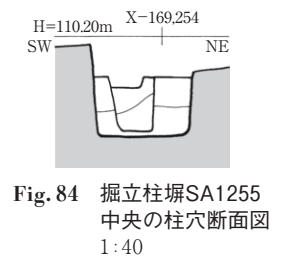


Fig. 84 掘立柱塀SA1255 中央の柱穴断面図 1:40

- 1) 「1999-12次 酒船石遺跡（第12次）の調査/2000-1次 酒船石遺跡（第13次）の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成11年度』明日香村教育委員会文化財課、2001年。第Ⅲ章は基本的に2005年3月時点で得ていた情報に基づいて記述したため、上記概報を参照したが、その後、酒船石遺跡に関しては『酒船石遺跡発掘調査報告書 一付、飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡一』（明日香村文化財調査報告書 第4集、明日香村教育委員会、2006年）が出版されている。
- 2) 敷葉構法は古代狭山池の築造など、大規模土木工事に際して用いられた工法である。
- 3) 松村恵司「富本七曜銭の鑄造技術」『出土銭貨』12号、1999年。
- 4) SX1223は、炭層を除去した後、その下層（炭混じり腐植土）の掘り下げ時に検出していることもそれを裏づけている。
- 5) しがらみSX1252は、第87次調査の概報（『年報1998-II』50頁）では、東の谷の流路SD1173を堰き止める機能と解釈していた。この時点では陸橋SX1233のみならず、東の谷の水処理施設を確認する以前の調査であったため、東の谷の流路に伴うと考えたのである。第98次調査でSX1233を確認すると、『年報2000-II』31頁ではSX1233に伴うものと解釈を変更している。ここではその根拠を示していないが、本文中で述べたように、平面で掘立柱塼SA1235の柱の南に沿う杭列を検出したことによると推定される（PLAN34をはじめ、細かすぎて図面には表現しきれていない）。  
図版編〔I〕PL. 8にはこのしがらみの写真を掲載している。第87次調査の所見に従い、SD1173に伴う遺構として掲げたが、その後の検討により、第98次調査の所見に妥当性があると考えられるため訂正したい。Fig. 31に示した所見と理解されたい。PL. 8の写真のキャプションは、「陸橋SX1233に伴うと考えられるしがらみ」とすべきだろう。
- 6) 『飛鳥藤原京木簡1 一飛鳥池・山田寺木簡一』（奈文研、2005年）16頁で、木簡1点が出土したSK830がSK753北端の柱穴にあたる。なお、当該書17頁第8図で示しているSK830の位置は誤っている。
- 7) 燃焼部の規模としては大型であり、平窯の焼成部の可能性も考えられたが、奥壁に煙道がないこと、焼成部とみとときに前面の燃焼部との段差がないこと、当初の床面が平坦でないことなどから、登（窖）窯とした（花谷 浩「飛鳥寺東南禅院とその創建瓦」『瓦衣千年』森 郁夫先生還暦記念論文集、同刊行会、1999年、680頁、註11）。
- 8) 前掲註1）。
- 9) 「1992-1次 酒船石遺跡（第1次）の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成5年度』明日香村教育委員会文化財課、1994年。前掲註1）で述べたように、第Ⅲ章は基本的に2005年3月時点で得ていた情報に基づいて記述したため、上記概報を参照した。その後、酒船石遺跡に関しては、前掲註1）に示した『酒船石遺跡発掘調査報告書 一付、飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡一』が出版されている。



## 6 北地区の遺構

ここでは北地区、すなわち東の谷の3条の掘立柱塀（SA1150～1152）が変遷する堰SX1199を境に、それより北の空間に営まれた遺構について記す。北地区は、生産工房に関連した南地区とは土地利用の状況が大きく異なる。北地区の発掘調査は、南から、第93次、第84次、第97次調査として実施した。北端の第97次調査では、飛鳥寺寺域東南区画とその南に造られた東西道路に関連する遺構を検出した。

まず北地区の遺構変遷を概観すると、南地区東の谷から北地区を北流していた7世紀中頃の流路SD1173の堆積土を掘り込んで、南北大溝SD1130を基幹排水路とした段階がある。SD1130の上流および下流は明確でないが、下流は調査区東北端で検出した南北溝SD1066に接続するとみられ、自然地形に任せてそのまま北方に排水するようだ。SD1130は、そこから工房関係の遺物が出土することから、南地区での工房操業開始時には機能していたとみられる。上流が堰SX1199と併存するかどうかは、考古資料からは直接確認できない。

詳細は明確でないものの、大きな変遷としては、北地区の排水系統は、SD1130から南北溝SD1110に変更している。SD1110は谷の水を北方へ流し、石組方形池SG1100で受けて石組排水路SD1101で北東へ排水する。したがって、東の谷の水溜とSG1100が同時期に機能していたことは疑いない。SD1130からSD1110へ北地区の排水系統の変更は、自然地形に従って北方へ排水していたのを、北東を低くして排水するという大造成を伴い、これによって飛鳥寺寺域東南区画が生まれていて、飛鳥寺寺域東南区画の整備と密接な関係があると考えられる。

排水系統変更は大造成を伴う

SD1130の埋立地は、基幹排水路であるSD1110とのあいだに南北塀SA1120・1121が建つために排水に苦労したらしく、SA1120をくぐる暗渠、それに接続する東西溝、東西溝に沿う東西塀などを複数造っており、また湿地状の土地を通行するための東西方向の踏石列も2時期分検出している。

SD1130の埋立後、北地区およびその北方の飛鳥寺寺域東南区画の様相は一変する。飛鳥寺東南区画には、寺域南限施設である掘立柱塀（SA1060・1061）を建ててその南と厳格に仕切る。その南には東西道路SF1070を造成し、道路より南方の北地区にも、道路とを仕切る塀を設けた内側（南）に掘立柱建物SB1134・1141などを建て、また短い掘立柱塀を建てるなどして仕切っている。北地区の南と北には石敷井戸SE1160とSE1090を造り、いずれも立派な石敷と石組の排水溝を伴う。出土遺物から、これらの井戸の埋没は奈良時代後期まで降る。

立派な石敷井戸2基

これらの北地区の遺構は、大半を自然地形の谷を埋めた整地土（あるいは溝埋土）上で検出しており、遺構保存のために整

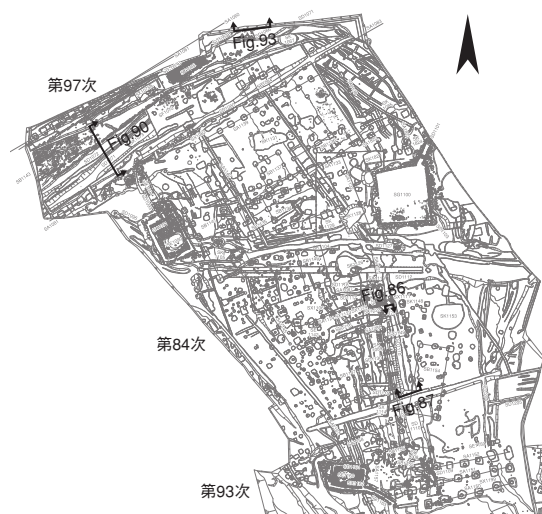


Fig. 85 北地区の断面図の位置 1:1200

地土下の調査をほとんどおこなわなかった。このため、SD1130と併存する遺構など下層の様相は不明である。また、南地区の遺構との関係や、SD1130埋立地に造られた溝や暗渠などと、北地区検出の建物や塀との関係や時期比定についても明確ではない。SD1130やSD1110からは、木簡をはじめ土器類などの出土遺物も多いが、少なくともSD1130出土遺物は、北地区で検出した諸施設よりも古い時期のものと考えざるをえない。

ここではまず北地区の水処理施設について述べ、つづいて飛鳥寺寺域東南区画の寺域南限施設とその南を走る東西道路に関連する遺構、さらに北地区の井戸、掘立柱建物、掘立柱塀、土坑、その他の遺構の順に説明を加える。先述のように、SD1130の埋立地に造られた塀や暗渠・溝などは、一連の遺構と考えられるが、塀と暗渠・溝の記述位置が分かれている。

## A 北地区の水処理施設

**南北大溝SD1130** (PLAN 2・3, PL. 17・20) 第84次・第93次調査区の東の谷中央部において、整地土の下層で検出した素掘りの南北大溝。掘立柱南北塀SA1120の西方約6mの位置に西肩があり、東肩は整地土下にあつて、平面では検出してない。南端では幅9m程度、深さ60cmほどの北流する溝で、西肩は地形に沿った比較的緩い傾斜をなす。埋土は木簡や削屑を多量に含んだ腐植土層を何層も挟む (Fig. 4、6・7頁)。北地区で下層調査ができた南北8mほどで検出・掘り下げをおこなった。後述するように溝埋立地に建つ南北塀SA1120を保存したため、それより西方で掘り下げており、溝全幅の掘り下げは断面観察部分でおこなった。

南北8mで  
検出・掘下

掘立柱南北塀SA1120・1121の掘方は、SD1130の埋土を切り込み、木樋暗渠SX1114などはSD1130の埋土上に造られていることから、これらよりSD1130が古い。上流にある3条の掘立柱塀が変遷する堰SX1199とは、併存関係も含めて考古資料からは明確でない。SD1130の埋土には工房関連遺物を含むことから、少なくとも工場の操業開始時には機能していたと考えられ、東の谷の水溜も完成していた可能性がある。この場合、最下流の水溜SX1220からどのようにSD1130へ排水していたのかは明確でない。また、SD1130の下流も明確でない。調査区北辺で検出し、やはり上流が明確でない南北溝SD1066は、後述するように東西溝SD1072との合流点付近が溜池状 (SK1073) となっており、現時点ではSD1130の下流はこれらと考えておく。

SD1130の出土遺物には、3,317点にのぼる木簡 (うち削屑2,880点) のほか、飛鳥Ⅲ～Ⅴの土器、瓦、木器 (食器具、服飾具、遊戯具、人形、部材など)、銅滓、鉄器などがある。紀年銘木簡には、「丁丑年」(天武6年=677) と記されたものがある。

多種多量の  
出土遺物

**南北溝SD1110** (PLAN 2, PL. 17・18・22) 前述した南北大溝SD1130を埋め、その埋立地の東部に掘った南北溝。南(上流)は堰SX1199を越える溝SD1108・1109に接続し、北(下流)は石組方形池SG1100に接続すると考えられるが、その取り付き部は中世の東西素掘溝SD1127や後述する多数の土坑群によって破壊されて明確でない。ただし、SG1100南辺西部に護岸石積を一部階段状に落としている部分があり、ここに直線的に接続すると考えておく。SG1100に接続していたとするとSX1199からの溝の全長は約35mに及ぶ。SG1100の南約12mの地点には、石組の護岸を伴う堰SX1111を設けている。この付近での溝幅は0.9m、深さは0.5mだが、南に向かって幅を広げ、南端では幅約2.5m、深さ1.0m程度の断面楕円形の溝となる。SX1111以南の溝底

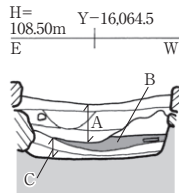


Fig. 86 堰SX1111付近の南北溝SD1110断面図 1:50

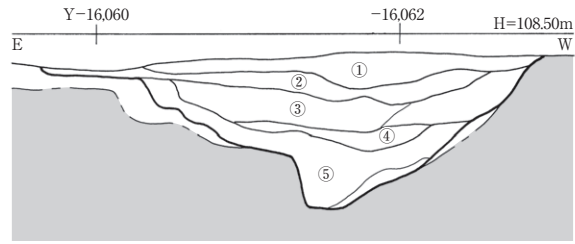


Fig. 87 第84次南辺付近の南北溝SD1110断面図 1:50 (Fig. 86・87ともに断面位置はFig. 85参照)

木屑から  
木簡出土

には木屑が厚く堆積しており多量の木簡が出土した。第84次・第93次調査で検出。

堰SX1111付近の溝埋土 (Fig. 86) は、A：上・中・下層の水成堆積の下に、B：灰色砂混じりの木屑層を伴い、その下にC：炭を含む青灰色～暗灰色の粘質土が堆積する。また第84次調査区南辺では、東方へ幅0.7m (厚さ5cm) あまりあふれて堆積した層がある。この部分の堆積土は概ね5層に分層できる (Fig. 87)。すなわち、①最上層は青灰色粘質土混じり黄茶色砂、②上層があふれた堆積層を含む青灰色砂質土混じり黄茶色砂、③中層が暗灰色砂ないし暗青灰色砂質土、④下層が暗灰色砂、⑤最下層が木屑および木屑混じり暗灰色土である。

SD1110からは、最下層の木屑層を中心として計1,267点の木簡 (うち削屑1,073点) のほか、飛鳥Ⅲ～Ⅴの土器、瓦、木器 (鳴鏑、匙、曲物、堅櫛、物差、琴柱、座金や釘の様、独楽、漆篋など)、鉄釘、銅鈴などが出土した。紀年銘木簡には、「丁丑年」(天武6年=677) と記されたものがある。出土遺物はSD1130と親近性があり、土器では破片が接合するものがある。出土遺物の分析で言及しているSD1110についての記載とその解釈は、本書第Ⅵ章5節「遺構の変遷」の215頁以下で紹介・検討するが、SD1110出土遺物の一定程度はSD1130に由来すると解釈するべきであろう。

出土遺物の  
一定程度は  
SD1130由来

SD1110は、以下で述べる堰SX1111や掘立柱塀SA1120・1121、東西溝SD1115～1118、木樋暗渠SX1114・1119・1175、橋SX1149、踏石列SX1123・1174などと併存する。

**堰SX1111** (PLAN 3、PL. 17・18・21) 南北溝SD1110に設けられた石組の堰 (Fig. 88)。石組方形池SG1100から南約12mの位置にあり、東西両岸に花崗岩による護岸を設けている。護岸は、東岸で2段積み計7石が残り、長さ1.7m、高さ40cm、西岸で3段積み計12石が残り、長さ1.5

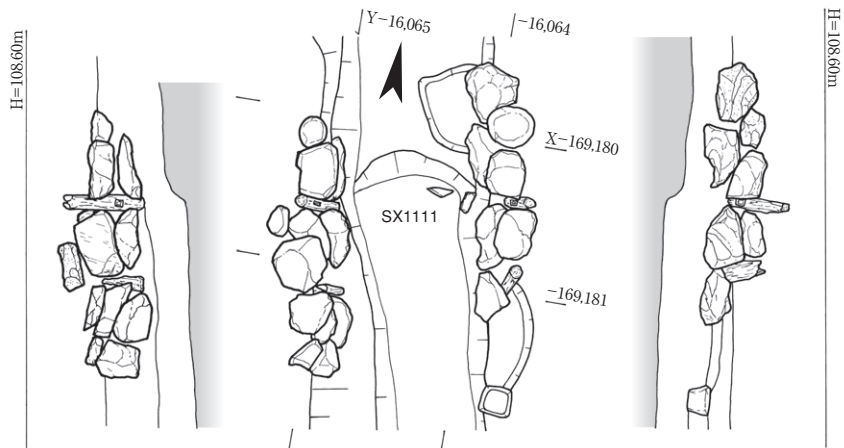


Fig. 88 堰SX1111平面図・立面図 1:50

m、高さ60cmである。この護岸石は東西岸とも石の間隔が若干空いており、この隙間に東西岸それぞれ50cm間隔に丸杭を打ち込んでいた（本文編〔I〕第IV章5節「建築部材」34～36、図版編〔I〕PL.280）。杭は上方で溝外に向く傾斜を設けて設置されている。そのうち北方一対の杭（建築部材34・36）には、対抗する面に幅約4cmのホゾ穴をあけている。ホゾ穴の高さはほぼそろっており、ここに横棧を挿し、堰板を固定したと推定される。この北側の杭位置から北方は、溝底を10～15cm浅くしている。溝底を高めて堰板的な機能を期待したものであろうか。SX1111の西方には、この堰を操作・管理するための石敷SX1122や踏石列SX1123・1174がある。第84次調査で検出。

両岸で50cm  
間隔に丸杭

石敷や踏石  
列が付属

**橋SX1149** (PLAN 3, PL. 17) 南北溝SD1110に架かる橋。堰SX1111の南にあり、SD1110の東西両岸に3基ずつ南北に並ぶ柱穴列を確認した (Fig. 89)。柱間寸法は西岸の柱穴列で、南から1.5m、1.6m、東岸の柱穴列で南から2.2m、1.6mと不規則である。柱掘方は一辺50～70cmの平面で、西岸の柱穴は抜取穴をもち、検出面からの深さは70～90cmを測る。東岸の柱穴には径15cm前後の柱痕跡を残す。この位置に橋を設けた理由は不明。第84次調査で検出。

**石組方形池SG1100** (PLAN 2, PL. 25～27, 付図2) 北地区の東辺中ほどにある平面方形の池。四辺を石積で護岸するが、東辺北部を除く各所で石が抜き取られている。南辺西部に南から延びる南北溝SD1110が接続すると想定され、東北隅には石組排水路SD1101が接続して排水する。第84次調査で検出。

基底部の内法規模は、各辺の中央部で南北8.6m×東西7.9m、東辺8.8m、南辺8.0m、西辺7.9m、北辺8.0mを測る。平面形は、東南隅と西南隅がほぼ直角に近く、東北隅がやや鋭角となる台形を呈する。石積は、各辺とも人頭大、もしくはそれよりもやや大型の自然石を野面積でほぼ垂直に積み上げ、裏込めには川原石のバラスを混ぜる。最も残りの良い東辺北部には、最大

最大7段  
高さ1.5m

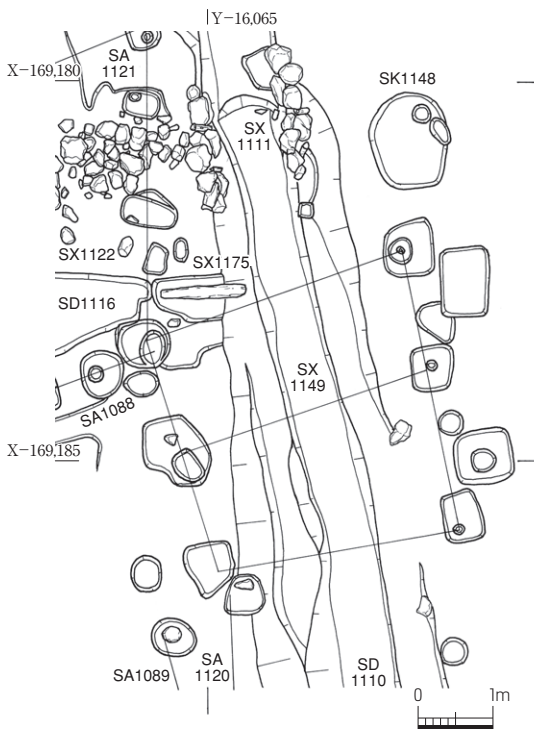


Fig. 89 橋SX1149平面図 1:100

7段、高さ1.5mの石積が残る。他の辺の残存状況を、残りの良い部分の段数と高さであらわすと、南辺が4段・0.9m、西辺が5段・1.3m、北辺が6段・1.4mとなる。西辺と北辺の各中央部では破壊が著しく、西辺の一部では石積が基底部まで完全に抜かれている。東辺と北辺の石積は、石組排水路SD1101の側石に連続する。東辺の石積最高部の標高は108.1m、池底の標高は106.3～106.4mである。池底にはバラスがまばらに残ることから、当初は池底を全面バラス敷としていたらしい。

東辺の石積の60～70cm外側には、これと並行する石列があり、断面観察の結果、現在みえている石積の裏側に、古い石積が埋め込まれていることが判明した。改修が認められるのは東辺のみで、当初の池の東西

東辺外側に  
古い石積

規模は8.5mとなり、平面形はより正方形に近い。確認した石積は3段程度であるが、池底まで少なくとも8段（高さ1.7m）積まれていたようである。石列状に遺構検出面に顔を出した石積は一部でほぼ垂直に立っており、改修時に並べ直した可能性がある。また、南辺西部の石積は、一部階段状に組まれている。導水路である南北溝SD1110のSG1100への接合部は、遺構として明確でないが、SD1110の流路を直線的に延長すると、この階段状の石積部分にあたることから、ここをSD1110との接続部と考えておく。SD1110の埋没後、奈良時代には池の東南隅に接続するSD1103が導水路となる。

階段状石積  
にSD1110  
が接続カ

SG1100の堆積土は、いずれも東辺の石積改修後のもので、池底に礫混じりの青灰色砂（厚さ10～20cm）と黒色粘土（最大厚さ20cm、この2層を「最下層」と呼ぶ）があり、これらで最下段の石の半分ほどが埋まる。その上に、灰色砂（厚さ30cm前後、「下層」と呼ぶ）が堆積し、これで石積の下2段が埋まる。その上に、厚さ30～60cmで暗灰色砂質土や暗灰色土（「中層」と呼ぶ）があり、石積の下から4段目あたりまで堆積する。その上に灰緑色砂質土（「上層」と呼ぶ）が厚さ20～30cm堆積し、石積の下から5段目あたりまで埋まっている。池の西辺や北辺では、上部が崩落して低くなった石積の上を暗灰色砂質土や灰緑色砂質土（上記の中層・上層）が覆っており、石積の崩壊と池自体の埋没がほぼ併行していたことを示している。埋土最上部には淡茶褐色砂質土（「最上層」と呼ぶ）が堆積し、これによって池は完全に埋没する。これらの堆積土からは、土器・瓦・木器・金属器などとともに木簡が11点出土した。出土土器をみると、水溜・炭層・南北大溝SD1130・南北溝1110出土土器などと類似する飛鳥IV～Vの土器に加えて、下層までに奈良時代前半の土器を、上層・中層までに奈良時代後半の土器を含む。

木簡ほかの  
出土遺物

**石組排水路SD1101**（PLAN 2・13、PL. 27、付図2） 石組方形池SG1100の東北隅に接続する排水用の石組溝。溝の規模は、上幅0.9m、下幅0.5～0.7mで、長さ約5mを確認した。SG1100とほぼ同大の自然石を野面積している。石積は両岸とも7段で、高さは約1.3mある。SG1100東岸の改修にあわせて、右岸の池の接合部は改修されている。接合部から1mほど下流には、溝底に人頭大の石を5個を並べた堰状の遺構がある。池底から堰状遺構の石上面までの比高は、30～36cmである。第84次調査で検出。

溝の堆積土は、下から、礫混じり青灰色粘土（厚さ5cm）、黒色粘土（厚さ20cm）、灰色砂・灰色粘砂（厚さ20～25cm）、有機質土（厚さ10～15cm）、暗灰色ないし青灰色粘質土（厚さ30～40cm）、灰色砂（厚さ10cm）、灰色粘土（厚さ20～25cm）、灰褐色・暗褐色土（厚さ30cm）の順である。灰色粘土層より上に積石が崩落し、灰色砂・灰色粘砂層には平城宮ⅡないしⅢの土器を含む。このSD1101の東方下流には、飛鳥池東方遺跡の調査で確認した流路SD1700が位置しており、石組方形池の水はSD1101を通じてSD1700に排水されたと考えられる。

SD1700に  
排水カ

**南北溝SD1103**（PLAN 2、PL. 25） 石組方形池SG1100の東南隅に流れ込む南北素掘溝。SG1100の当初の導水路SD1110が埋没した後に、新たに池の東南隅に開削された導水路である。南を中世の東西溝SD1127などで壊され、全長約5mを検出したにとどまる。上流も明確でないが、次に述べるSD1204がその有力な候補である。検出面での溝幅は約3mあるが、下部は幅約50cmの断面矩形の溝となる。深さは最深部で検出面から約1m。SD1103が注ぎ込むSG1100東南隅の石積は、SD1103の溝底（標高106.8m）の高さ、すなわち石積の下から2段目まで撤去されている。溝の埋土は、大きく3層に分けられ、矩形断面部分に堆積する下層（厚さ20cm）と、その

上流は  
SD1204カ

上に幅を広げて堆積する中層（厚さ40～70cm）がいずれも暗灰色土で、緑灰色～褐色の砂（厚さ30cm前後）の整地土を挟んで、その上に暗褐色土を埋土とする上層（最大厚さ50cm）の溝が掘り直されている。飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器とともに、奈良時代に降る平城宮Ⅱ～Ⅲの土器が出土し、SG1100上部の堆積層と接合する土師器や須恵器も多い。木簡2点（削屑1点）も出土した。第84次調査で検出。

**南北溝SD1204**（PLAN 3） 谷東岸付近にある土坑SK1153の東から南方へ約22m延びる南北素掘溝。溝幅は90cm前後で、深さは南端部で20cm前後である。灰白色から暗灰色の粗砂を埋土とする。南端は3条の東西堀が変遷する堰SX1199付近まで延び、その北にある井戸SE1159と重複してそれよりも新しい。南端から6mほどのところで、東方から東西溝SD1205が合流する。

SD1205が  
合流

当初の導水路SD1110の東方約13mをSD1110と並行して走り、北方（下流）の流路は不明だが、そのまま延長すると石組方形池SG1100に注ぐSD1103にあたることから、SD1103と一連の溝であった可能性がある。南端部において、SD1204の東方1.5mの位置にある南北素掘溝は、東西溝SD1205よりも古く、北方では流路をやや東に振ってとぎれるが、この自然流路的な南北溝を付け替え、SG1100へ導く溝がこのSD1204であったと推定される。

**東西溝SD1205**（PLAN 3） 南北溝SD1204に東方から接続する東西素掘溝。東端は調査区内でとぎれる。幅は60cmで、検出面からの深さは20cm。第93次調査で検出。

## B 飛鳥寺寺域東南区画と東西道路

調査区の北辺では掘立柱堀SA1160・1161を検出し、これが飛鳥寺寺域東南区画の南面大垣にあたる。これに伴う遺構に、大垣の南雨落溝と考えられるSD1063、石敷SX1065があり、その南に東西道路SF1070が設けられた。素掘溝SD1080はその南側溝にあたり、調査区北辺を横断する形で検出し、中央付近には橋状遺構SX1082が設けられている。上下2層ある瓦敷SX1075は、SF1070の舗装だった可能性があるが、その下層には振れのやや異なる2条の溝SD1071とSD1072がある。新しいSD1071は調査区の東外へ続くが、SD1072は調査区北辺東部で南北溝SD1066に接続して北流するらしく、その合流点に土坑SK1073が形成されている。SD1066の上流（南方）は明確でないが、やはり下流が明確でない南北大溝SD1130の可能性もある。このように、調査区北辺では、最終的には飛鳥寺の南面大垣が造られて、これに並行する道路が設けられるが、それに伴う土地利用と水処理の方法には大きな変化がある。とりわけ、SD1072・1066からSD1071への水処理方法の変化は、自然地形の谷を埋めて東方へ下る地形を人工的に造り出す大造成を必要とする。これは、先述したように北地区の水処理方法の変化とも密接に関係している。この変化の原因は不明とせざるをえないが、この造成によって飛鳥寺の東南禅院の地が生まれている点は注意すべきだろう。ここではこれらの遺構を北から順に述べる。

地形変更を  
伴う大造成

**南面大垣SA1060**（PLAN 2・18～20、PL.56） 調査区の北辺で検出した掘立柱堀。東で北に32度ほど振れる方位をもつ。ほぼ同位置に先行する南面大垣SA1061が重複する。調査区西北隅から7基、6間分の柱穴を検出した。柱間寸法は2.65m（9尺）等間。後述する石敷SX1065を挟んで北東方の調査区の壁で検出した柱穴が、SA1060と柱筋がそろい、その間の距離約15.8mは、先述の柱間寸法で6間分に相当する。したがって、SA1060は後述する石敷SX1065をはさ

んで北東に延びると考えられる。第97次調査で検出。

柱掘方は1.0~1.3mの隅丸方形で、深さは検出面から0.85~1.3mに及ぶ。SX1065の北東方の1基を除く7基の柱穴のうち、両端から第2柱穴にそれぞれ柱痕跡と柱根を残し、ここから柱径は30cm前後と判明する。それ以外は柱抜取穴をもつが、7基のうちの東第3柱穴は、抜き取りの途中で柱を切断しており、抜取穴の下に掘方底面から20cmほど沈下して傾いた柱根が遺存していた(PLAN18のA-A'、C-C'断面)。この柱根は径30cm、長さ84cmで、樹種はコウヤマキ。年輪年代測定により586年+aという伐採年代を得た(本文編〔I〕第四章5節「建築部材」117、図版編〔I〕PL.286)。

年輪年代  
586年+a

また、柱筋の約1.2m南方には、人頭大の川原石(一石は凝灰岩切石)が直線的に並ぶ。掘立柱塀の基礎南辺を画する縁石で、南の面をそろえて据えており、内外の比高は30~50cmある。縁石は据付溝をもち、SA1060の西第5柱穴の抜取穴よりも古いことを確認した。北辺の石列については、調査区西北隅部分が攪乱を受けており存在は不明である。

石敷SX1065の北東方の1基を除く7基の柱穴のうち、東端の柱穴の断面観察により、柱掘方上を10cmほど土が覆い、柱抜取穴はこれを切りこむことを確認した<sup>2)</sup>。一方、先述のように縁石据付溝は柱抜取穴よりも古い。以上から、縁石の内側を基壇と解釈した。柱筋から縁石南面までの幅を北に折り返すと、基壇幅は2.4mに復元できる。ただし、縁石と柱掘方との関係、および先行する南面大垣SA1061(後述)の掘方や抜取穴との関係については明確でなく、この基壇がSA1061に伴う可能性も否定できない。

基壇幅  
は2.4m

飛鳥寺の  
区画施設  
との比較

飛鳥寺の寺域(寺院地)の区画施設としては、北面大垣SA500(飛鳥寺1977、同1982、飛鳥藤原第91-8次:1998)、東面大垣SA600(飛鳥寺1982)、西面大垣SA700(飛鳥寺1985-2次、同1996-3次)のほか、南面大垣SA535(飛鳥寺第2次:1958、飛鳥寺1979)がこれまでに確認されている<sup>3)</sup>。飛鳥寺1982では大垣東北隅(北面回廊東端と東面回廊北端)を検出し、SA500・600とも2.1m前後の柱間寸法であったが、その他の調査では、SA500・700とも柱間寸法が2.7m(9尺)前後で、およそSA1060と同規模である。またSA535は、南門の東で幅約2.5mの石積基壇を検出しており、8世紀初頭の改修後の遺構とみられるが、当初より築地塀と想定されている。ここでは築地塀の基壇のみで掘立柱穴は検出していないものの、基壇規模はSA1060の復元基壇幅に近い。北面大垣を検出した第91-8次調査では、大垣に低い基壇を想定できる転落した石を検出している。以上から、SA1060は、大垣東北隅部分とは柱間寸法が合わず、これまで発見されている南面大垣とはその形式や軸線の振れが異なるものの、飛鳥寺の南面区画施設(大垣)の可能性が大きい。その際、先行するSA1061(後述)との関係が問題となるが、ここではSA1061を飛鳥寺の寺域東南区画の、最初の区画施設と考えておく。この塀の北方には飛鳥寺東南禅院の存在が想定され、こうした区画施設の変遷は東南禅院の整備過程と密接に関わると考えられる。

SA1060は飛  
鳥寺の大垣

**南面大垣SA1061**(PLAN 2・18・19、PL.56) 南面大垣SA1060と重複して並行する掘立柱塀。SA1060より古く、調査区の西部では独立した柱穴を検出したが、東部ではSA1060の柱穴と完全に重なり失われた柱穴もある。それらを含めて復元すると、調査区にかかるSA1061は9間で、柱間寸法は1.8m(6尺)等間。柱掘方は南北約1.0m、東西約0.8m、深さ約1.2mである。軸線はSA1060よりも東で北に若干大きく振れる。SA1061に伴う明確な付属施設は確認できていないが、先述したように、SA1060に伴うと考えた基礎縁石状の石列は、SA1061のものである

可能性もある。SA1061は、それ以前にはなかった飛鳥寺寺域東南区画の南面を初めて遮蔽した塀である。第97次調査で検出。

土層 (PLAN20) からみて、少なくとも後述する東西溝SD1072の埋没後に設けた施設であり、SD1060とほぼ同一面で検出していることから、SA1061からSA1060への建て替え (SA1061の存続期間) は、比較的短期であったと考えられる。

SD1072埋  
没後の施設

**南雨落溝SD1063** (PLAN 2・18~20, PL. 57) 南面大垣SA1060の南約1.8mを大垣と並行して走る東西素掘溝。大垣SA1060・1061の南雨落溝と推定される。上下2時期分あり、下層をSD1063A、上層をSD1063Bとする。新しいSD1063Bは幅30~70cm、深さ10~30cmで、東流して次に述べる石敷SX1065を一部破壊する。堆積土は暗褐色粘質土。これより古いSD1063Aは幅約70cm、深さ20~30cm、堆積土は暗灰褐色砂で、この堆積土の上に瓦の小片を敷きつめた下層瓦敷SX1075Aがあり、その上にSX1065が造られている (PLAN20断面図)。SD1063Bからは飛鳥IV~Vの土器が出土している (『年報1999-II』23頁)。第97次調査で検出。

南雨落溝は  
上下2層

SA1061との関係は遺構からは明確でないが、SD1063AがSA1061と併存し、SD1063BがSA1060と併存すると考える。

**石敷SX1065** (PLAN 2・20, PL. 57) 南面大垣SA1060の南にある石敷施設。人頭大の石を密に敷き並べる。上層の雨落溝SD1063Bによって北辺部が破壊されており、SA1063Bとの見切りとなる石はない。また、SD1063Bが調査区の北辺にかかることから、石敷の北方への広がり、および石敷北辺の見切石の存在は明らかでない。石敷東辺は後世の攪乱を受けるが、東南隅と想定される一石が残り、西辺も西に面をそろえた数石が残る。石敷南辺は、東南隅石に連続するとみられる南に面をそろえた石が東部にあるが、西部ではこれより南にも石敷があり、部分的な突出部があるらしい。これらからSX1065の規模は、東西が約8.1m (27尺) で、南北は確認できる部分では幅2.0mで、SA1060とは、その心から2.2~4.2mの位置関係にある。第97次調査で検出。

石敷SX1065の施工は、大垣の南雨落溝SD1063Aの埋没後に、瓦敷SX1075Aを施し、その上に黄褐色土混じりの暗褐色土を置いて石を敷設している (PLAN20断面図)。その後上層雨落溝SD1063Bが掘られ、その埋没後に上層瓦敷SX1075Bを施すという過程をたどる。SX1065の上面の標高は、西部で108.2m前後、東部で108.1m前後であり、上層瓦敷SX1075Bの上面はSX1065とほぼ同高である (PLAN20断面図)。したがって、施工時期には前後があるが、SX1065とSX1075Bは併存するとみられる。

石敷SX1065は、南面大垣SA1060に開く門に伴う施設である可能性が高い。しかし、SA1060の推定柱筋から雨落溝SD1063までは1.8m (6尺) ほどしかなく、ここに四脚門や八脚門のような梁行2間の門は想定できず、梁行1間の薬医門もしくは棟門を想定すべきであろう。この付近からはこの門に使用していたものと考えられる切面戸瓦が14点出土しており、屋根形式は切妻造とも推測している (本文編〔I〕458頁)。薬医門や棟門の屋根形式は、一般に切妻造であり、出土瓦の成果とも整合する。

SX1065は大垣に開く門に伴う施設

一方、SA1060の柱穴が確認できない15.8mの範囲は、先述したように柱間6間分に相当する。石敷の幅8.1m (27尺) が門の基壇の幅とすると、門の桁行は15尺程度であり、柱間1間の大きなものか、柱間寸法の小さな桁行3間の門と推定される。石敷がSA1061に伴う可能性を



含めて、門の規模と形態については今後の周辺の発掘調査の進展を待ちたい。

上下2層の  
瓦 敷

**瓦敷SX1075** (PLAN 2・19, PL. 57・58) 石敷SX1065の周辺で検出した瓦敷。上下2層あり、下層をSX1075A、上層をSX1075Bとする。下層瓦敷SX1075Aは、南面大垣SA1060に伴う下層の南雨落溝SD1063A埋没後に施されており (PLAN19・20断面図)、その範囲はSX1065西端から約11m西方までと、同東端から少なくとも6m東方までで、SX1065より南方への広がり確認できていない。第84次・第97次調査で検出。『年報1999-II』23頁には、出土遺物について以下の記述がある。所用瓦は飛鳥寺創建時のものがほとんどである。他に東南禅院所用の軒平瓦I B、飛鳥IV～Vの土器を含む。SX1075A上の淡茶灰色～灰褐色の砂質土 (『年報1999-II』では茶灰色土) からは奈良時代の土器や東南禅院所用の瓦が出土した。

上層瓦敷SX1075Bは、上層雨落溝SD1063Bが埋没した後に施された瓦敷で (PLAN19・20断面図)、SX1075Aほど整然と瓦を敷き並べておらず、瓦も小片で拳大～人頭大の礫が混じる。瓦敷面の標高は、調査区西端で108.8～108.9mであり、PL. 58-1にみえるように、この付近ではこの面で後述する東西溝SD1072の護岸の石が現れている。SD1072の護岸はややきつい勾配で東方に落ち、SX1075Aよりも下層に位置するが (PL. 57)、SX1075Bは緩やかな勾配で下り、先述のように石敷SX1065とはほぼ同高ですりつく。したがって、SX1075AはSD1072より新しく、SX1075BはSX1065とは施工に前後はあるものの併存するとみられる。一方、SX1075Bが確認できる範囲は、SA1060の基壇縁石列から南方であり、調査区西端より西方に続くことは確実だが、東端については、SX1065の南側で検出しているものの、どこまで続くかは明確でない。南方へはSD1072護岸石周辺、あるいはそれより新しい東西溝SD1071付近までは確認できる。

瓦敷は東西  
道路の舗装  
の一部カ

SX1075Aの性格について、『年報1999-II』23頁では、石敷SX1065の沈下を防ぐための工夫と解釈したが、SX1065よりも広範に敷かれている点を考慮すると、SX1065に先行するこの付近の舗装と考えるのが妥当であろう。南面大垣SA1061に伴う可能性も否定できない。またSX1075Bは、SX1075Aよりもさらに広範に施されており、次に述べる東西道路SF1070で触れるように、SF1070の舗装の一部である可能性がある。

路面幅は  
9.5m前後

**東西道路SF1070** (PLAN 2・18, PL. 58・60) 飛鳥寺寺域東南区画の南面大垣SA1060の南に並行する東西道路。後述する東西溝SD1080を南側溝とする。東西溝SD1071を埋め立ててこの部分を高くし、SD1080付近を低くする造成をおこなって排水方法を変更するとともに、上面を瓦片とバラスで舗装する。舗装面の標高は調査区西端付近で109.2m前後だが、西ほど標高が高いため、SF1070の軸線と直交する位置で比較すると、先述した上層瓦敷SX1075Bの調査区西端の標高より若干高い程度になる。SX1075Bは、人頭大の礫を含む点、および瓦片がやや大きい点がSF1070の舗装と異なるが、これらの礫や瓦は、北方の南面大垣SA1060の崩壊した基壇石積や落下瓦に由来する可能性があり、SF1070と一連の舗装とみることできる。そうした場合、SA1060の南雨落溝SD1063BがSX1075Bの下層にあることから、少なくともSX1075Bを舗装とする道路SF1070では北側溝は存在せず、SF1070の路面はSA1060基壇縁まで広がり、SD1080B北肩からの路面幅は9.5m前後となる。第84次調査で検出。

なお、下層の瓦敷SX1075Aに対応する下層道路の有無に関しては、明確な遺構を検出していない。ただしこの付近の排水は、SD1072→SD1071と変遷し、その後SD1080が担ったと考えられることから、SD1071の埋め立てと、SD1080の開削はほぼ同時と考えられる。その路面にあ

たる位置で掘立柱建物SB1084・1143を検出しているが、SB1084はSD1071を埋めた整地土上に掘られ、南側柱がその後SD1080に破壊されている。したがって短期間に存続した建物であり、SF1070はSD1080の開削をもって機能する要素を整え、SB1084の撤去によって竣工したと考えられる。

**道路南側溝SD1080** (PLAN 2、PL. 58・59・65) 東西道路SF1070の南側溝。幅1.5～2.2m、深さ40～80cm。調査区の東西中央付近に橋状遺構SX1082が存在するとともに、その西方の南岸にのみ石組の護岸を施す。SF1070バラス敷きの下層にあるもの (SD1080A) と、バラス敷きを切り込むもの (SD1080B) の上下2時期に分かれ (Fig. 90)、SD1080Aは40cmほど北岸が北による。SF1070のバラス敷き (≒SX1075B) は、SD1071を切り込んだSD1080Aを覆う整地土上に施されており、またSD1071はSD1072の南岸を切り込んでいる。SD1080Aの南岸は明確でない。第84次調査で検出。

南側溝は  
上下2時期

石組護岸の中ほどには、南から石敷井戸SE1090の排水施設である暗渠SX1094の石組がSD1080Bに張り出す形で合流する。溝の堆積土は、SD1080Aが黄褐色土混じり茶灰色土、SD1080Bが礫や瓦が多い褐灰色土である。南面大垣SA1060と方位が近似し、SA1060心からSD1080Bの北肩までは約11mを測る。出土土器は飛鳥Ⅳ・Ⅴを主体に平城宮土器Ⅲまでを含んでおり (本文編〔Ⅱ〕100頁)、道路SF1070が奈良時代中頃まで機能していた可能性を示す。

奈良時代中  
頃まで機能

SD1080は東西溝SD1071埋め立て後の、この付近の基幹排水路となる。SD1071からSD1080への基幹排水路の変更は、SD1071の検出状況からみて、大規模な土木作業を伴う。またSD1080は、先述のようにSD1075Bとの関係から少なくとも上下2時期を確認しているが、それ以上に浚渫あるいは埋立地を掘り込んだことによる溝壁の崩落を繰り返している可能性がある。そのためか、SD1080Bは、次に述べる橋状遺構SX1082の上流 (西) で、南岸に石組護岸を備えている。南岸東部の検出状況では、東西堀SA1083および掘立柱建物SB1084南側柱の柱穴はSD1080Bに破壊されているが、これらの軸線はおおよそ並行しており、SD1080Bが浚渫あるいは溝壁の崩落を繰り返すうちに、これらの柱穴を浸食したと考えられる。とすれば、SD1080とSA1083やSB1084はほぼ同時期に造られ、この時点 (SD1080Aの初期) では溝幅は狭く (40～50cm)、SA1083やSB1084の柱穴とは干渉せず併存していたと考えられる。その後、SA1083やSB1084が廃絶し、SD1080は存続するうちに南岸が南に広がったと解釈することができる。なお、SB1084の柱穴はSA1083に壊されており、SB1084が先行する。

**橋状遺構SX1082** (PLAN 2、PL. 59) 東西道路SF1070の南側溝SD1080Bに渡した石橋状の遺構

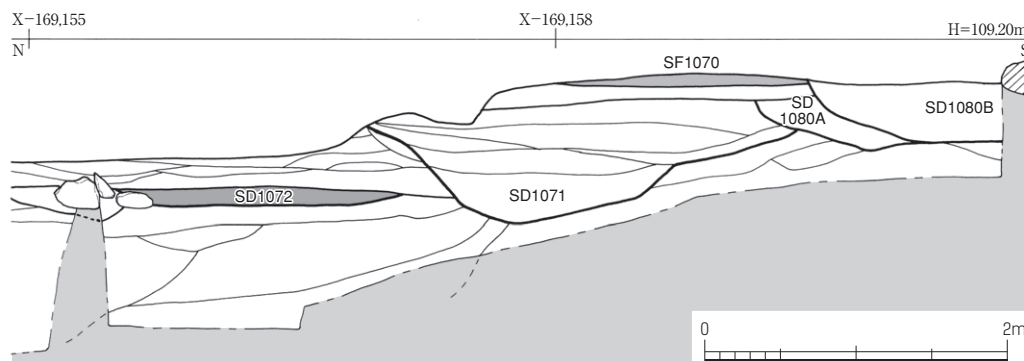


Fig. 90 東西溝SD1080・1071・1072および東西道路SF1070断面図 1:50 (断面位置はFig. 85参照)

(Fig. 91)。SD1080B両岸の最下段に高さ40cmほどの石を据えて、その上に瓦片や砂岩の切石を混じえながら、人頭大の石を1段もしくは2段積み、その上部に長さ70cm、幅40cmの上面が平らな板石を渡して石橋状とする。SD1080Bの溝幅は、SX1082付近で両岸から1.2mほどに狭めている。ただし、これはSD1080Bが幾度も浚渫を繰り返したために溝幅が広がったものとみられ、SX1082部分が構築時の溝幅を残すとみるべきであろう。両岸の石積はそれぞれ1.6m程度の長さをもち、SD1080Bの法面に貼り付くように据えられているが、溝中央部にも人頭大の石があって、一部は転落しているとみられる。SD1080Bを渡る機能を有していたと思われるものの、本格的な橋とするには、最上部の板石が溝幅に比して小さい。SX1082から上流（西）ではSD1080Bが南岸に石組護岸を備えている。下流（東）ではSD1080に沿って東西堀SA1083を検出しているが、先述のように、SA1083はSD1080Aと併存する遺構で、SX1082とは異なる時期の遺構と考えられる。第84次調査で検出。

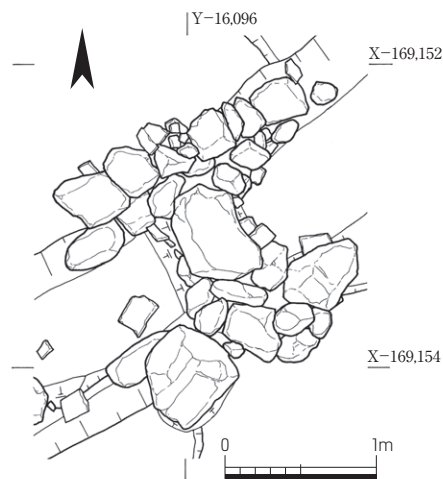


Fig. 91 橋状遺構SX1082平面図 1:50

**東西溝SD1072** (PLAN 2, PL. 60・61) 調査区北辺部にある東西道路SF1070の下層で検出した石組東西溝。調査区西半と石敷SX1065を挟んだ東方で検出した。東西溝SD1071に先行する遺構で、東で北におよそ37°振れる。石組は人頭大の河原石を南に面をそろえてならべており、溝北岸の石と考えられる。南岸は少なくとも調査区西端から10mの範囲では、石などの化粧を施した形跡がなく、底石もない。すなわち北方の施設を意識して、北岸にのみ石を積んだ溝である。北方には東西堀SA1060が建つが、堀と溝の方位が若干異なるため、堀と溝の間は西方で広く、調査区西端付近で12m、調査区中央付近（検出石組東端）では8m程度と狭まる。

溝北岸にのみ石列

調査区西壁付近では、検出面での溝幅が1.0mだが、東に行くにつれて溝の南岸は次に述べる東西溝SD1071で削平されている。西壁付近の遺存する北護岸石最西端上面からの深さは約30cmである。調査区中央付近（石敷SX1065西方）では、PL. 60-1にみるように、北岸の石積は西方からの延長上にあるものの、南半を後述する土坑SK1073で破壊され、溝幅は70cm以上、検出面からの深さは20cm程度である。石組を検出した調査区西半の中央付近（石敷井戸SE1090北方、Fig. 85参照）の断面では、溝幅は1.7m、検出面からの深さは15cm程度である（Fig. 90）。

溝の勾配

溝は北東に向かって下降し、遺存する北岸石組上面の標高は、検出した西端で108.9m、石敷SX1065の西で107.4mを測り、水平距離約24mで1.5m下がる（勾配6.25/100）。ところが、石敷SX1065の東方では、標高107.4m前後とほぼ一定であり、石敷SX1065の西方付近からほぼ水平に近くなり、調査区東端で南北溝SD1066に合流するようである（Fig. 92）。調査区西端付近では北岸の石組が失われており、先述したやや急勾配で西方に続いていたと考えられ、旧地形は調査区中央付近の南北溝SD1066に向けて落ちる、現状とは異なる様相だったらしい。遺構の重複の様相からみて、このSD1072が調査区北辺付近では最も古い遺構である。第84次・第97次調査で検出。

**東西溝SD1071** (PLAN 2、PL. 60) 東西溝SD1072の南にあり、これとほぼ並行する素掘溝。南の東西溝SD1080に先行する (Fig. 90・92)。東北東に流れ、土坑SK1073を切り込んで調査区の東外へ抜ける。上流 (調査区西端部) で幅1.5m以上、深さ45cmを測るが、調査区西半の中央付近 (石敷井戸SE1090北方、Fig. 85参照) の断面では、溝幅は2.8m、検出面からの深さは約80cmである。調査区中央付近 (石敷SX1065西方) では、幅1.7m、深さ60cm、調査区東端部では、幅2.0m、深さ60cmとなる。埋土は最下部が灰褐色の粘土と砂の互層で、流水による堆積を示す。調査区西端と東端の断面をみると、溝の上半部が南に広がり、浚渫されて溝幅が広がった可能性がある。上部の深さ20cmほどは黄褐色～灰褐色の砂質土で埋められている。第84次調査で西半を、一部溝の調査が及ばなかった部分を残して第97次調査で東半部を調査した。埋土からは、飛鳥Ⅳの土器と瓦の小片が少量出土した (『年報1998-II』37頁・『同1999-II』24頁)。

このSD1071は、東西溝SD1072と南北溝SD1066でおこなっていた前段階の排水方法を変更し、東方遺跡で検出した流路SD1700へ排水するために開削した溝とみられる。この排水方法の変更は、北方へ排水していた自然地形の谷を埋めて、その谷を越えて東に排水する地形を造成した結果であり、飛鳥寺域東南区画の確立にとどまらず、北地区の排水方法の変更に大きく関わっている。SD1071には南から合流する溝がないので、南地区および北地区からの排水を担ったのは、SD1071ではないことがわかる。この地形改変によって、これより北方の飛鳥寺域東南区画の土地利用がおよそ可能になったと考えられるが、SD1071は道路南側溝SD1080が基幹排水路として機能する以前の、造成初期にこの付近の排水を担った溝と位置づけられる。

東方遺跡の  
SD1700に  
排水カ

**南北溝SD1066** (PLAN 2、PL. 61) 北地区北辺東部の下層遺構調査で検出した南北溝 (Fig. 92)。溝幅は、SD1066に合流する東西溝SD1072の溝底面 (標高107.2m) 付近で約2.0mを測り、底からの深さは約40cmである。底部は谷に堆積した有機質層 (旧河川SD1176堆積土と考えられる) を

造成初期の  
排水溝

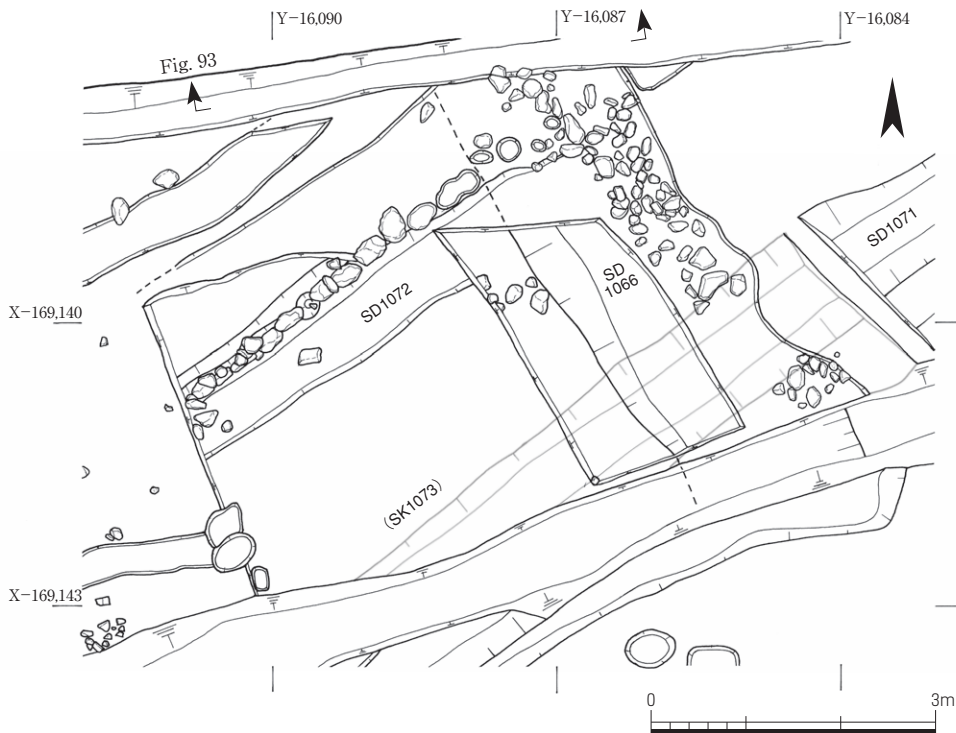


Fig. 92 SD1072とSD1066合流点付近の平面図 1:80

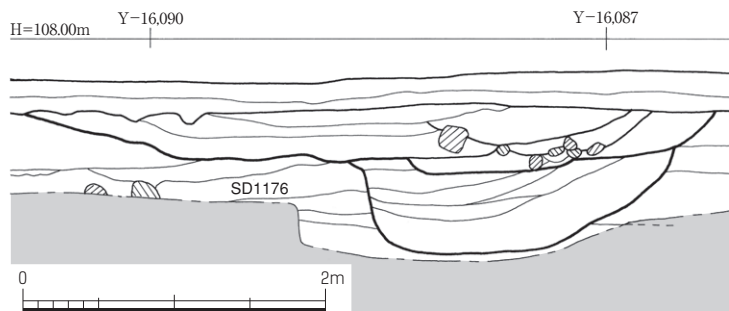


Fig. 93 南北溝SD1066断面図 (第97次調査区北壁) 1:50 (断面位置はFig. 85・92参照)

東岸に一時  
石組護岸カ

掘り込む。調査区北壁の断面観察によると、その後の溝は、東岸は当初位置を保ちながら幅が約4.0m前後に広がり、溝底は当初よりも約60cm浅くなり、深さは30cm程度となる (Fig. 93)。SD 1072との合流点では、当初のSD1066が埋まった段階で東岸に護岸を施したようであるが、すぐに崩落したらしく、人頭大から拳大の石が東岸に沿って敷かれたような状態で出土した。溝底から飛鳥Ⅰの土器が少量出土している (『年報1999-II』24頁)。第97次調査で検出。次に述べる土坑SK1073により、SD1066と東西溝SD1072との合流点付近の上層部は破壊されている。

**土坑SK1073** (PLAN 2, PL. 60) 第84次調査区北辺中央西よりで検出した池状の遺構。深さは約50cm、南北幅は3.4m以上で、底部に木の枝や葉が堆積する。上層の遺構である石敷SX1065や東西道路SF1070の舗装を保存したため、全容が明らかでないが、東方の南北溝SD1066付近まで続くらしい。東西溝SD1072やSD1066の末期の南岸および西岸が明瞭でないのは、この土坑により破壊されているためとみられる。土坑の東西幅は、SD1066の東岸を東端とすればおよそ26mである。北岸はSD1072の北岸を共有するとみられ、南岸は不明である。この土坑が掘られた時期はSD1072より新しく、東西溝SD1071より古い。

滞水しやすい溝の合流点に掘削

先述したように、東西溝SD1072は後代の石敷SX1065の西端付近から東の傾斜は小さく、滞水しやすい構造であった。また南北溝SD1066は当初はやや深い溝だが、埋没に伴い幅の広い溝となる。これらを勘案すると、SD1072とSD1066の合流点付近は、SD1066の埋没によって滞水しやすい状況になっていたとみられ、これらの溝がある程度埋没した段階で、あらためて掘られたのがこの土坑と考えられる。SD1066の様相からみて、この溝による北方への排水能力はあまり高くなく、この付近はこの土坑によって池状を呈していたと考えられる。先述のように、SD1072とSD1066による排水からSD1071による排水方法の変更には、谷を埋める地形の大きな改変を伴い、その後でないと飛鳥寺寺域東南区画の南限施設SA1060・1061や東西道路SF1070の関連施設、および北地区で検出した遺構の大半を造営できない。SK1073とSD1066・1072はその前段階の遺構だが、併存する他の遺構は明確でない。

## C 建物遺構等

### i 井戸

井戸は3基

北地区では奈良時代までの井戸を3基検出した。調査区西辺付近の北と南で検出した井戸SE1090 (北) とSE1160は (南) は、いずれも周囲に石敷を備え、石敷に降りるための階段をも

ち、石敷周囲には溝を施して、さらにそこから排水する石組溝を造る。もう1基は規模のやや小さな井戸SE1159で、北地区東南部で検出した。SE1090では一部抜き取られているが、いずれも井戸枠を残す。ここではこれらの井戸とその関連遺構について述べる。

**石敷井戸SE1090** (PLAN 2・21~24, PL. 68~70) 北地区の西辺北部にある石敷井戸。方形の井戸枠をもつ井戸本体と周囲の石敷SX1091、四周を巡る排水溝SD1092からなり、石組排水溝SD1093と石組暗渠SX1094を通じて北方の道路南側溝SD1080へ排水する。

井戸の構築に際しては、東西6.0m、南北8.5mの範囲を、60~80cm掘り下げ、その側面に人頭大の石を2~3石積んで擁壁とし、掘り下げた底部には拳大の石を敷きつめて床面とする(石敷SX1091)。井戸枠はSX1091の南部やや東寄りに据えられ、ここから北方へ石組排水溝SD1093を造る。井戸周囲の擁壁の遺存状況は、東辺北半ではほぼ完存し、人頭大の石を2石程度重ね、最上部に平坦面をみせる。東辺南半と南辺東半は下部の石のみ残し、東辺南端には短辺が1m以上の大きな板石を立てている。次に遺存状態が良いのは北辺中央部で、人頭大の石を3~4段重ねるが、石積はやや整然さを欠く。北辺の西端部では底部近くの小振りな石のみを残している。西辺北半はやはり2段程度の石を積むが、下段の石は低平に置いており、東辺北半と様相が異なる。西辺中央部には石がほとんど遺存しないが、西南隅部には最下段の石のみを残す。径が50cmほどと東辺や北辺よりもやや大きめの石をやはり低平に配すが、隅は鈍角をなし、南辺西寄りでも鈍角に折れる。擁壁の内法は、東辺が7.2m(階段踏石前面の内法)、北辺が4.8m、西辺が7.0m、南辺が5.2mを測り、北辺と南辺がわずかに内湾する。

周囲に擁壁

石敷SX1091は、井戸周囲の排水溝SD1092の側石を周囲の見切石とし、その内側に拳大の石を敷きつめる。見切石の外側で計測したSX1091の規模は、東西4.0~4.2m、南北6.2m前後である。井戸枠の周囲はその抜取穴で破壊されている。井戸枠からの排水溝SD1093との境は、SD1093の側石を見切石としている。北辺東半の階段との接続部は、排水溝SD1092を通さずに石を敷き詰めるが、SD1092内側の側石の目地が通ることから、当初は排水溝SD1092が階段部分にも巡っていた可能性がある。石敷上面の標高は南端部が108.5~108.6m、東北部が108.4m前後、西北部は108.5m前後。北辺は井戸からの排水溝SD1093を隔てて、東西でわずかに高低差を設けているらしい。

拳大の石敷  
SX1091

石敷SX1091の周囲を巡る排水溝SD1092は、井戸周囲の擁壁を外側の側石とし、SX1091の敷石よりも大きめの石を内側の側石とする。底石は設けない。溝幅は東辺北方で30cm程度と狭いが、東辺南端で50cmほどに広がり、南辺~西辺南半部で60cm、西辺北端で50cm、北辺で60~70cmの規模をもつ。溝底の標高は、東辺北端部で108.4m、南辺で108.5m、北辺で108.2mで、東辺から南辺にかけては石敷面からの深さを10cm前後とほぼ等しくし、西辺から北辺にかけて溝底の勾配を確保している。また、西北隅から北辺西部にかけては、水流の影響とみられる溝状の窪みが形成されている。井戸枠からの排水溝SD1093との西合流部には、拳大程度の見切石をやや乱雑に置いている。

石敷周囲の  
溝SD1092

北辺と南辺のそれぞれ東半には、石敷SX1091に降りる階段が付設されている。北辺の階段は、井戸外周擁壁の軸線に対して若干東に振れ、井戸周囲の排水溝SD1092の北辺外側石を、階段最下段の踏面前面の見切石とする。ここから北方には踏面前面の見切石を3段置き、見切石には一石の長さが75cm程度の凝灰岩質砂岩(いわゆる天理砂岩)の切石をいくつか用いている。

北辺と南辺  
に階段付設

階段の踏面には、石敷SX1091同様の拳大の石を敷き詰め、最上面はさらに石敷を幅90cm程度付設する。見切石を含む踏面の奥行は40～50cmで、蹴上高は一段につき10cm程度である。階段幅は、下から1・2段目が1.5m前後、3・4段目は石組暗渠SX1094の側石が階段側に張り出すために、下から3段目では1.3mほど、4段目では1.2m程度に狭まる。

一方、南の階段は遺存状況が悪く、幅は明確でないが、下から2・3段目の踏面前面の見切石の一部を残しており、規模などは北の階段とほぼ同様と考えられる。階段が取り付く部分と考えられる石敷SX1091の見切石（排水溝SD1092南面内側の側石）に、凝灰岩質砂岩（いわゆる天理砂岩）の切石が少なくとも7石が立った状態で遺存しており、これにより階段幅が1.5m前後と推定される。

上下2段の  
井戸枠

井戸枠は、石敷SX1091の南部やや東寄りに、直径3.5m程度、深さ3.0mの掘方を掘って据えられている。井戸枠の上部約1/3は井戸の廃絶後に抜き取られていた。遺存する井戸枠材は上下2段で構成されている。下段の井戸枠は、長さ140cm、断面16cm×20cmほどの角扇形（いわゆるミカン割り）の長材20本を、内径約1.0mの平面円形に組み合わせている。角扇形の長材には、いずれも上端から約45cm下の両側面に長方形のホゾ穴を穿ち、別材のダボを埋め込んで部材相互を緊結していた。裏込めには、底面から約45cmの高さまで礫を詰め込み、井戸枠内への泥の浸入を防いでいる。

上段井戸枠  
の構造

この下段井戸枠の上に方形の井戸枠を組む。上段井戸枠の構造は、最下部に土居桁を組み、その上に四隅と各辺中央の計8本の束を立て、束の外側に幅の広い横板を置く。横板は各辺ほぼ一枚遺存しており、その上の横板と8本の柱は失われていた。土居桁は下段井戸枠の上に薄い板を挟み込んで水平を調整しながら、長さ150cm、幅12cm、厚さ10cm前後の材を、内法幅が113cmの正方形に組む。土居桁相互は相欠きに組んで、南北方向を上木としていた。この土居桁に束を立てるホゾ穴が、土居桁上の四隅と各辺中央に残る。四隅のホゾ穴間の距離は127cm前後を測り、ホゾ穴の周囲で確認できる風蝕差から、束は径12cmの丸材であったことが分かる。なお、土居桁はいずれも小規模な建物の柱や桁を転用したものである（本文編〔I〕第IV章5節「建築部材」45～48、図版編〔I〕PL.274・275）。横板は幅（高さ）50cm前後、厚さ4cmの板材で、長さは東・西辺に置かれた板が138cm前後、南・北辺に置かれた板が150cm前後である。東・西辺の横板は南・北辺の横板に挟まれる形となり、横板の内法は南北方向が138cm、東西方向が南と北で若干差があるが130cm前後である。上下の横板を緊結するための仕口はない。板材のうち、西辺の1枚とその裏に埋められていたもう1枚の板は、扉板を転用したものである（本文編〔I〕第IV章5節「建築部材」38～40、図版編〔I〕PL.272・273）。西辺の板には、扉の門の釘穴があり、また戯画や墨書が残っていた。井戸枠内からは釣瓶として使用された木製の桶が出土した（本文編〔I〕第IV章2節「木製品ほか」472、図版編〔II〕PL.418）。

石組排水溝  
SD1093

井戸枠から北へ排水する石組溝SD1093は、拳大よりやや大きめの石を側石とし、石敷SX1091が施された範囲の溝底には拳大の石を敷き詰めるが、外周の排水溝SD1092との合流点以北には底石を設けない。溝幅は南端で30cm、それより北方では約40cmを測る。溝底の標高は石敷上面では108.3m前後と明確な勾配をもたないが、SD1092の合流点以北では北に低い勾配をもたせている。またSD1092合流点以北では、北辺の擁壁中央東寄りの石積と一体的に側石を北に延ばし、高さ50cm程度の石を側石の底部に用いている。北ほどさらに石を積み上げて地表面

から1.2mの深さの溝とし、SD1092北辺の擁壁から1.5m北方で石組暗渠SX1094に接続させる。SD1093は、擁壁下の排水溝SD1092の水も受け、SX1094を経て東西溝SD1080に排水する。

石組排水溝SD1093の下流に接続する石組暗渠SX1094は、北辺の階段最上段付近から北に延びる。SD1093が開渠として北に延びたのちSX1094に接続し、その北を6.3mにわたって暗渠とする。石組の内法幅は約40cm、内法高は約70cmで、人頭大の側石を3段前後積み上げる。掘方は幅1.5～2.2m、深さ1.2m前後で、幅50cm、厚さ20～30cmの板石を蓋石とし、隙間に拳大の石や瓦片を詰め込んで埋設する。蓋石上面の高さは108.8m前後でほぼ同高である。北端の東西溝SD1080への出水点では、西方からの流水の逆流を防ぐために、水の流れを北に誘導する石組をSD1080の溝内に張り出すように設けている。この部分の側石間の幅はやや広くなり、蓋石想定位置よりも高い位置に側石が遺存することから、当初から開渠であったと考えられる。以上の石敷井戸SE1090に関する遺構は、いずれも第84次調査で検出した。

石組暗渠  
SX1094

これら井戸関連の遺構から出土した土器の年代は、井戸枠内から飛鳥Ⅳ～Ⅴが、井戸枠の抜取穴から平城宮土器Ⅳ～Ⅴが、石敷SX1091および排水溝SD1092の埋土から飛鳥Ⅱ～平城宮Ⅴが、石組溝SD1093の堆積土から飛鳥Ⅳ～平城宮土器Ⅴが、石組暗渠SX1094埋土から飛鳥Ⅴがそれぞれ出土しており（本文編〔Ⅱ〕121頁）、井戸が奈良時代末に廃絶したことを示している。

出土土器の  
年代

この井戸の東方には、井戸周囲の排水溝SD1092とほぼ軸線を合わせる掘立柱建物SB1135～1137・1141のほか、これらに伴うと考えられる掘立柱塀SA1138・1139・1140などがある。ただし、明確に併存を示すことができる遺構はない。石組暗渠SX1094と併存する遺構も明確でないが、検出した遺構と併存するとしても、これを暗渠とする必然性がない。北地区の北辺を限る遮蔽施設には、東西塀SA1083・1139を検出しているが、SX1094の東方でとぎれ、SX1094までは延びないとみられる。SX1094の存在から、北地区北辺を限る施設として、築地塀あるいは上土塀などの遮蔽施設が併存し、その痕跡が失われていると考えるべきだろう。

暗渠の存在  
から遮蔽  
施設を想定

**石敷井戸SE1160** (PLAN 3・4・25・26, PL. 9・10・11・72) 3条の掘立柱塀 (SA1150～1152) を検出した堰SX1199の西方、西丘陵の裾にある石敷井戸。平面が東西に長い長方形の石敷SX1162と、平面が台形をした四周の石積からなり、石敷と石積の間に溝SD1161が巡る。石積の西辺部には、平面が三角形の階段SX1164を設け、石敷SX1162に降りる施設とする。またSX1162の東南部から東へSD1161の水を排水する石組溝SD1163が延びる。

四周の石積は、北辺で1～2段、高さ30cm、南辺は4～5段、最高で1.1m遺存し、石の背後には20～30cm幅で裏込土を入れている。石積の内法は、北辺が7.3m、南辺が5.3m、東辺が3.5mで、これらはほぼ直交し、斜辺となる西辺は3.7mを測る。この石積と階段SX1164の最上部の位置が一致することから、少なくとも石積の西北部分はほぼ原状をとどめると考えられる。

四周の石積

石敷SX1162は、南北3.0～3.3m、東西4.7m (北辺) の略長方形部分に、階段に接続する石敷の西南隅部に張り出す三角形平面部分を加えた規模で、北方にある先述した石敷井戸SE1090に伴う石敷SX1091より規模は小さいものの、敷かれた石は径約30cmとやや大きい。西北隅と東南隅の隅石には凝灰岩質砂岩 (いわゆる天理砂岩) の切石を配すほか、敷石の一部にもこれを用いている。石敷面の標高は109.0～109.2mで、東辺が低く西辺が高い。

石敷SX1162

石敷を囲む溝SD1161は、内側の側石を石敷SX1162縁辺の石の外側をそろえ、外側の側石は石積とし、底石を施さない、幅20～30cm、深さ5～20cmの石組溝である。石敷SX1162の西南部

石敷を囲む  
溝SD1161



では、石敷と階段SX1164を接続させるため、石敷の上面をそろえて溝を通さない。南辺の溝は西端で石積に沿って鈍角に折れ、階段直下の石敷を一石分残した位置まで延びる。また西辺の溝は、北辺の溝からほぼ直角に南に折れ、外側の側石を階段東辺の見切石とする。この南端は階段最下段の蹴上線から一石ほど南の石敷面まで延びる。

**階段SX1164** 階段SX1164は最上段を周囲の石積上端とそろえ、これを含めると段数は6段5級となる。下から1段目と最上段の石は完存するものの、その間は東部の1石もしくは2石が失われている。西辺の石積下には長径30cm程度の石を用い、これより東の踏面の石は石敷SX1162よりも一まわり大きな長径50cm前後の石を用い、踏面の奥行をほぼ一石の幅で造る構造らしく、蹴上線(南辺)に石の面をそろえている。踏面の奥行は40cm程度、蹴上高は10cm程度で、踏面の幅は、西辺を石積下、東辺をSD1161との見切面とすると、最下段が約1.0m、最上段が約2.0mとなる。下から3段目中央の石は、その高さで石の面からみて移動しているとみられ、本来は現状よりも反時計回りに約45°回転させ、高さも10cm程度低く据えられていたと考えられる。階段下の石敷上面の標高は109.25m、最上段の石敷上面が109.82mで、比高は57cmである。ちなみに最上段蹴上線と一段目蹴上線をつないだ引き通しは15°程度と緩い勾配となる。

**石組溝SD1163** SD1161と接続して東に延びる石組溝SD1163は、幅50cmで、底石はなく、北側石は高さ1石、南側石は井戸周囲の石積から連続し、およそ2石の高さを残す。使用する石は径が30~60cmの花崗岩を主とし、溝の内面に石の平滑な面をそろえている。2石を残す部分で深さは70cmを測る。石の遺存する長さは約5.6m。掘立柱東西塼SA1151を北からくぐって南の水溜SX1220に排水するしくみで、柱を避けるため東で南にやや緩い円弧を描いている。SD1161との接続部の溝底の標高は108.85m、石組の東端付近が108.42mである。東端部は側石が1石転落したような状態で残り、素掘りの掘り込みが石の遺存部から1.3mほど続くが、それ以东には痕跡を残さない。水溜SX1220に向けて標高が落ちる地形であり、石組自体も現状と大きく変わらぬ位置で終わっていた可能性がある。

井戸本体は方約2.5mの平面隅丸方形の掘方を持ち、石敷上面から井戸底までの深さは3.4mで、底には40cmほどの厚さで礫を敷き詰めている。井戸枠は抜き取られているが、残った数本の材から、石敷井戸SE1090と同じように、断面角扇形の材を円形に立て並べる構造であったとみられる。これらの材の大半は建物の桁材を再利用したものようである(本文編〔I〕第四章5節「建築部材」90・92・93、図版編〔I〕PL. 276・277)。これらはいずれも第93次調査で検出した。

井戸枠抜取穴やその周囲からは、飛鳥Vと平城宮III~Vの土器(本文編〔II〕129頁)のほか隅切平瓦(本文編〔I〕468頁)が出土した。掘立柱東西塼SA1151と併存する遺構であることは明らかで、飛鳥池工房期の後期に設けられた井戸と考えられ、北の石敷井戸SE1090と同じく奈良時代末期に廃絶したようである。

**井戸SE1159** (PLAN 3・27、PL. 73) 先述の石敷井戸SE1160

井戸枠抜取  
穴遺存材

奈良時代  
末期に廃絶

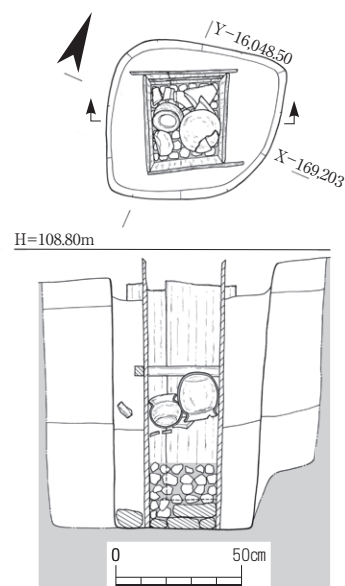


Fig. 94 井戸SE1159平面図・断面図 1:30

と谷を挟んで反対側、3条の掘立柱塀（SA1150～1152）が変遷する堰SX1199の東端付近北側にある小型の井戸。縦板横棧組の井戸枠を高さ1m程度残す（Fig. 94）。井戸掘方は一辺70cmの隅丸方形で、深さは1.1m、井戸枠の内法寸法は一辺約30cmである。井戸枠内には、底部に径15～20cmの川原石を入れ、その上15cmほどに砂利を敷き込んでいる。西・南・東の三方の井戸枠は、厚さ3cm、長さ98～107cm、幅34～39cmの板を立て、南側板に西と東の板の側面を突き付ける。北側板は下段と上段東・同西の3枚からなり、底面から62cmの位置で北面のみに横棧を設けている。横棧は東側板と西側板の端部を欠いて大入れとし、北側板上段の2枚を押さえる。第93次調査で検出。井戸枠の内部からは、飛鳥Ⅳの土師器甕6個体（本文編〔Ⅱ〕128頁）が一括投棄された状態で出土した。重複する南北溝SD1204より古く、また、位置関係からみて石敷井戸SE1160とは併存しないと考えられる。出土遺物を勘案してもSE1160より古く、SE1160の開削に合わせて廃絶したと想定できる。

縦板横棧組  
の井戸枠SE1160  
開削と共に  
廃絶カ

## ii 掘立柱建物

北地区では、奈良時代以前の掘立柱建物を9棟検出した。SB1134とSB1135は柱穴に重複があり、新古が判明するが、他は重複がない。規模からみて、中心的な建物は北地区中部北よりで検出したSB1141とSB1134だが、これらは近接しているため併存しないと考えられ、棟の向きが異なるものの、規模が近似することから建て替えとみられる。規模が明確でない建物もあるが、ここではこれらの建物について解説する。平安時代の掘立柱建物SB1154とSB1155などは、次節の「平安時代以降の遺構」（145頁～）で述べる。

**東西棟建物SB1084**（PLAN 2、PL. 62・65） 調査区北辺中央部の石敷SX1065の南東で検出した総柱の掘立柱東西棟建物。桁行3間、梁行2間で、棟方向は東北東－西南西。西南隅および北側柱の東北隅から第2柱穴は確認できなかった。桁行の柱間寸法はややばらつきがあるが、平均すると2.1m（7尺）、梁行は2.4m（8尺）ほどである。柱掘方は一辺が1m前後の方形で、深さは棟通りで40～50cm残り、掘方底面の標高は107.3～107.5mとはほぼ一定である。柱はいずれも抜き取られており、抜取穴の大きさから推定できる柱径は、約20cmである（Fig. 95）。

東西道路SF1070バラス敷きの下層で検出した遺構で、東西溝SD1071より新しく、南側柱が東西塀SA1083や東西溝SD1080によって破壊されており、短期間存続した建物らしい。第84次調査で検出した。

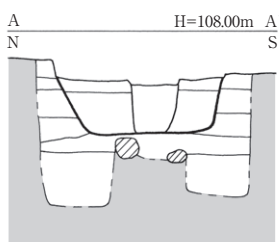
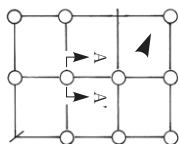
短期間存続  
の建物

Fig. 95 SB1084柱穴断面図  
1:50

**南北棟建物SB1141**（PLAN 2、PL. 65） 調査区西辺北部の石敷井戸SE1090の東方に建つ桁行6間、梁行2間の掘立柱南北棟建物。棟方向は北北西－南南東で、東西道路SF1070やその南側溝SD1080の軸線と直交する。全長は桁行15.0m、梁行5.4mで、柱間寸法は桁行が約2.5m（8.3尺）、梁行は2.7m（9尺）。桁行は総長を50尺（5丈）として6等分したらしい。柱掘方の平面は一辺1.0m前後の隅丸方形で、深さは60～80cmと比較的しっかりしており、柱はいずれも抜き取られている（Fig. 96）。第84次調査で検出。

桁行は総長  
50尺を6等分

すぐ西にある石敷井戸SE1090は、およそ軸線が合うため併

井戸SE1090  
とは別時期

存する可能性も否定できないが、北地区の遺構の密度を勘案すると、両者は近接しすぎる感があり、異なる時期の遺構と考えるのが妥当だろう。

**東西棟建物SB1134** (PLAN 2、PL. 66) 石敷井戸SE1090と石組方形池SG1100との間に建つ掘立柱東西棟建物。桁行6間、梁行2間で、全長は桁行14.7m、梁行5.4m。棟方向は東北東-西南西だが、重複する位置に建つSB1135や、石敷井戸SE1090の東に建つSB1141などとは軸線の振れが異なる。柱間寸法はやや不規則で、桁行が2.1~3.0m (7~10尺)、梁行が2.7m (9尺)等間。柱掘方は0.8~1.2mの隅丸方形で、深さは35~65cm。柱穴底面の標高を108m前後にそろえ、また掘方内部を層状に埋め戻す柱穴がある (Fig. 97)。『年報1998-II』37頁ではSB1141と平面規模が一致するとしたが、柱間数は同じながら実長はSB1134の方が若干小さい。重複する掘立柱建物SB1135より新しい。第84次調査で検出した。

SB1141の  
建て替え

西方のSB1141とは柱筋間で2.0mしか離れず、軒がぶつかる位置関係にあること、規模がSB1141と同程度であることから、SB1141とは建て替えの関係にあると推定される。

**掘立柱建物SB1135** (PLAN 2) 掘立柱建物SB1134に重複する位置に建ち、これよりも新しい。桁行・梁行ともに2間の掘立柱建物。柱間寸法はいずれも2.1m (7尺)で、棟方向は明確でない。建物の軸線は、SB1141とほぼ同じ振れをもつ。柱掘方は一辺が50~90cmの隅丸方形で、深さは隅の柱穴が70~80cmと深く、西北隅の柱痕跡から推定される柱径は20cm。一方、中間の柱穴

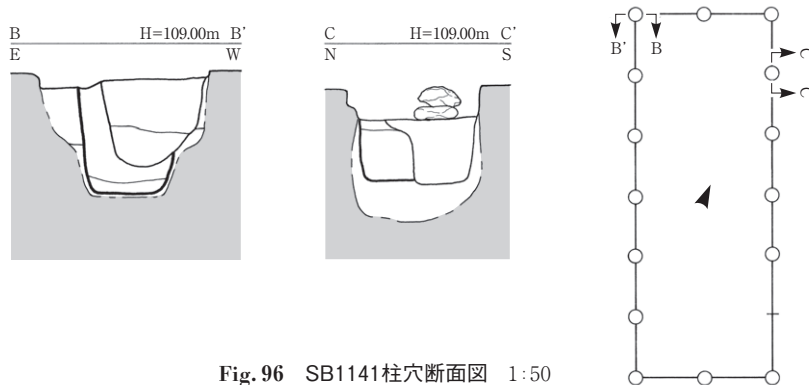


Fig. 96 SB1141柱穴断面図 1:50

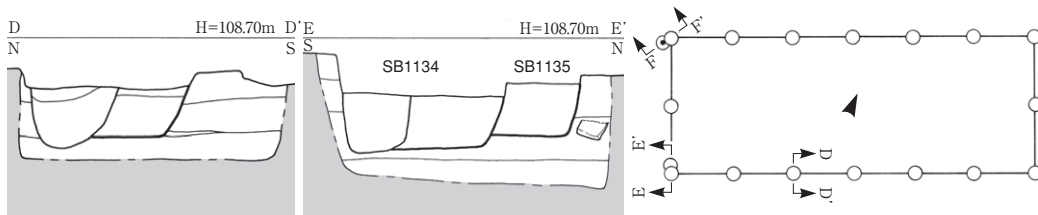


Fig. 97 SB1134柱穴断面図 1:50

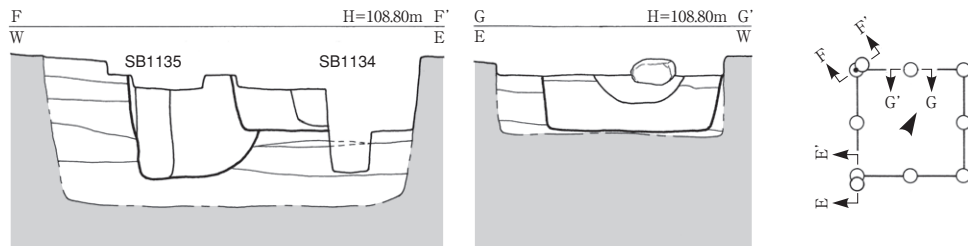


Fig. 98 SB1135柱穴断面図 1:50

は35～40cmと浅く抜取穴も明確でない (Fig. 98)。第84次調査で検出。北東に位置する掘立柱建物SB1137とおおよそ同規模であり、先後関係は不明ながら建て替えであろう。

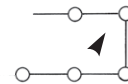
SB1137とは  
建替の関係

**東西棟建物SB1136** (PLAN 2, PL. 66) 東西棟建物SB1134の北東に建つ掘立柱東西棟建物。桁行4間、梁行2間で、棟方向は東北東-西南西。柱間寸法は、桁行が約2.3m (7.6尺)、梁行が1.6m (5.3尺) 前後で、建物全体で桁行30尺、梁行10尺で計画されたとみられる。柱掘方の平面は、一辺0.5～1.0mの隅丸方形で、深さは20～35cm。柱穴の断割をおこなった4基のうち3基で柱痕跡を残し、ここから柱径は20cm前後と考えられる (Fig. 99)。SA1138・1139、SB1141などと軸線が合う。第84次調査で検出。

**南北棟建物SB1137** (PLAN 2, PL. 66) 東西棟建物SB1134の北方に建つ桁行・梁行ともに2間の掘立柱建物。北北西-南南東に棟をもつ建物で、柱間寸法は桁行が2.4m、梁行が2.0mである。中間の柱穴の平面は隅柱よりもやや小さく、深さは15～30cmと浅い。西面中央柱に残る柱痕跡から復元できる柱径は約10cm (Fig. 100)。第84次調査で検出。SB1135とほぼ同規模で建物の振れも近似することから、SB1135とは位置を違えた建て替えとみられる。

SB1135と  
ほぼ同規模

**東西棟建物SB1143** (PLAN 2, PL. 62) 調査区西北隅付近で検出した上層瓦敷SX1075B (116頁) の下層で検出した桁行2間以上、梁行1間の掘立柱建物。南



上層瓦敷  
下で検出

側柱東第3柱穴は調査区西壁に掘方のみかかる。建物の軸線は、東西道路SF1070と同程度の東北東-西南西の振れをもつ。柱間寸法は、東西が2.1m (7尺) 前後、南北が2.4m (8尺) 前後で、建物の東端と考えられる。柱掘方は一辺約1mの隅丸方形だが、深さは瓦敷下の遺構検出面から20～30cmと浅いうえ、抜取穴を明確に検出できていない柱穴が多く、上部は削平されているらしい。掘方底部の標高は108.3m前後である。第84次調査で検出。

この南にある東西溝SD1072溝底の標高が108.4～108.5mで、溝底よりも柱穴底が低いが、南方および北方 (第97次調査区) では柱穴を確認できず、梁行1間の東西棟建物と考えざるをえない。建物の建立時期は確定できないが、上部が削平されている様相は東西溝SD1072と似ており、南面大垣SA1061より古いとみられる。SF1070上に建つ東西棟建物SB1084と同様、短期間に存在した建物と想定される。

短期間  
存在の建物

**南北棟建物SB1146** (PLAN 2, PL. 63) 石組方形池SG1100の南西にあり、棟方向を北北西-南南東とする桁行3間、梁行2間の掘立柱建物。西側柱と南妻の計6基の柱穴を確認した。北妻

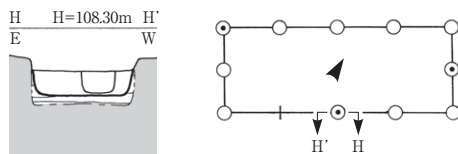


Fig. 99 SB1136柱穴断面図 1:50

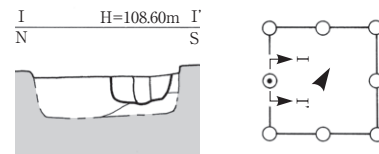


Fig. 100 SB1137柱穴断面図 1:50

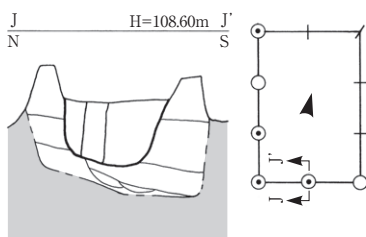


Fig. 101 SB1146柱穴断面図 1:50

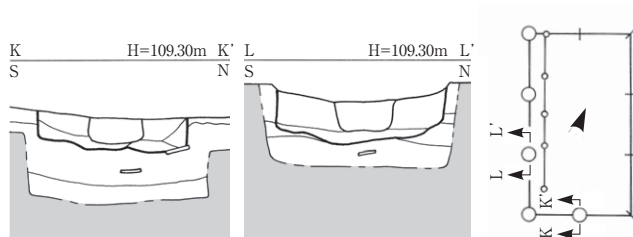


Fig. 102 SB1147柱穴断面図 1:50

柱痕跡を  
多く残す

および東側柱の柱穴は検出できていないが、西側柱の北延長上、および南側柱の東延長上には柱穴を認められず、建物の規模は確定できる。柱間寸法は桁行が1.9m、梁行が2.0m。柱掘方の平面は0.7~1.0mのほぼ方形で、検出面からの深さは40~60cmと比較的深く、柱痕跡を残す柱穴が多い。柱痕跡から知られる柱径は約15cmである (Fig. 101)。他の柱穴は東西方向のサブトレンチや中世の東西溝SD1127で削平されたと考えられる。SB1134と軸線が合う。第84次調査で検出。

**南北棟建物SB1147 (PLAN 3)** 石敷井戸SE1160の北方にある桁行3間、梁行1間以上の掘立柱建物。棟方向は北北西-南南東で、柱間寸法は抜取穴位置を基準にすると、桁行が2.0~3.0mとばらつきがあり、梁行は2.1m (7尺)。柱掘方は1.0~1.2mと大きいものの、深さは25~40cmと浅い (Fig. 102)。第84次調査で検出。

床 束 の  
小柱穴列カ

掘方底部の標高は108.7~108.8mで、東半部の遺構検出面はこれより低く、柱穴は確認できなかった。北方の遺構検出面も低くなるが、もう1間程度であれば検出できる標高であり、桁行は3間とみられる。また、西側柱に添うように東方に5基の小柱穴 (径30cm前後) が並んでおり、建物の床束の可能性もある。

SD1110より  
新しい建物

北地区の水処理施設で述べた東西溝SD1115とおよそ重複する位置にあり、SD1115が検出できているにもかかわらず、SB1147の東側柱は削平されている。谷の堆積が深くなったのちに掘られ、その後削平を受けたと考えられる。南北溝SD1110が機能していた時期には併存せず、平安時代の遺構の可能性も否定できないが、南北溝SD1103が機能する時期の遺構と考えておく。

### iii 掘立柱塀

北地区では掘立柱塀を20条ほど検出した。調査区北辺で検出したSA1060とSA1061は本節Bの飛鳥寺寺域東南区画と東西道路の項で述べたので、それ以外の掘立柱塀について記す。谷の水を石組方形池SG1100へ導く南北溝SD1110の西方には、SD1110をまたぐ橋状遺構SX1149を境に南方に南北塀SA1120、北方に南北塀SA1121が接続する。そして、西方からこれらの南北塀に接続する東西塀が6条あり、このうち3条は塀の北に東西溝を並行させている。さらにこれらの南北塀をくぐる木製の暗渠も検出している。これらの暗渠は、南北大溝SD1130の埋立地に造られたもので、SA1120・1121によってその西側が南北溝SD1110と分断されたため、排水に苦労したとみられ、東西溝を掘りSA1120・1121をくぐる暗渠を造ってSD1110に排水したものと考えられる。東西溝に沿う東西塀の機能は明確でなく、さらに、こうした水処理の根本的な目的も明確でない



Fig. 103 北地区の主要遺構断面図の位置  
1:600

が、北方に併存する諸施設の保全とも推察される。石組方形池SG1100の北西には、区画の東と北を形成する直交する塀をいくつか建てており、北方に造られた飛鳥寺寺域東南区画とそれに伴う東西道路に関連する北地区の遮蔽施設と想定される。調査区北辺付近には、東西道路SF1070の南側溝と考えられる東西溝SD1080の初期に並行する東西塀SA1083を建てており、これが北地区では古い時期の塀になる。ここでは遺構番号順にこれらの掘立柱塀について解説する。

**掘立柱塀SA1081** (PLAN 2、PL. 59) 調査区西北部、東西道路SF1070の南側溝SD1080の溝内で検出した3基の柱穴列。柱間寸法は約1.9m (6.5尺)。柱掘方の平面は一辺1.0m前後のほぼ方形で、SD1080溝底からの深さは中央の柱穴で約60cmある。柱穴はSD1080の底がある程度埋まった段階で掘られ、柱を抜いた後に再びSD1080が機能している。SD1080A・Bとの関連は明確でない。一時的に橋などの施設を設置したが、水流などの関係で撤去したものか。次に述べるSA1083とは異なる遺構とみられる。溝の機能時に掘られ、また廃絶しており、塀などの遮蔽施設とは考えにくく、橋の可能性もあるが、調査区西辺にかかって全体の規模も明確でないことから、ひとまず塀として報告する。第84次調査で検出。

SA1083が古い時期の塀

一時的な橋

**東西塀SA1083** (PLAN 2、PL. 65) 東西道路SF1070の南側溝SD1080の南岸に重複し、それと並行する掘立柱塀。SD1080で柱穴の北半が破壊されており、溝の南岸法面で柱穴の南半を検出した。調査区東端から橋状遺構SX1082付近まで15間分、全長約27mを確認した。柱間寸法は1.8m (6尺) 等間。柱掘方は破壊されて平面の形状は明確でないが、一辺0.6~1.0mの方形と考えられ、深いもので検出面から80cm以上残存し、SD1080の底面より深いものもある。黄褐色土を埋土とする柱抜取穴をもち、ここから復元できる柱径は25cm程度である。途中、総柱建物SB1084の柱穴を破壊しており、これより新しい。SD1080で破壊されているのは、先後関係を示すものでなく、SD1080が浚渫を繰り返すうちに南岸が南に広がり、SA1083の柱穴を破壊するようになったと推察される。軸線が並行することからSD1080とほぼ同時期に造られ、また検出状況が示すように、廃絶はSD1080よりも早かったと考えられる。すなわち、SA1080Aと併存し、SD1080Bに柱穴が壊されていると解釈できる。この場合、SD1080に代わる遮蔽施設は、東西塀SA1139などに変化したと解釈することができよう。北地区の北辺を画す重要な塀と考えられる。

北地区北辺を画す塀

このSA1083はSD1080Bに設けた橋状遺構SX1082とは併存せず、SX1082以西はSD1080南岸護岸石のために明確でない。調査区西端部にその延長部を検出できないため、SD1080南岸護岸石に覆われた部分でとぎれるとみられる。SA1083の軸線は先述のようにSD1080とほぼ同じだが、東西道路SF1070や飛鳥寺寺域東南区画の南面大垣SA1060ともほぼ並行し、これらは一連の造営にかかると想定するのが自然だろう。

南面大垣や東西道路と一連の造営

**東西塀SA1086** 北地区の南端付近、東西溝SD1115の南方にある掘立柱塀 (Fig. 104)。4間分を検出し、東端で南北塀SA1120に接続する。全長は約7.6mで、柱間寸法は、西から1.8m、2.0m、1.5m、2.3mと不規則である。東端の柱間を木樋SX1114がくぐる。柱掘方は径30~40cmのほぼ円形である。東西溝の南に位置し、東端で南北塀SA1120・1121に接続する東西塀は、このほかにも後述するSA1087やSA1088などがあり、同様の性格の塀であろう。第84次調査区にかかるとは推察される。軸線が並行することからSD1080とほぼ同時期に造られ、また検出状況が示すように、廃絶はSD1080よりも早かったと考えられる。すなわち、SA1080Aと併存し、SD1080Bに柱穴が壊されていると解釈できる。この場合、SD1080に代わる遮蔽施設は、東西塀SA1139などに変化したと解釈することができよう。北地区の北辺を画す重要な塀と考えられる。

**東西塀SA1087** (PLAN 2) 南北溝SD1110に架かる橋SX1149の北西にあり、東西溝SD1118の

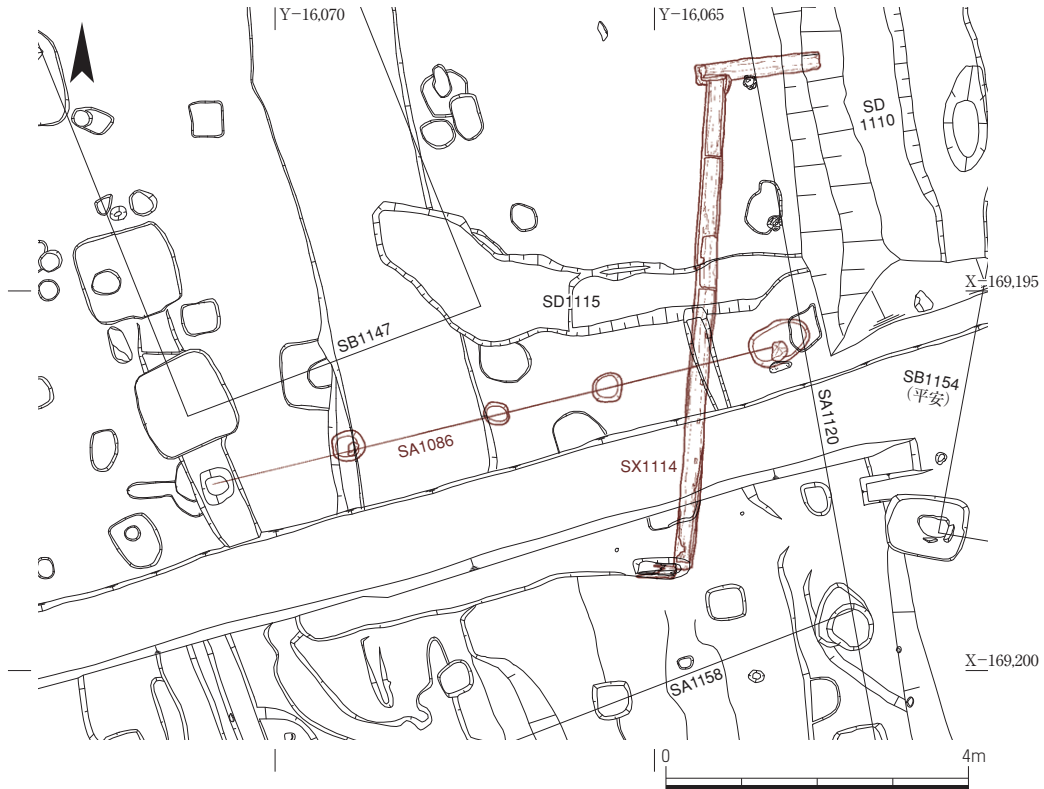


Fig. 104 東西溝SA1086とその周辺の遺構 1:100 (赤線は下層調査で確認)

南で並行する4基の掘立柱穴列 (Fig. 111)。全長は約4.4m。柱筋の通りが悪く、柱間寸法も1.3~1.6mとばらつくが、一連の掘立柱塀の遺構と解釈した。柱掘方は平面略円形で、径が30~40cmと小規模である。深さは不明。東端はSA1121に接続か。第84次調査で検出。

**東西塀SA1088 (PLAN 3)** 南北溝SD1110に架かる橋SX1149の西北隅柱付近を東端とする掘立柱塀。柱掘方はほぼ円形で、径40~50cm、深さ約50cm。柱抜取穴を伴う柱穴5基が東西に並ぶ (Fig. 111・113)。全長は約3.2m。柱間寸法は0.5~1.2mとばらつくため、長さ2間の東西塀がほぼ同位置で改修されている可能性がある。その場合、橋SX1149西北隅柱穴を共有し、柱間寸法が東から1.5m、1.3mの東西塀と、橋SX1149西北隅柱穴に近接した柱穴を東端とし、柱間寸法が東から1.2m、1.9mの東西塀の2条に復元できる。第84次調査で検出。

改修された  
2条の塀カ

**南北塀SA1120・1121 (PLAN 2・3・29, PL. 18・20)** 石組方形池へ導水する南北溝SD1110の西を並行して走る掘立柱塀。3条の塀が変遷する堰SX1199の北方に建つ平安時代の掘立柱建物SB1155北側柱と重複する柱穴を起点にすると考えられ、SD1110を横断する橋SX1149南側柱まで9間分をSA1120とし、SX1149の西北隅柱を共有してさらに北方に延びる塀をSA1121とした。SA1121はSX1149から3間でやや西に方向を変え、ここから北方に少なくとも2間延びるが、北端は鎌倉時代とみられる東西溝SD1127で壊され不明。その北延長上に柱痕跡状の穴や柱掘方らしき穴が断続的に認められ、石組方形池SG1100の西付近までは延びていた可能性がある。全長は、SA1120が約16.1m、SA1121が確認できる北端の柱穴まで約7.1mである。柱間寸法は、SA1120では、南から3・5間めが約1.5m、4間めが約2.2m、その他は約1.8mである。SA1120の南から5間めには東西溝SD1115が開渠のままぐり、7間めには平面クランク形の木樋暗渠SX1114がくぐる (Fig. 104)。一方、SA1121の柱間寸法は、南から1.8m、1.5m、0.8m、

橋を境に北  
と南に区分

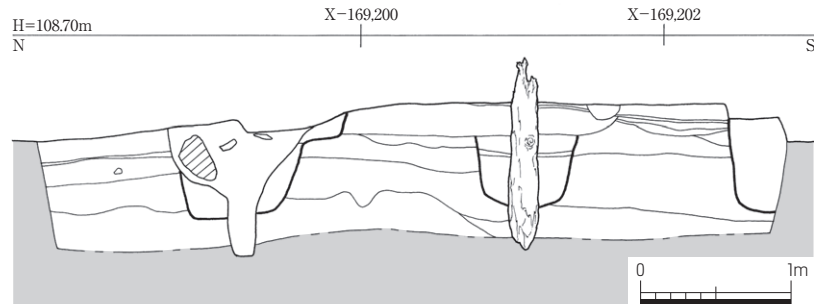


Fig. 105 南北堀SA1120柱穴断面図（南から第1～3柱穴） 1:50（断面位置はFig. 103参照）

1.2m、1.8mと不規則である。南から1間めで東西溝SD1116からの暗渠SX1175がくぐり、2間めには石敷SX1122が施されて堰SX1111へ接続する（Fig. 111）。このためSA1121の南から2間めは扉口と推定される。また南から5間めには暗渠SX1119がくぐる。

SA1120・1121の柱掘方は、一辺70～80cm、深さ40～80cmで、SA1120では南から第2柱穴と第6・7柱穴の3カ所に柱根を残す（PLAN29掲載の断面図が第6・7柱穴にあたる。本文編〔I〕第四章5節「建築部材」102・115・116が、それぞれSA1120の南から第2・6・7柱穴の柱根に相当する。図版編〔I〕PL. 282）が、それ以外はすべて抜き取られていた。遺存する柱は直径16～18cm、長さ1.2～1.6mあり、すべて下端を尖らせている。抜き取られたものも含めて、柱の下端は掘方の底から20cmほど深く沈下しているものが多い。SA1120の柱掘方は、南北大溝SD1130を埋め立てた後に掘削しており、柱を立ててから30～40cmの厚さの整地がある。あるいは基壇状に盛土したものかもしれない。とすれば、SD1110の西岸の堤防としても機能したと推察される。このため、SA1120・1121の西方の土地の排水には、SA1120・1121をくぐる暗渠を設ける必要があったことが理解できる。SA1120の柱抜取穴はこの整地（基壇状盛土）の上から掘られており、柱掘方とは掘削層位に上下がある（Fig. 105）。第84次・第93次調査で検出。

3カ所に  
柱根遺存

**東西堀SA1124**（PLAN 3、PL. 67）北地区中央付近の東西踏石列SX1123・1174の北に沿う東南東－西北西方向の掘立柱堀。南北溝SD1110の西方で柱穴6基、SD1110を越えた東方で柱穴1基を確認した（Fig. 111）。これらの全長は約15.7mを測る。南北堀SA1121と交差し柱穴を共有するが、この共有する柱穴を除き、西方の第6柱穴（西端から第2柱穴）は後世の土坑に破壊されている。柱間寸法は1.9～2.2m。柱掘方は30～50cmの円形～方形。SA1121と交差する柱穴には径12cm程度の柱痕跡を残し、掘方の底部よりも25cm程度沈下している。東方は中世の東西溝SD1112によって破壊されているため、さらに東方に続くかどうかは不明である。西端も明確でないが、後述する南北堀SA1145に接続するか、軸線をやや南に振った北東－南西方向に、柱間寸法が3.0m前後で並ぶ3基がこの堀の延長部になるか、いずれかと考えられる。なお、SA1121と共有する柱穴を除き、ここから西へ第2・3柱穴には、その北方30～40cmの位置に径30cm程度の平面円形の柱穴を伴う。補強用の控柱であろうか。第84次調査で検出。

SD1110を越  
えて延びる

性格は不明だが、南北溝SD1110を越えて連続するのはこの堀のみであり、堰SX1111や石敷SX1122、踏石列SX1123・1174などと併存するなどの点も、この堀の特徴である。

補強用の  
控柱カ

**南北堀SA1132**（PLAN 2）石組方形池SG1100の西方にある掘立柱堀。柱穴は北端を含め5間分6基、全長12.8mを検出した。北端で西に折れて東西堀SA1133となる。柱間寸法は2.3～3.0m（7.5～10尺）とやや不規則である。柱掘方は、径50cm程度の円形をなすものが多いが、南端



の柱穴は径1.0mほどと大きい。北端のSA1133と共有する柱穴は掘立柱東西棟建物SB1136と重複し、それより新しい。また土坑SK1128よりも新しく、SK1128などを完掘したためPLAN 2に表現できていない柱穴が1基ある。さらに、次に述べる東西塀SA1133との交点を含め北から第2柱穴も、存在していたもののPLAN 2には表現できていない。柱穴の深さは不明。柱間寸法が若干そろわないなど掘立柱建物SB1134と共通点があり、柱穴の規模から区画塀のような高い塀とは考えにくく、SB1134の目隠塀的な性格の施設とみられる。

SB1134の  
目隠塀カ

**東西塀SA1133** (PLAN 2) 掘立柱建物SB1134の北方2.5mにあり、南北塀SA1132の北端から西に折れる掘立柱塀。SB1134とは厳密には並行せず、西方で狭く東方で広い。東端で南北塀SA1132に接続する。検出した柱穴は東端を含め4基(東端とこれを含め東から第8・9・12柱穴)で、西端はSB1141東側柱の東で確認した。全長は約19.8mを測り、柱間寸法は1.8~1.9mと推定され、11間になるものであろう。柱掘方は径50~80cmの円形で、深さは断割調査がなく不明だが、削平されている柱穴が多く、さほど深くないとみられる。SA1132と同性格で、SB1134の目隠塀と考えられる。第84次調査で検出。

SB1133も  
目隠塀カ

**東西塀SA1139** (PLAN 2, PL. 59・64・65) 東西道路SF1070の南側溝SD1080の約3m南を並行して走る掘立柱東西塀。軸線は東北東-西南西。西端は橋状遺構SX1082付近でとぎれ、東端で南北塀SA1138に接続する。全長25.7m、11間分を検出。柱間寸法は一部乱れはあるが2.4m(8尺)ほど。柱掘方の平面は一辺0.7~1.0mの隅丸方形で、深さは30cm程度。径10~15cmの柱痕跡をもつものがある。東端の柱穴には重複があり、古い柱穴(南)が深さ60cm、新しい柱穴(北)が深さ30cmで(Fig. 106)、深さをみると、後者はSA1139と共通し、前者がSA1138と共通する。この塀の東延長部にも柱穴らしい遺構があるが、断面はごく浅く、一連の柱穴とは認めがたい。第84次調査で検出。

SA1139の西端は、先述のように橋状遺構SX1082付近でとぎれるが、ここは南北棟SB1141の東側柱北延長部にあたり、軸線もSB1141とほぼそろうことから、これと併存する施設であろう。また、北方に並行する東西塀SA1083の西端は、SX1082の構築によって破壊されている可能性があり、正確にはわからないものの、SA1139の西端とおおよそ合うみられる。したがって、SA1083とSA1039は建て替えの関係にあると考えられ、北地区の北辺を画す重要な塀と位置づけられるだろう。先後関係は、SA1083の項で述べたように、SA1083が先行するとみられる。

SA1083の  
建て替え

また、石敷井戸SE1090の項で述べたように、SE1090から道路南側溝SD1080に注ぐ石組暗渠SX1094の存在から、SX1094の上を通る遮蔽施設(築地塀もしくは上土塀)が想定でき、遺構は検出できていないものの、SA1139の位置に北地区の北辺を限る

遮蔽施設が後出すると考える。

遮蔽施設が  
後出と推定

**南北塀SA1138** (PLAN 2, PL. 67) 東西塀SA1139の東端で直交する掘立柱南北塀で、7間分、全長15.7mを検出した。柱間寸法は広狭あるが、およそ2.3m(7.5尺)とみられる。柱穴の平面は一辺0.7m前後の隅丸方形で、SA1139より小さいものの深さは60cmほどあり、SA1139の柱穴よりも深い。SA1139と共有する北端の柱穴には重複があり、古い柱穴が深さ60cmとSA1138と共通する(Fig. 106)。第84

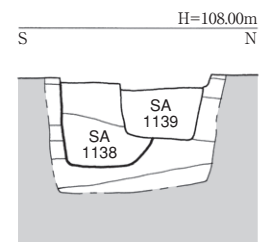


Fig. 106 南北塀SA1139  
東端の柱穴断面図 1:50

次調査で検出。

SA1138を北に1間延ばすと、東西堀SA1083と直交する形となるが、交点の位置に柱穴が認められないことから、SA1083とは併存せず、上記のように東西堀SA1139と直交すると考える。

**南北堀SA1140** (PLAN 2、PL. 67) 東西堀SA1139の西端付近から南東方向に延びる掘立柱堀。4間分、全長約9.0mを検出し、柱間寸法は約2.3m (7.5尺)。柱穴は抜取穴が掘方より大きいものがあるが、おおむね径0.8~1.0mの不整円形である。北端の穴の深さは1mほどあり、径約20cmの柱痕跡を残す。第84次調査で検出。

SA1140の軸線は、東西堀SA1139やSA1133とは直交しない。北端の柱穴はSA1139と共有する形にはならないが、SA1133とは、その西端から第2柱穴位置で接続すると考えることが可能である。したがってSA1133と併存する施設と考えておく。SA1140の北延長部にある橋状遺構SX1082と関連する施設であろうか。

SX1082の  
関連遺構カ

**南北堀SA1145** (PLAN 2・3、PL. 67) 北地区西辺で検出した2つの石敷井戸SE1090とSE1160の間にあり、掘立柱建物SB1141の南妻中央やや東から南南東に延びる4間の掘立柱堀。全長13.3mを検出した。柱間寸法は約3.3m (11尺) と大きい。柱掘方の平面は一辺が0.7~1.0mの隅丸方形で、柱穴の深さは40cm前後あり、柱は抜き取られている。南端の柱穴は小さく、同一遺構でない可能性もある。第84次調査で検出。

振れは北の南北堀SA1140や、調査区東端近くの南北堀SA1138に近似する。この堀が南北棟建物SB1141の南妻付近から南に延びること、SA1138北端から西に延びる東西堀SA1139がSB1141の東側柱の北の延長位置で終わる点などを勘案すると、これらは同時併存する可能性が高い。さらに、この堀の南端付近にある東西堀SA1124と接続する可能性もある。

SA1124に  
接 続 カ

**東西堀SA1156** (PLAN 3、PL. 20) 南北堀SA1120の南端から西南西に延びる掘立柱堀で、SA1120とはやや鈍角に接続する。2間分、全長約3.0mを検出した。掘方の平面は40cmほどで、柱間寸法は1.5m。中間の柱穴には杭状に先端を尖らせた径16cm、長さ79cmの柱根を残すが、これはSA1120出土の柱根(本文編〔I〕第IV章5節「建築部材」102・115・116、図版編〔I〕PL. 282)と形状が共通する。第93次調査で検出。

**東西堀SA1158** (PLAN 3、PL. 20) 石敷井戸SE1160の北方から東へ延びる掘立柱堀。軸線は東北東-西南西で、4間分、全長約12.8mを検出した。SE1160外周西辺の石積とほぼ直交し、東端は南北堀SA1120に接続すると考えられる (Fig. 104)。柱間寸法は3.2m前後と大きい。西端の柱穴はやや東西に大きい、その他の柱穴は一辺が40~60cmの隅丸方形~円形で、深さは20~40cm。柱穴底の標高は西端で109.1m、東端のSA1120に接続する手前では108.2mと地形に沿って東方が低くなる。東方の2基の柱穴には抜取穴があるが、西方の2基の柱穴には径20cmほどの柱痕跡を残す。第93次調査で検出。

SE1160西辺  
石積と直交

**南北堀SA1167** (PLAN 3) 石敷井戸SE1160の北方から北北西に延びる2間分の掘立柱堀。柱間寸法は南から4.6m、3.7mと広く、中央の柱掘方各辺の向きが軸線と合わないが、一連の遺構と判断した。柱掘方の平面は一辺が方形~長方形で、60~90cmと大きいものの、深さは検出

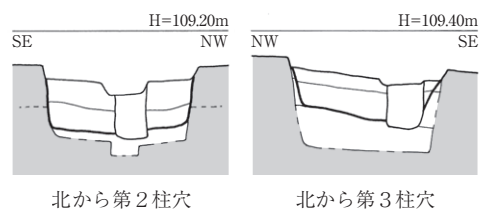


Fig. 107 南北堀SA1167柱穴断面図 1:50

面から30cm程度と浅い。南の2基には径17~20cmの柱痕跡を残し、柱痕跡は掘方の底部よりも若干沈下している (Fig. 107)。東西塀SA1158と交差するが、柱穴を共有せず新旧関係は不明である。その性格も不明。第84次・第93次調査で検出。

**東西塀SA1822** (PLAN 2) 石組方形池SG1100の北方にあり、東西棟建物SB1136と南側柱筋をほぼそろえて東方へ延びる掘立柱東西塀。3間分、全長6.1mを検出した。柱間寸法は約2.0m。柱掘方の平面は0.8~1.0mの隅丸方形で、検出面からの深さは、断面観察をおこなった西から第2柱穴で5cm程度とごく浅い。他の柱穴の深さは不明だが、この塀の柱筋の東延長部2.0mの位置にある一辺1.0mほどの穴もごく浅く、ここではこの塀の柱穴とは認定しなかった。第84次調査で検出。

削平を受けているとすれば、旧地表面が比較的高いと考えなければならないが、この付近は自然地形の谷の東岸にあたり、東ほど削平が大きい可能性がある。したがって、北地区の一連の遺構の一部と考えてよいだろう。ただし、性格は不明。

**南北塀SA1823** (PLAN 2) 石組方形池SG1100の北方にある掘立柱南北塀。2間分、全長6.1mを検出した。柱間寸法は約3.0m。柱掘方の平面は0.8~1.0mの方形で、南の2基は検出面からの深さがいずれも5cm程度と浅く、大きく削平を受けていると考えられる。北端の柱穴は、掘方の深さが検出面から約30cmあり、径25cmほどの柱痕跡をもつ。第84次調査で検出。

軸線の方位は東西棟SB1134や南北塀SA1132に近く、SA1822とは直交しない。SA1822の項で述べたように、削平が大きいのは、自然地形の谷の東岸にあたるためと考えられ、SA1823も北地区の一連の遺構の一部と解釈してよいだろう。

#### iv 土 坑

石組方形池SG1100の周囲には土坑が多数存在する。これらはSG1100四辺の石積を検出するために機械的に掘り下げた部分と、その周辺で検出したもので、木簡を含む遺物が比較的多く出土している (Fig. 108)。土坑の多くは方形池の石積が崩落し、池が埋没する過程で掘られており、同位置に繰り返し掘り込まれた箇所もある。基本的にはSG1100よりも新しく、SG1100の上層堆積土より古い時期の土坑と考えられる。また、北地区の各所で多くの土坑を検出したが、ここでは遺物が出土した土坑を中心に説明を加える。

**土坑SK1806** (PL. 25、付図2) 石組方形池SG1100の南辺東端付近に接する土坑 (Fig. 108)。土層図 (Fig. 109) で確認できる規模は、東西3.6m以上、深さ0.7m以上。埋土は灰色粘土混じり褐色砂質土。南北溝SD1103と重複し、それより古い。また後述する土坑SK1807より古く、土坑SK1808・1810より新しい。木簡1点が出土した。第84次調査で検出。

**土坑SK1809** (PL. 25、付図2) 石組方形池SG1100の南辺西端部にある土坑。平面は直径3.0m前後の円形で (Fig. 108)、深さ60cmほどの断面鐮形を呈する (Fig. 109)。埋土は上層から暗灰色粘土ブロック混じり緑灰色砂、褐色粘土、暗灰色砂質土で、西側から流れ込んだように斜めに堆積する。SG1100に注ぎ込む南北溝SD1110より新しく、下層にSK1813が存在する。第84次調査で検出。

**土坑SK1810** (PL. 25、付図2) 石組方形池SG1100の南辺ほぼ中央にある土坑 (Fig. 108)。深掘り底部で検出した。東西4m程度、南北1.6m以上、深さ0.7mで (Fig. 109)、埋土は上層から暗

遺物出土の  
土坑を報告

木簡1点  
出土

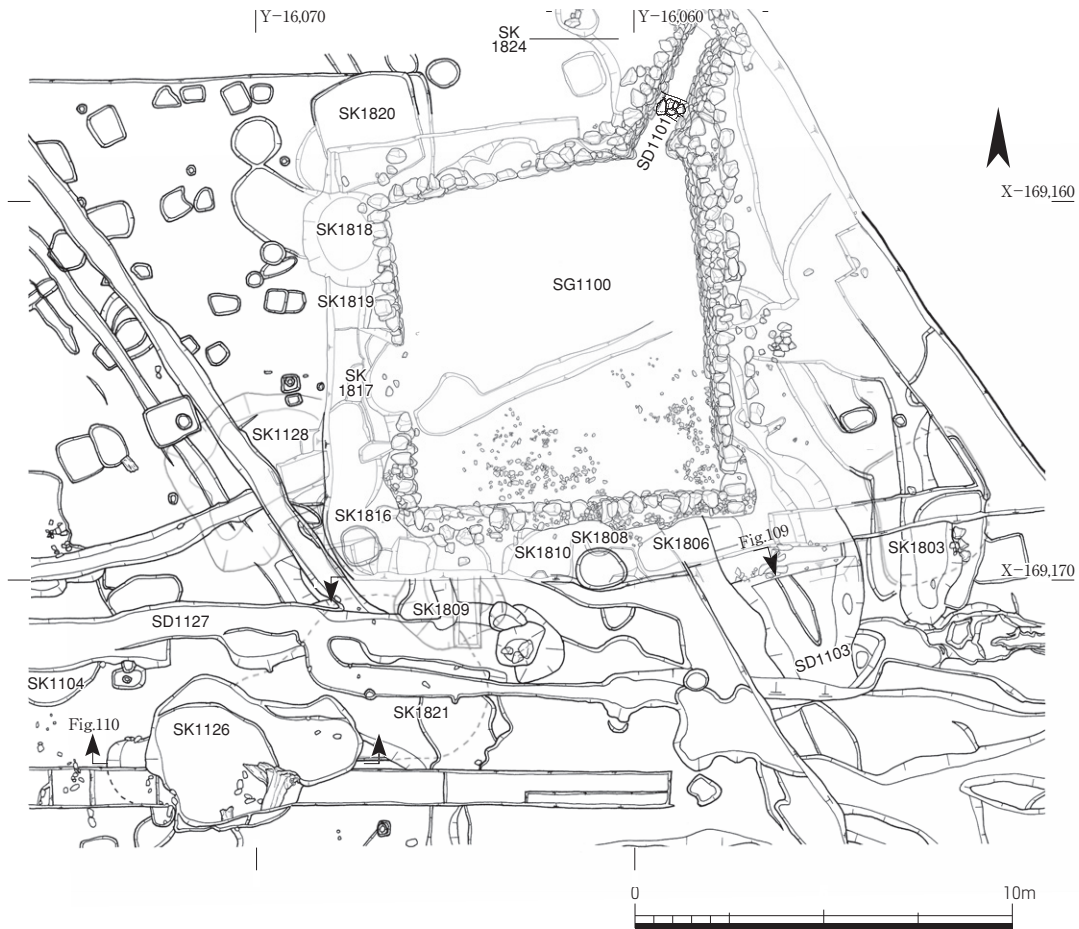


Fig. 108 石組方形池SG1100周辺の土坑配置図 1:200

灰色砂（40cm前後）、青灰色粘質土（30cm前後）。SK1808・1809より古い。第84次調査で検出。

**土坑SK1811** (PL. 25) 土坑SK1809とSK1810に挟まれた部分にある土坑で、これらよりも古い (Fig. 109)。埋土は青灰色砂質土。この土坑のあるSG1100の南辺西部は、石積が階段状となっており、南北溝SD1110が接続すると推定されるが、この土坑SK1811の底面が階段状の石積と接することから、土坑埋土をSD1110の堆積層の一部と解釈する余地もある。Fig. 109では、後述するSK1813がSK1811上にある図となっているが、埋土が似る細部であり確証はない。一連の土坑の可能性もある。木簡1点が出土した。第84次調査で検出。

木簡1点  
出土

**土坑SK1128** (PLAN 2、PL. 74、付図2) 石組方形池SG1100の西辺南半部に接する位置にある土坑 (Fig. 108)。平面は東西約4.8m、南北約4.0mの隅丸長方形で、深さ1.3mの規模をもつ。埋土は、上層から、赤褐色粘土混砂質土（約10cm）、灰色粘土（約20cm）、灰色粘土混じり緑灰色砂質土（約30cm）、緑灰色粘質砂（約70cm）である。出土遺物には平瓦、銅製箸、木製匙、木簡9点などがあり、飛鳥Ⅳ・Ⅴを主体に、奈良時代前半までの土器、および7世紀中頃の土器が少量出土した。SK1128は南北大溝SD1130や7世紀中頃の流路SD1173上に掘られていると考えられ、出土遺物は、これらからの混入の可能性も考慮する必要がある。第84次調査で検出。

瓦・土器・  
木簡等出土

**土坑SK1817** (付図2) 石組方形池SG1100の西辺中央部で検出した土坑 (Fig. 108)。南北幅は1.0m、東西幅は0.4mで、深さは不明。SG1100の石積掘方および先述した土坑SK1128より古い。第84次調査で検出。

混入の可能  
性を要考慮

石組方形池  
より古い

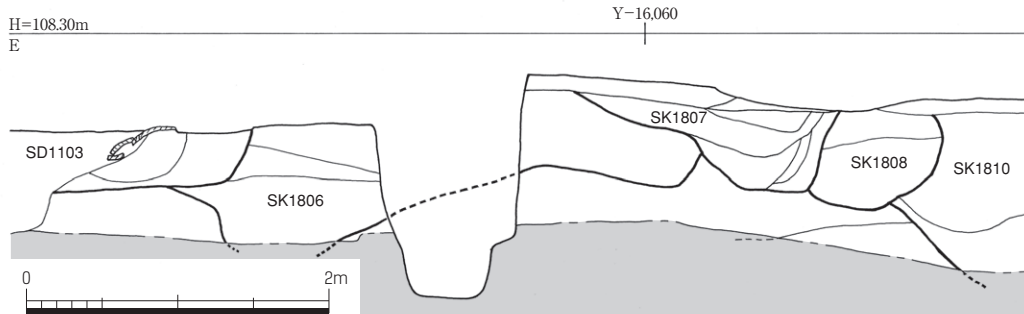


Fig. 109 石組方形池SG1100南辺付近の断面に現れる土坑 1:50

**土坑SK1818** (PL. 25、付図2) 石組方形池SG1100の西辺北端部で検出した土坑 (Fig. 108)。石積と一部重複し、これを破壊する。平面楕円形で、南北2.5m、東西2.2m、深さは0.9m程度。埋土は、粗砂と細砂が互層をなす灰色砂層。南方で土坑SK1819と、北方で土坑SK1820と重複し、それらより新しい。木簡1点が出土した。第84次調査で検出。

木簡1点  
出土

**土坑SK1819** (PL. 25、付図2) 石組方形池SG1100の西辺中央部にあり、土坑SK1818の南部で重複し、それより古い (Fig. 108)。東西2.7m以上、南北1.4m以上、深さ1.0mの規模をもつ。SG1100の掘方とは重複しないが、検出面の標高からみて、これらより新しい。埋土は上層が褐色粘質土 (10~30cm)、中層が淡青灰色粘質土・暗灰色細砂・褐色土混じり暗灰色土 (40~70cm)、下層が淡灰色粘土・暗灰色砂 (0~30cm) で、中層の淡青灰色粘質土と下層の暗灰色砂層から木簡2点が出土した。第84次調査で検出。

木簡2点  
出土

**土坑SK1820** (PL. 25、付図2) 石組方形池SG1100の西北隅付近にある土坑 (Fig. 108)。土坑SK1818の北部で重複し、それより古い。平面は南北2.9m、東西2.6mの方形で、深さ1.0mの箱形の断面をもつ。埋土は上層が茶褐色砂質土 (20~30cm)、中層が暗灰褐色土~暗灰色砂質土 (30cm前後)、下層が灰緑色粘質土~青灰色粘土混じり灰色砂 (30~35cm)。第84次調査で検出。

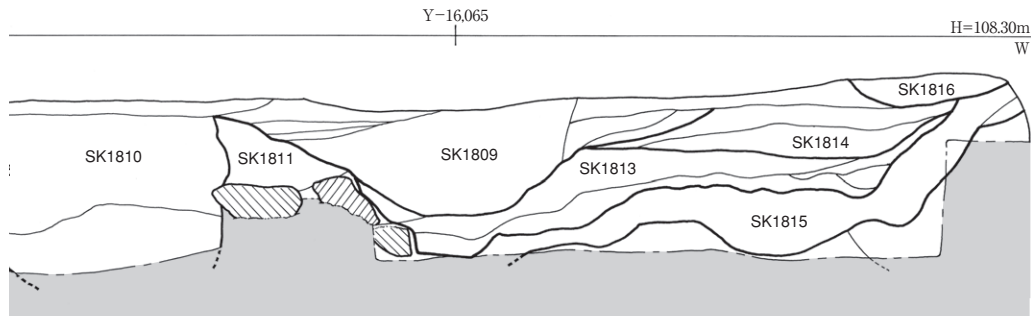
**土坑SK1824** (PLAN 2、付図2) 石組方形池SG1100からの排水溝SD1101西岸付近にある土坑 (Fig. 108)。一辺3.0mほどの菱形を呈する。断面調査をおこなっておらず、深さや埋土などの詳細は不明。第84次調査で検出。

**土坑SK1803** 石組方形池SG1100の石積南辺東端付近の掘り下げ時に検出した土坑 (Fig. 108)。東西幅3m程度。第84次調査で検出。

**土坑SK1807** 石組方形池SG1100の石積南辺中央部の掘り下げ時に断面で検出した土坑 (Fig. 109)。東西幅1.8m程度、深さ0.5m程度。SK1806・1808より新しい。第84次調査で検出。

**土坑SK1808** SK1807と同じく、石積南辺中央部の掘り下げ時に検出した土坑。東西幅約90cm、深さは60cmほどで、SK1810より新しくSK1807より古い (Fig. 108・109)。第84次調査で検出。

**土坑SK1813** やはりSG1100の石積南辺西部の掘り下げ時に検出した土坑で、土坑SK1814とSK1809の下層にある比較的規模の大きな土坑。断面で土坑と認識したもので、平面は明確でない。東西幅4m程度、深さ0.9m程度 (Fig. 109) で、SG1100の南辺西端付近まで延びる。埋土は上から暗灰色粘質砂、青灰色砂混じり青灰色粘土。上層を「暗灰粘砂」、下層を「茶灰砂」として現場から遺物を取り上げた。東端部に石積があり、溝の東岸と解釈できるとすれば、SG1100に注ぐ南北溝SD1110の流路がこのあたりでは不明瞭であることから、SK1813がSD1110を壊すか、もしくはSK1813がSD1110の埋土の一部であった可能性がある。埋土の様相は先述した土



(断面位置はFig. 103・108参照)

坑SK1811と似ており、一連の遺構の可能性もある。小建築の連子窓枠の可能性のある木製部材(本文編〔I〕第四章5節「建築部材」131)が出土した。第84次調査で検出。

小建築の  
部材出土

**土坑SK1814** SG1100の石積南辺西部の掘り下げ時に検出した土坑で、先述した土坑SK1809の下層で検出した。東西幅50cm以上、深さ20cm程度 (Fig. 109)。埋土は上層が淡灰色粘土、下層が灰色粘土で、いずれも「灰粘土」名で現場から遺物を取り上げた。先述した土坑SK1813とは一連で埋土の違いの可能性もある。第84次調査で検出。

SK1813と  
一連カ

**土坑SK1815** 石組方形池SG1100の石積南辺西端部の掘り下げ時に検出した土坑。SK1813の下層にあり、東西3.5m、深さ1.1mの規模をもつ (Fig. 109)。埋土は暗灰色粘土。全体の様相が明確でないが、これもSK1813と一連で、南北溝SD1110の古い時期の埋土である可能性もある。土坑SK1821より新しい。第84次調査で検出。

SD1110の  
古埋土カ

**土坑SK1816** 石組方形池SG1100の石積南辺西端部の掘り下げ時に検出した土坑 (Fig. 108)。東西幅約1.1m、深さ20cm程度。SK1813～1815より新しい (Fig. 109)。埋土は暗褐色土。掘り下げ初期に確認しており、平安時代以後に降る可能性もある。第84次調査で検出。

**土坑SK1085** (PLAN 2) 石組方形池SG1100の北方で検出した土坑。整地土下で一辺1.7m以上の方形土坑の東北隅部分を検出したもので、検出面からの深さは30cm程度。埋土は黒褐色～黒灰色土。古墳時代の須恵器杯Hが多量に出土したほか、少量の土師器杯、須恵器高杯などが出土した。杯Hには13点の滑石製白玉が納められていた。このほか佐波理匙の柄が出土。第84次調査で検出。

出土杯に  
滑石製白玉

**土坑SK1104** (PLAN 2) 石組方形池SG1100の南西にある土坑で、掘立柱建物SB1146と重複し、鎌倉時代とみられる東西溝SD1127に北半を壊されている (Fig. 108)。東西2.0m、南北1.0m以上の規模をもつ。瓦が数点出土した。第84次調査で検出。

**土坑SK1126** (PLAN 2、PL. 74) 石組方形池SG1100の南西約10mの位置にある不整形土坑。東西6.5m、南北4.0mの規模で、西南部の東西3.0m、南北2.5mの範囲が一段深くなる。最も深いところで約1.4mある (Fig. 108・110)。埋土は大きく3層からなり、上層は炭の混じる灰緑色～灰褐色の砂質土(深さ50cm前後)で、土坑全体に及んでいる。中層は西南部の深くなる部分にあり、木屑を多量に含む淡灰緑色～暗褐色の砂質土(深さ15～40cm)で、「郡里」の記載をもつ木簡などが多量に出土した。下層は木屑や須恵器を含む灰緑色砂～灰褐色粘土(15～50cm)である。この土坑の下層には南北大溝SD1130があり、出土木簡の様相からSD1130からの混入の可能性が指摘されている(本文編〔I〕562・563頁)。木簡の出土総数は689点(うち削屑547点)。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期の土器とともに、平城宮土器Ⅱの土器が出土し、多数の墨書土器のほか針書土

中層から  
多量の木簡

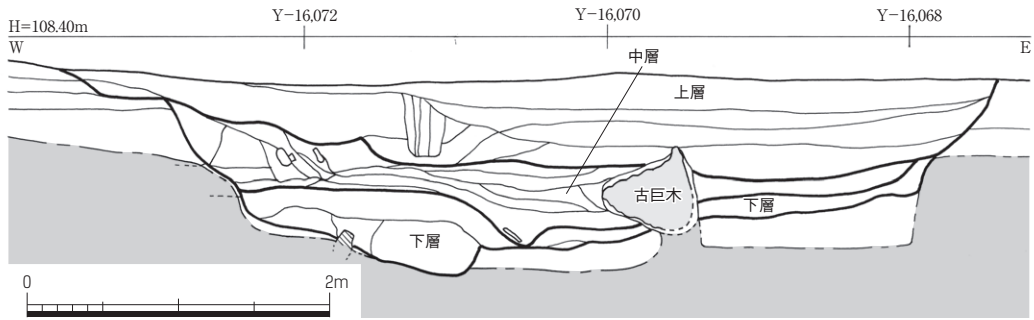


Fig. 110 土坑SK1126断面図 1:50 (断面位置はFig. 103・108参照)

器、製塩土器もある。また、軒平瓦・丸瓦・平瓦・文字瓦などの瓦埴類、鋸柄や横櫛ほかの木製品、砥石や漆刷毛などの生産工房関係遺物などが出土している。第84次調査で検出。

**土坑SK1821** 土坑SK1126の東に接する土坑で、これよりも古い。鎌倉時代とみられる東西溝SD1127と重複し、その底面などで検出した。先述した土坑SK1815にも壊されており、平面で確認した範囲は、南北幅4m以上、東西幅8m以上である (Fig. 108)。断面は深さ60cm程度の深皿形を呈し、埋土は上層が炭混じり茶黄褐色粘質土 (20cm程度)、下層が砂混じりの青灰色粘砂 (40cm程度) である。検出状況からみて南北溝SD1110より古くなるが、この付近でSD1110の流路を確認していないので、遺物はSD1110からの混入も考えられる。木簡6点のほか海老錠1点が出土した。第84次調査で検出。

木簡6点  
海老錠1点

**土坑SK1129** (PLAN 2) 石組方形池SG1100の西方深掘り部分で検出した土坑。土坑の西辺が深掘り部分にかからないため、全体の規模は不明だが、南北約3.0m、東西1.0m以上の規模をもつ。南辺付近は素掘り小溝で壊されているものの、東南部が東に約1mほど突出する。瓦や須恵器が散在した状態で出土した。第84次調査で検出。

瓦や須恵器  
が散在

**土坑SK1131** (PLAN 2) 石組方形池SG1100の北西20mほど、南北棟建物SB1137の北方にある大型の土坑。東西約5.5m、南北3.0mで、検出面からの深さは約40cmと規模のわりに浅い。西辺は柱穴状に落ちるが、東辺はなだらかに上がっている。断面観察によると、西辺から1m程度が古く、それより東方は掘り直しがおこなわれているようである。古い土坑埋土には炭が入らないが、掘り直しの埋土には炭が混じる。埋土は新旧とも大きく上下2層に分かれ、いずれも灰茶色～灰褐色の粘質土である。I型式の軒平瓦が出土した。第84次調査で検出。

軒平瓦出土

**土坑SK1105** (PLAN 2) 石敷井戸SE1090の南東で検出した土坑。鎌倉時代とみられる東西溝SD1127の石組の堰の西方に位置する。北辺をSD1127で、南辺は後世の素掘り小溝で破壊されているものの、東西約1.1m、南北約1.7mを検出した。西方にはほぼ同規模の土坑が隣接するが、重複関係はない。銅製の大型鋳造品の破片が出土した。第84次調査で検出。

銅製大型鋳  
造品の破片

**土坑SK1067** (PLAN 2) 北地区の東北端で検出した土坑。東西3.0m、南北1.6mの楕円形の平面をもつ。東西溝SD1071より新しい。掘り下げておらず断面は不明だが、瓦のほか須恵器破片などが出土した。第97次調査で検出。

**土坑SK1148** (PLAN 3) 南北溝SD1110に設けた堰SX1111の東方にある土坑 (Fig. 111)。平面は径1.3mの円形で、底面は径25cm程度、検出面からの深さは約90cmである。木簡が1点のほか木製の匙が出土した。堰SX1111の西方には石敷SX1122があり、さらにここから西方に踏石列SX1123やSX1174が延びる。またSD1110を渡る橋SX1149の北方に位置しており、これらと関

堰や石敷と  
関連カ

連する土坑の可能性もある。第84次調査で検出。

**土坑SK1153** (PLAN 3, PL. 74) 南北溝SD1110を渡る橋SX1149の東方にある大土坑。平面は東西5.2m、南北4.0mの楕円形を呈し、1.7m前後の深さがある。埋土は大きく上・中・下の3層に分かれ、中層の木屑層からは大量の木屑とともに木簡2,174点(うち削屑2,080点)が出土した。「評-里」の表記をもつ大宝令施行以前の木簡を含むが、出土土器は飛鳥IV~Vとともに、平城宮土器Ⅲに降るものも出土している。このほか、墨書土器3点、陶硯6点、砥石や漆付着土器などの生産工房関係遺物、刀子柄・杓子・箸・匙・小円板などの木製品、切面戸瓦などの瓦埴類、小建築の部材なども出土した。また、はつり屑や裏面が割截されただけの木簡が多いのも特徴である。SK1153は南北大溝SD1130の流路から外れていると思われ、廃棄土坑とすれば、北地区の遺構に伴う出土遺物を含む割合は、他の土坑に比べて高いと考えられる。第84次調査で検出。

中層埋土に  
多量の木簡

北地区の  
遺構に伴う  
遺物の割合  
高い

#### v その他の遺構

**木樋暗渠SX1114** (PLAN 3・29, PL. 24) 南北堀SA1120の南から3~6間めの西方に埋め込まれた木樋暗渠。全体として平面クランク形をなし、南端に西から続く木樋が接続する(Fig. 104)。南北直線部分は6.6mで、SA1120とは軸線を違えてほぼ正方位にのり、SA1120の南から7本めの柱位置の北で東西方向の木樋に接続する。北端の東西方向の木樋は1.6m遺存し、南北溝SD1110に注ぐ。少なくとも南北方向の木樋は据付掘方をもたず、SA1120の柱掘方を切り込む面に据えられており、またSA1120の柱掘方を覆う整地土(SA1120の基壇状の盛土整地)で埋め込まれている。南端からさらに西方に続くはずだが、材が残らず西方のどこから取水していたか明らかでない。確認できた南端東西方向の掘方の長さは5.3mである。SD1110への排水口の木樋底材上面の標高は107.58m、木樋天板上面は107.68m。SA1120の基壇状の盛土整地、これはSD1110の西堤防としても機能したと考えられるが、遺存するその上面からは45cmほど下になる。

平面は  
クランク形

木樋の構造は、U字形に刳り抜いた底材に分厚い蓋板をのせる形式である。南北直線部分は、底材2材と蓋板4枚を組み合わせている。底材は、転用した柱材を半截ののちU字形に刳り抜いている。蓋板は、南半が長さ約3.6mの1枚、北半が長さ1m前後の材を3枚つなぐ。南半の蓋板には、方形のホゾ穴状の孔が5個穿たれており、また材を打ち割って板に加工した痕跡を残し、旧柱材を板に転用したものらしい(本文編〔I〕第IV章5節「建築部材」109、図版編〔I〕PL. 79)。南北両端の高低差は40cmで、勾配は6%。北端は東西方向の底材側面に食い込むようにして固定する。東西方向の木樋は南北堀SA1120の柱に接しつつ、先端は南北溝SD1110西岸に露出している。南北部分の南端は、南北方向・東西方向の材ともに遺存状態が悪いが、Fig. 112に見るように、東西方向の木樋底材(長さ30cmほど遺存)が10cm程度高く据えられており、南北方向の底材に東西方向の底材が食い込む状態であったと推定される。木樋内部には泥土が堆積していたが、顕著な遺物は出土しなかった。第93次下層調査で検出。

底材と蓋板  
に柱を転用

このようなクランク状の木樋を設けた理由は明確でない。SX1114は明確な掘方をもたず、少なくともSA1120の基壇状の盛土整地の造成と同時、あるいは南北大溝SD1130の埋め立てと同時に造られたとみられる。その後、東西堀SA1158・1086で隔てられた空間(Fig. 104)を造り、さらにSA1086の北には、SX1114の上を横断する形で東西溝SD1115を掘り込み、SD1120をく

SD1130の  
埋立と同時  
に設置カ



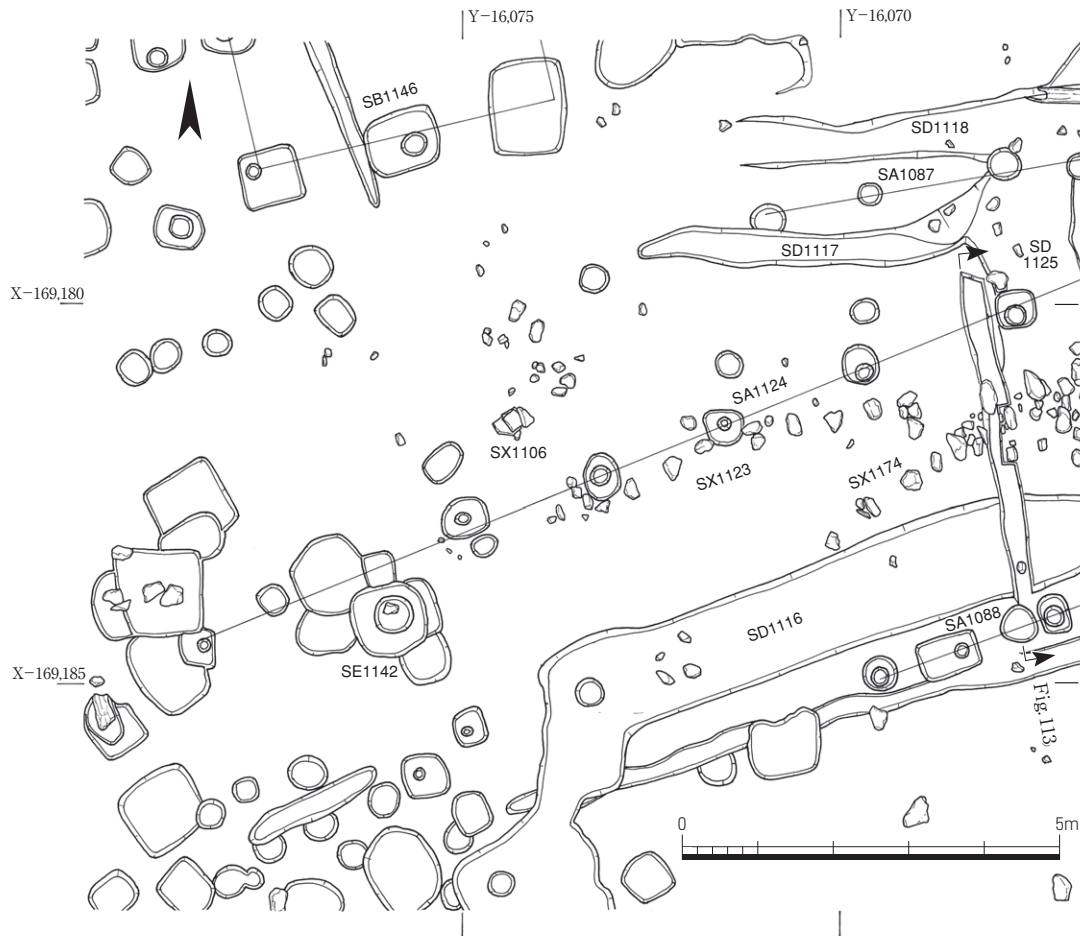


Fig. 111 堰SX1111周辺の遺構 1:100

ぐらせて排水している。これらが計画的に設けられたものとは考えにくい。南北溝SD1110を基幹排水路としたが、南北堰SA1120を設けたことにより、それより西方の排水に頭を悩ませることになった様子がうかがえる。

**東西溝SD1115 (PLAN 3, PL. 22)** 木樋暗渠SX1114付近にある不整形な素掘りの東西溝。南北溝SD1110および南北堰SA1120の西方は、東下がりの緩傾斜面となるため、SD1110に注ぐ4条の東西溝(南からSD1115~1118)を設けて一帯の水処理をしている。また、SD1117を除けば、いずれもその南方に溝と並行する短い掘立柱東西堰を設け、SA1120・1121に取り付く。最も南にある東西溝SD1115は、南北堰SA1120の南から5間めをくぐる溝である (Fig. 104)。幅は0.8~1.0mであるが、SA1120と交差する部分では0.3mと幅を狭める。深さは15cmで、砂層を交えた褐色砂質土を埋土とする。SD1110への排水口付近の溝底の標高は108.3mで、木樋暗渠SX1114の蓋板はその下をくぐる。したがってSX1114より設置時期は新しいが併存すると考えられる。一方、西端付近の溝肩の標高は108.6m前後であり、重複する位置にある掘立柱南北棟建物SB1147 (128頁) の東側柱は、削平されているとみられる。したがってSB1147とは併存せず、それより古い。後述する東西溝SD1116・1118にみるように、東西溝が南北堰SA1120・1121をくぐる部分には、いずれも木樋暗渠を設置していたと考えられ、このSD1115にも木樋暗渠が存在したと考えられる。第84次調査で検出。

東西溝4条

SX1114より設置は新

木樋暗渠が接続カ

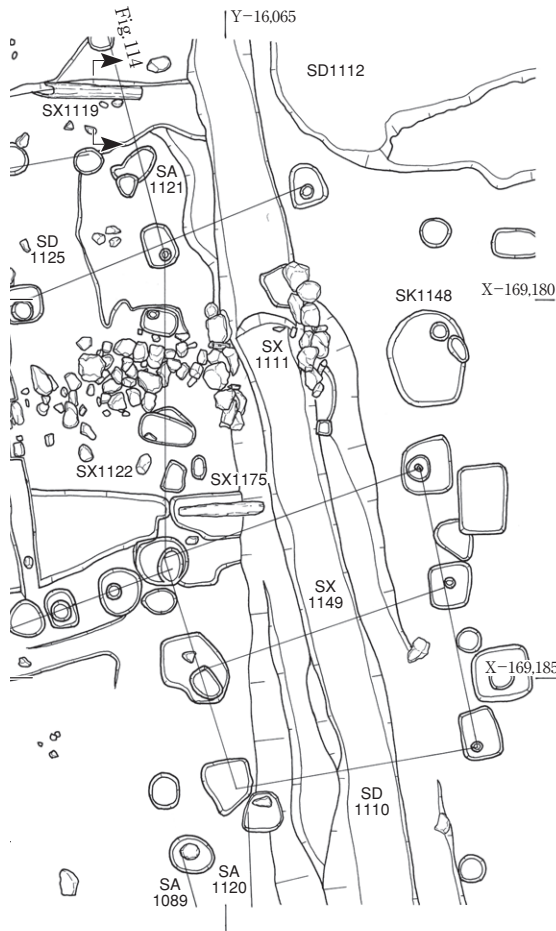


Fig. 112 木樋SX1114南端部の構造 (北東から)

東西溝SD1116・1113 (PLAN 3、PL. 22・23) 南北塀SA1121南端の柱間をくぐる素掘りの東西溝。SA1121と交差する部分には、木樋暗渠SX1175を設置する (Fig. 111)。SA1121の西約10m付近から北北東に流れた後、踏石列SX1123・1174の南で東に向きを変えてSD1110に注ぐ。断面観察の結果、少なくとも3時期の重複が認められ、下層の溝は幅60cm、深さ40cmの矩形断面、中層溝は幅1.1m、深さ20cmの浅い溝であり、上層溝は幅60cm、深さ10cmの細い流れとなる (Fig. 113)。同じ性格の溝と考えられる東西溝SD1115・1117・1118はいずれも浅い溝であり、この性格が符合するのは、断面で確認した中層と上層の溝である。下層溝は、一連の溝と比較して

下層溝は性格異なる

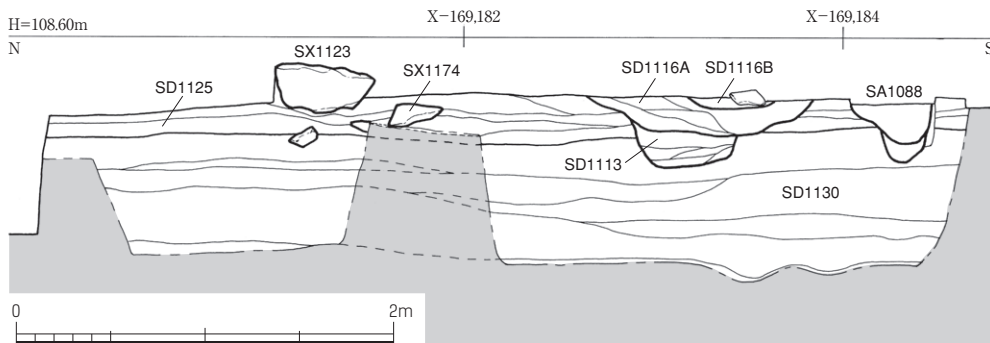


Fig. 113 東西溝SD1116・SD1113断面図 1:40 (断面位置はFig. 103・111参照)

かなり深く、性格を異にするとみられ、これをSD1113とした。SD1113は中層の掘り下げ後に溝底で平面を確認したが、次に掲げる木樋暗渠SX1175の解説で述べるように、先端のSX1175のやや南に見える溝底が、この溝のSD1110への排水部と想定できる。この場合も、やはり木樋暗渠でSA1121をくぐったのであろう。SD1113からは木簡が1点出土した。一方、SD1116の中層と上層は明らかに一連の遺構であり、中層をSD1116A、上層をSD1116Bとした。SD1116A・Bともに南北塀SA1121と交錯する位置で、溝幅を20～30cmに狭めて木樋暗渠SX1175に接続させている。SD1116A・Bの埋土は、いずれも炭を含んだ砂質の流水堆積層であり、西方からの水流の激しさを物語る。SD1116からは飛鳥Ⅳの須恵器蓋などが出土した。第84次調査で検出。

木樋暗渠SX1175に接続

**木樋暗渠SX1175** (PLAN 3, PL. 23) 東西溝SD1116の東端に設置した木樋暗渠 (Fig. 111)。半割りした丸太材を削り抜いて木樋としたもので、現状で全長約106cm、幅約17cmである。東端が南北溝SD1110に突き出た状態で遺存する。両端とも腐食するが、南北塀SA1121と交錯する部分の下部で幅約30cmに木杭3本が南北に打ち込まれており、本来はもう少し長かった可能性が高い。木樋の据付掘方は、幅約60cmと木樋本体よりかなり大きい。掘方は南北溝SD1110に架けた橋SX1149の掘方に一部壊されている。木樋は掘方の底から約15cm浮いており、標高118.2mほどで、およそSD1116Bの溝底に合うとみられる。掘方埋土上部は砂質の堆積土に近く、掘方の下部には掘り込みがあり、また掘方に重複してやや南にずれた位置で、約15cm深い溝底を確認している。この深い溝底は、SD1116の解説で述べたように、東西溝SD1113のSD1110への排水部とみられる。これらから、木樋はSD1113からSD1116A・Bの掘り直しに伴って何度か据え直されたとみられる。断面では下層に木杭3本を確認しているが、性格は不明。あるいは後述する木樋暗渠SX1119で推定されるように、ある時期には木杭に木樋をのせるなどして固定していた可能性もある。第84次調査で検出。

丸太割抜の木樋暗渠

**東西溝SD1118** (PLAN 2・3, PL. 22・23) 東西溝SD1116の北6～7mに位置する素掘りの東西溝。東端に木樋暗渠SX1119を設け、南北塀SA1121の南から5間めをくぐって南北溝SD1110に注ぐ。上下2層を平面で確認した。上層の溝SD1118Bは、埋土が褐色砂で、幅70～90cm、深さ10～20cmの浅い溝で、長さ約11mを検出した。下層の溝SD1118Aは、SX1119に接続する東部において、SD1118Bの埋土を完掘後に検出した。埋土は青灰色シルト混じりの明褐色砂で、幅が50～70cm、深さは10cm程度、検出した長さは約3.7mである。SX1119底の標高は108.2mほどで、SD1118Bと整合する。SD1118Aの溝底はそれより約15cm程度低く (Fig. 114)、SD1116などと同様、何度か浚渫を繰り返していると考えられる (PLAN 2・3では上層のみを表現)。南にあるSD1116よりも正方位に近く、また、SA1121の西方で南北溝SD1125と重複するが、それより新しい。飛鳥Ⅳ～Ⅴの須恵器杯、奈良時代に降る可能性のある土師器碗などが出土した。第84次調査で検出。

木樋暗渠SX1119に接続

**木樋暗渠SX1119** (PLAN 3, PL. 23) 東西溝SD1118の東端に設けた木樋暗渠。木樋暗渠SX1175と同様、丸太材を削り抜いており、現状では長さが134cm、幅21cmである。木樋の北に接する位置で、5cm角ほどの杭1本を木樋底の高さで検出しており、木杭で挟むかのせるなどして固定していた可能性がある。掘方の底から約10cmほど高く設置されており、現状はSD1118Bの溝底と標高が整合

木杭で固定

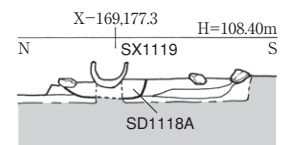


Fig. 114 東西溝SD1118と木樋暗渠SX1119の断面図 1:40 (断面位置はFig. 103参照)

するため、木樋暗渠SX1175と同様、こちらも据え直しをおこなっているのであろう (Fig. 114)。木樋は角ホゾ穴を2ヵ所もち、柱材を転用したと考えられる (本文編〔I〕第IV章5節「建築部材」129、図版編〔I〕PL. 281・282)。明瞭ではないものの、一端に継手状の加工があり、SX1119には継手は必要ないものの、柱材ののち継手をもつ木樋に転用し、さらにSX1119に転用した可能性がある。飛鳥IV～Vの須恵器平瓶のほか、土師器の杯・甕・鍋、須恵器の杯・鉢の小片が出土した。第84次調査で検出。

柱材を転用

**東西溝SD1117** (PLAN 3) 東西溝SD1118の南方1.5mの位置にある素掘りの東西溝 (Fig. 111)。幅40cm前後、深さ5～10cmで、東に流れたのち北に折れて東西溝SD1118Bに接続する。埋土は明黄褐色灰色砂で、南北溝SD1125よりも新しい。SD1118に合流する手前で掘立柱東西堀SA1087をくぐる。第84次調査で検出。

**南北溝SD1125** (PLAN 3) 東西溝SD1118が南北堀SA1120と交錯する付近で、SA1120の西方を北流する素掘りの南北溝。溝幅は約1.2m、深さ約10cm、長さ4.5mを検出した (Fig. 111)。埋土下層は、シルトや炭混じりの明黄褐色砂や明褐色灰色砂質土といった流水堆積層であり、先述した東西溝SD1113と併存してSA1120西方で溢れた水を北方へ排水した溝と推定する (Fig. 111・113)。上層はこの溝を埋め立てた黄褐色混じりの青緑灰色砂質土で、その時期はSD1113埋没以前である。SD1125の下流は不明。後述する踏石列SX1123・1174、およびSD1118とSD1117の間に建つ東西堀SA1087 (129頁) は、この溝を埋め立てた後に造られている。第84次調査で検出。

東西溝SD1113と併存

**石敷SX1122** (PLAN 3、PL. 21) 堰SX1111 (110頁) に西接する石敷。東西約2m、南北約1.2mの範囲に、人頭大の花崗岩自然石を約40個敷き並べている (Fig. 111)。掘立柱南北堀SA1121の柱間におさまり、SA1121と併存すると考えられる。敷石上面の標高は108.2～108.3mで、西方で高くなる。踏石列SX1174と併存する。第84次調査で検出。

踏石列SX1174と併存

**踏石列SX1174** (PLAN 3、PL. 21・67) 石敷SX1122に接続して西南西方向にやや湾曲する踏石列 (Fig. 111)。人頭大の自然石を40～60cm間隔に並べる。西端は東西溝SD1116に壊されており、残存長は5.5mである。東方のSX1122に接続させるための踏石列とみられ、石列上面の標高は、108.2～108.3mである (Fig. 113)。第84次調査で検出。

**踏石列SX1123** (PLAN 3、PL. 21・67) 石敷SX1122や踏石列SX1174の埋没後に新たに造られた踏石列 (Fig. 111)。東端の2石はSX1122の上に乗る。残存長は7.5mで、およそ13ステップあり、50～70cm間隔で人頭大の自然石を並べるが、西方の石はやや小さい。方位はSX1174よりやや北に振れる。堰SX1111から西方へ延び、その北にある掘立柱東西堀SA1124とぶつかる位置より西では、堀に沿う方向に向きを変える。石列上面の標高は、108.4～108.5mである (Fig. 113)。第84次調査で検出。

後出の踏石列



Fig. 115 瓦堆積遺構SX1106  
(西南西から)

置より西では、堀に沿う方向に向きを変える。石列上面の標高は、108.4～108.5mである (Fig. 113)。第84次調査で検出。

**瓦堆積遺構SX1106** (PLAN 3) 調査区中央部の掘立柱東西堀SA1124の北方で検出した、平瓦を数枚重ねた遺構 (Fig. 111・115)。性格は不明ながら、踏石列SX1123に関連する遺構か。第84次調査で検出。

**小穴群** (PLAN 2・3) 北地区西南部の西丘陵に近い部分には小柱穴が多数分布する。これらの柱穴は、北半部の柱

西丘陵には小柱穴多数

穴とは異なって、径20～30cmで円形をなす小規模なものが多い。南北溝SD1110や南北堀SA1120と類似する方位をもつ小穴列と、東西道路SF1070と類似する方位をもつ小穴列が混在するようであるが、建物や堀などの遺構としてのまとまりが明確でなく、遺構の復元が今後の課題として残されている。

1) 『年報1998-II』36頁では、南北大溝SD05（本書SD1130）は、南北堀SA02（本書SA1120・1121）の西方にある図を掲載しており、図版編〔I〕PL.20などでもSA1120やSD1110と併存するような写真を掲載している。また『年報1998-II』では、南北堀SA02（本書SA1120）を建て、その東に南北溝SD01（本書SD1110）を掘り、木樋暗渠SX03（本書SX1114）を埋め込んで、SD05（本書SD1130）を埋める、という手順を想定していた。しかし、その後の調査でSX1114の上流部を検出し、SX1114はSD1130を埋立後（あるいは埋立末期）でないと施工できないことが判明した。断面観察では、SA1120の掘方はSD1130の埋立後に掘られている事実が判明し（Fig. 4、6・7頁参照）、本文中で述べるような解釈となる。

なお、SD1130の性格やその埋め立ての工程、あるいは南北溝SD1110との関係については、本文編〔I〕・〔II〕でもいくつかの説が出されている。例えば、

- ①（SD1110出土木簡は）すぐ西側に存在した南北大溝SD1130から出土した木簡と共通する部分があり、……。本文編〔I〕543頁。
- ②SD1130（同時期の木簡が出土している南北溝SD1110を含む）は、谷全体を埋め立てて整地する過程で機能した排水路。本文編〔I〕740頁。
- ③北地区西方の谷地形の埋め立てと造成に関わる遺構。本文編〔II〕66・201頁。
- ④自然に堆積したものは上部の一部で、比較的短期間に埋め立てられたものが大半。本文編〔II〕201頁。
- ⑤SD1130堆積土は、遺跡南側の谷筋などを浚渫した際に生じた土壌を利用した埋立土、すなわち整地土であるとの評価もあり、早計な結論は下せない。本文編〔II〕220頁。

本書187頁以下、第VI章5節の「遺構の変遷」でも述べるように、SD1130からSD1110への排水系統の変更は、飛鳥寺寺域東南区画の開発とも関わり、大規模な造成を伴う。両溝は、谷の基幹排水路として機能させながらの造成となり、SD1130を埋めてSD1110を掘る、という単純なものではない。上記⑤で指摘するような、埋め立ての資材をどうするかといった視点を含め検討項目は多岐にわたる。

しかし、SD1130を発掘したのは、図版編〔I〕PLAN 3やPL.20にみえるように、北地区のごく一部であり、上流や下流に接続する遺構も明確でない。飛鳥池遺跡にとって重要な遺構ではあるものの、明確でない点が多く、その性格や埋め立ての具体的な工程は不明とせざるをえない。

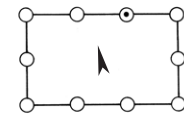
- 2) 『年報1999-II』23頁でこのように述べており、調査日誌（1999年4月27日）にもこのことが記されているが、当該部分の断面図（PLAN19掲載のB-B'断面図）からは、きわめて重要なこの事実を読み取ることができない。この断面図には、上層に耕作土を含む地表までの土層があることが、写真などでも確認できるが、いかなる理由か図面に記載されていない。調査者はこの部分で確認したとみられる。ここでは『年報1999-II』と調査日誌の所見を尊重して記載することとする。
- 3) 飛鳥寺2次：『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研、1958年。飛鳥寺1977：『藤原概報8』、1978年。飛鳥寺1979：『同9』、1979年。飛鳥寺1982：『同13』、1983年。飛鳥寺1985-2次：『同16』、1986年。飛鳥寺1996-3次：『年報1997-II』。飛鳥藤原第91-8次：『年報1999-II』。飛鳥寺1982で検出した北面大垣SA500の軸線は、その西方で検出したSA500（飛鳥寺1977、第91-8次）とは異なるので、北面大垣東部のある地点から仕様が異なっていると考えられる。
- 4) 『年報1999-II』24頁では、「谷の東縁に沿って掘られた」溝と報告しているが、この南方では上流を検出していないため、根拠はまったくない。この南北溝SD1066が切り込む有機質層は、飛鳥池遺跡の各所で部分的に検出している旧河川SD1176の堆積土と考えられ、SD1066が自然地形である谷の中心付近にあることは疑いない。本文中で述べたように、東西溝SD1072が北東へやや急勾配で下降するのも、旧地形すなわち自然の地形に従っているためと考えられる。

## 7 平安時代以降の遺構

ここでは飛鳥池遺跡の北地区、南地区で検出した遺構のなかから、平安時代以降の遺構を平安時代、中世、近世に分けて記述する。平安時代には、南地区の水溜や北地区の導水路などはほぼ埋没するが、埋土最上層に平安時代の遺物を含み、この頃の井戸や建物などが検出されている。性格は不明ながら、この土地を利用した活動があったことがうかがえる。中世の遺構は、北地区中央部を横断する溝のみで、顕著な遺構は確認できていない。周囲は水田として用いられ、その用水路が検出されたものとみられる。近世には西の谷で飛鳥寺の梵鐘を铸造した遺構があり、その後、農業用の溜池である飛鳥池が造られた。発掘調査では、飛鳥池の樋門と排水路を2時期分検出した。その他、農業用の素掘小溝や石詰め、あるいは竹製の導水施設も検出したが、いずれも近現代の工作物と考えられるため、解説を省く。

### A 平安時代の遺構

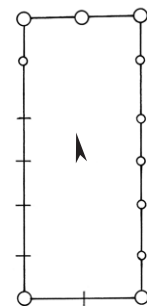
**東西棟建物SB1155** (PLAN 3・4, PL. 80) 北地区の石敷井戸SE1160の東方にあり、南北溝SD1110の埋没後に建てられた掘立柱東西棟建物。桁行3間、梁行2間で、柱間寸法は桁行が2.0m等間、梁行が1.8m等間



である。棟方向は東で南に振れ、奈良時代までの遺構方位とは大きく異なる。柱掘方は方形で、一辺が60~90cmと比較的規模が大きく、検出面からの柱穴の深さは25~60cmである。掘方底面の標高は、断面観察をおこなった9ヵ所で107.7~108.3mとばらつきが大きい。108m台は西南隅と西妻中央の2ヵ所だけであった。軟弱地盤のためか、掘方の底に扁平な石を据えた柱穴が多い。北側柱の東から第2柱穴には径16cmの柱痕跡を残す。西北隅柱掘方より木簡1点が出土した。第93次調査で検出。

掘方底に  
扁平な石

**南北棟建物SB1154** (PLAN 3) 南北棟建物SB1155の北方にあり、東側柱をSB1155の東妻と柱筋をそろえ、棟方向を直交させた掘立柱南北棟建物。SB1155と同様、南北溝SD1110の埋没後に建てられている。桁行6間(11.2m)、梁行2間(4.6m)で、柱間寸法は梁行が2.3m等間、桁行は1.6~2.3mとばらつく。四隅および北妻中央の柱穴は、一辺が0.8~1.0mと大きい。他の側柱の柱穴は径50cm前後と小さい。西側柱筋の柱穴の多くは未検出である。柱穴の深さは、検出面から20cmほどと浅く、掘方底面の標高は、断面観察をお



四隅と北妻  
中央柱穴大

こなった北妻および西南隅の計3ヵ所で107.6~108.1mとばらつく。少なくとも北妻中央柱および西南隅柱には掘方底面に扁平な石を置いている。第84次・第93次調査で検出。

**掘立柱塀SA1157** (PLAN 3・4) 東西棟建物SB1155の西方約2mにあり、それと柱筋を合わせる柱間2間の塀。柱間寸法は1.8mである。柱掘方の平面は一辺0.7~1.0mの方形で、深さは0.4~1.0mを測る。掘方底面の標高は107.7~108.4mで、北の柱穴のみ深い。柱筋が若干ずれるが、SB1155の西廂の可能性も残る。第93次調査で検出。

**南北塀SA1089** (PLAN 3) 工房期の南北塀SA1120の南から8・9間めの西方約70cmの位置に

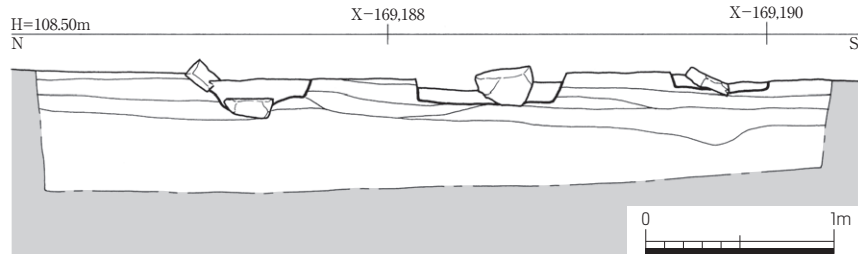


Fig. 116 南北塀SA1089柱穴断面図 1:40

ある南北方向の2間分3基からなる掘立柱塀。全長は約2.6m。柱間寸法は1.3m前後。柱掘方は径50～60cmの隅丸方形ないしは円形で、検出面からの深さは10～15cmとごく浅い。柱穴埋土にはいずれも石を含む (Fig. 116)。柱穴の深さからみて、上部が大きく削平を受けており、平安時代以後の遺構と考えられる。PLAN 3では、南北3間の塀に表現しているが、北端の穴は柱穴ではないため誤記である。性格は不明。第84次調査で検出。

**井戸SE1142** (PLAN 3, PL. 80) 北地区の東西塀SA1124の西端南方にある井戸 (Fig. 111)。井戸枠に曲物を据える。掘方の平面は、検出面で直径約1.0mであるが、下方でやや袋状に広がり、検出面から約70cm下では径約1.2mとなる。深さは検出面から1.4m下までを確認した。曲物は井戸底に4段程度が残り、上から1・2段めは内径0.50mの曲物を、3・4段めには上方よりも内径のやや小さな曲物を積み重ねている (Fig. 117)。掘方最下部の様相は不明確ながら、井戸枠の曲物部分のみを一段深くするようである。井戸枠内最下層から延喜通宝 (延喜7年=907初鑄) が1枚出土した。このほか、10世紀前半の土師器杯などが出土した。第84次調査で検出。

延喜通宝  
出土

**素掘溝SD771** (PLAN 4・5・7) 南地区西の谷の出口付近で検出した素掘溝。上流 (西南端) は土坑SK764付近、下流は掘立柱建物SB785の東北妻付近まで、全長約16mを検出した。下流で南にやや弧状に湾曲する。SK764より上流は平面では検出できなかったが、水溜状土坑SX761の土層断面で確認した幅40cm、深さ45cmのV字形の溝がそれに相当する可能性が高い。平面で確認できる溝の規模は、幅1.2～1.5m、深さは15～20cmである。溝の埋土はSX761の断面観察部分では砂と粘質土の互層、SB785東北妻部分では底部5cmほどが灰色粘土、それ以上が炭と黄色砂の互層となる。炭混じりの土は工房期の炭層などの再堆積層であろう。自然地形に従った平安時代の西の谷の基幹流路と考えられる。飛鳥寺1991-1次調査で検出。

平安時代の  
基幹流路

**井戸SE777** (PLAN 5・7・11) 掘立柱塀SA753北端柱穴の約2m南東にある円形井戸。曲物側板を井戸枠とする。底板はない。掘方の径は約60cm、検出面から底面までの深さは22cm程度。井戸枠は径45cm、高さ15cm程度の一段分のみが遺存する (Fig. 118)。

井戸としては浅すぎ、本来もっと高い地盤から掘り込まれたと考えられる。西の谷の工房期の流路SD809を掘り込んでおり、規模は北地区の井戸SE1159 (124頁参照) や、やはり北地区にある平安時代の井戸SE1142と同程度である。出土土器のうち年代

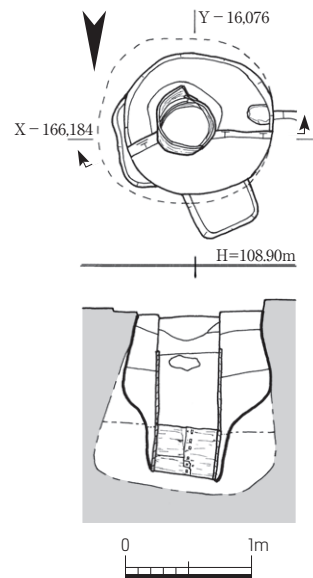
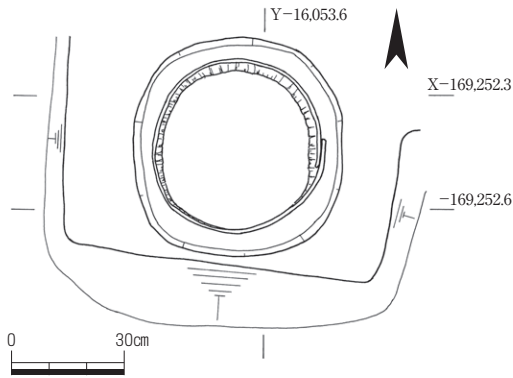


Fig. 117 井戸SE1142  
平面図・断面図 1:60



(南から)

Fig. 118 井戸SE777 1:20

のわかるものは工房期以前のものだが、上記の検出状況からみて平安時代の遺構と解釈しておく。飛鳥寺1991-1次調査で検出。

**掘立柱塼SA748** (PLAN 6・11) 水溜状土坑SX1641の東方に北西-南東方向に並ぶ3基の柱穴。掘立柱塼と推定した。柱間寸法は1.8m (6尺) 等間。柱掘方はほぼ円形で、径20~30cm、検出面からの深さは20cm程度。飛鳥寺1991-1次調査で検出。

**井戸SE1239** (PLAN 5・7, PL. 80) 南地区の水溜SX1224の西南岸で検出した井戸。掘方は直径が85cm前後、検出面からの深さが約70cmで、丸太を刳り抜いた井戸枠を据えている。掘方は西方および東方下半が岩盤の明青灰色花崗岩風化土を切り込み、東方上半は谷の整地土を切り込んでいる。井戸枠は高さ70cmほど遺存し、上端の直径は、南北68cm、東西65cm、下端の直径は50cm前後の逆截頭円錐形を呈し、内径は45~65cm。下端から15cmほどの位置が約5cmと最も厚く、上下に向かって薄くなる。西外面上端には、一辺5cmほどの性格不明の四角い突起を造り出している (Fig. 119)。また、井戸枠南面下端部には、約15cm四方の切り欠きがあり、長さ70cmほどの平瓦2枚の下辺を、この切り欠きの上辺に合わせて掘方に挟み込んでいた (Fig. 120)。この突起と切り欠きから、井戸枠は転用材とみられるが、転用前の用途は不明である。井戸枠内の埋土は、下半に粘土と粘質土、上半に砂質土が堆積しており、少量の土器と瓦が出土した。9世紀の遺構と考えられる。第98次調査で検出。

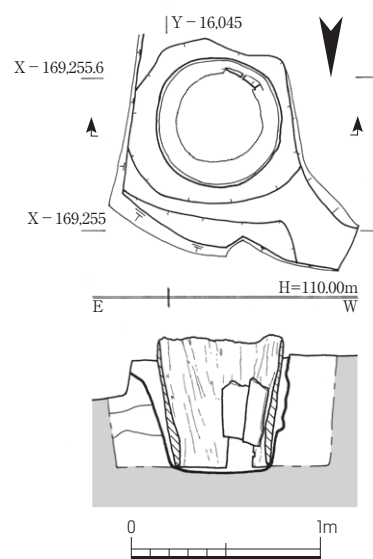
丸太刳り  
抜き井戸枠井戸枠に四  
角突起造出井戸枠は  
転用材

**斜行溝SD1177** (PLAN 4・7・12・32, PL. 28・31)

東の谷東岸の工房1の工房建物SB1178の南辺やや北



Fig. 119 SE1239井戸枠の四角の突起

Fig. 120 井戸SE1239の平面図・  
断面図 1:40



を斜行する素掘溝。工房の炉跡などを壊して北東から南西に流れる。幅0.9~1.2m、延長10mほどを検出した。大半が第93次調査区にかかるが、西端部は第98次調査区で検出した。第93次調査区南辺の断面図によれば、検出面からの深さは75cmほど。埋土は4層からなり、上から暗黄灰色粘質土(10~15cm)、暗灰褐色粘質土(10~15cm)、暗褐色炭混じり粘質土(20~30cm)、灰黒色粘質土(30cm前後)である。埋土には工房関係の遺物とともに、平安時代の土器などを含む。

沼状遺構

**護岸石SX1709・1711** (PLAN10, PL. 79) 飛鳥池遺跡南端の第112次調査区の谷部で検出した沼状遺構の汀線に配置された護岸石。大型の花崗岩を不規則に配置する。沼状遺構は、谷に繁茂した草木により形成された腐植土堆積で、平安時代の黒色土器を含み、この時期に谷が沼沢もしくは湿地と化していたことを物語る。腐植土堆積は上下2層あり、標高の高い位置(東)にある上層の護岸石をSX1711、低い位置(西)にある下層の護岸石をSX1709とした。下層の腐植土堆積からは、酒船石遺跡特有の天理砂岩(凝灰岩質細粒砂岩)の切石が多く出土した。護岸の大型の花崗岩とともに、酒船石遺跡の石材を当地に運んだものであろう。

B 中世の遺構

**東西溝SD1127** (PLAN 2, PL. 81) 北地区の石組方形池SG1100の南方で、調査区を東西に横断する素掘溝。当初は並行する数条の浅い溝を検出したが、それらの溝底で検出した。SD1127は検出した溝の中で最も古く、本流とみられる深く幅の広い溝で、北にわずかな弧を描きながら東流する (Fig. 121)。SD1127の平均的な規模は、幅1.0m弱、深さ約50cmほどで、石敷井戸SE1090の南東方、土坑SK1105の東に石組の堰を設ける。堰は、底部に大型の石を置き、上部にやや小ぶりの石を詰めた構造で、堰の下流(東)側はやや滝壺状に深くなる。この堰より上流(西)で北西-南東方向に向きを変えるが、これが次に述べる斜行溝SD1095にあたる。鎌倉時代の遺構とみられるが、この時代には周囲に顕著な遺構がなく、水田などの用水路として掘られた溝

上流は  
SD1095

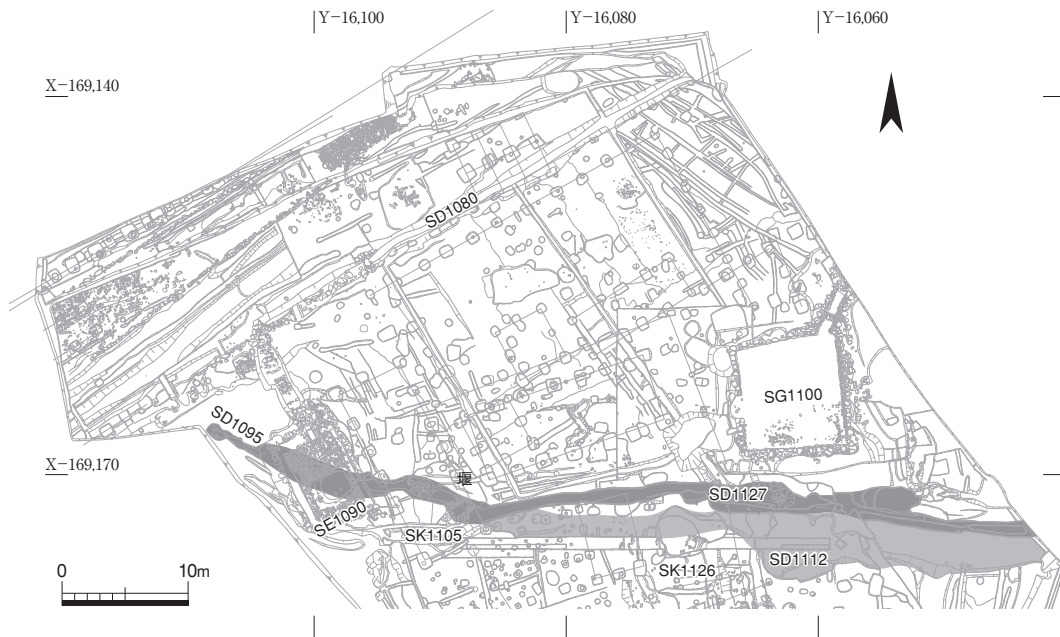


Fig. 121 中世の3条の溝の平面模式図 1:600

と考えられる。幾度か流路を変えながら存続してきた溝とみられ、後述するSD1112もその一部と考えられる。近現代とみられる、石詰め、あるいは竹製の溝も下流の重複する位置に掘られていた。出土遺物には、中世の瓦器椀などに混じって、飛鳥Vから奈良・平安時代に属する土器を含む。また、軒平瓦、平瓦、割熨斗瓦などが出土した。第84次調査で検出。

**斜行溝SD1095** (PLAN 2) 石敷井戸SE1090に重複する北西-南東方向の斜行溝。南東方向へ流れ、下流で東西溝SD1127に接続する。SE1090の北西およびSE1090との重複部分で、溝幅は0.6~1.0m、深さは30cm前後。溝内には砂が充満する。下流(東)で石組の堰を挟んでSD1127に接続する。堰部分には、SE1090の南西コーナー近くを走る別の斜行溝が合流するなど、SD1095の南方にも並行する溝が数条あるが、これらはSD1095よりも新しい耕作用の溝または暗渠で、石詰め、あるいは竹製の施設を伴うものである。これらの溝は、地形に沿って西側丘陵の先端から北地区へ流れこんだ雨水を、東方に排水するための施設で、中世以降ほぼ同位置に繰り返し開削されたものと考えられる。軒丸瓦1点が出土した。第84次調査で検出。

新しい溝が  
並行・重複

**東西溝SD1112** (PLAN 2) 東西素掘溝SD1127の南方で検出した東西素掘溝で、幾度か流路を変えるSD1127の一部と考えられる。SD1127に設けられた石組の堰付近から分かれて東流する幅1.5mほどの浅い溝で、下層にある土坑SK1126の東付近から南岸が南に広がる。下流(東)で幅広く不整形な土坑状に広がる。木簡1点のほか、木製品、丸瓦が出土した。第84次調査で検出。

## C 近世の遺構

飛鳥池は、東西の丘陵が最も狭まる谷筋を塞ぐように築堤し貯水した、近世に造られた農業用の溜池である。発掘調査では、池の西辺北寄りに2時期の樋門を検出し、これに伴う排水用の斜行溝を西側丘陵の裾部で確認した。このほか近世の遺構として、南地区の西の谷で、江戸時代の梵鐘鑄造土坑SX1600を検出した。東の谷の東岸には南北溝SD1198がある。

**樋門SX1168** (PLAN 4・5, PL. 83) 南地区の西の谷の出口北方、西側丘陵裾に設けられた近世飛鳥池の樋門。南北に並ぶ2つの掘立柱穴からなる。柱穴中心間は1m前後で、3尺もしくは4尺に計画されたものであろう。掘方はいずれも南北1.3m、東西1.0mほどの隅丸方形で、深さは不明だが最下部に近い部分とみられる。後述する樋門SX1171のような柱穴を結ぶ布掘掘方はない。東方の池から北方の排水路SD1169へ流下させるための樋門で、2本の掘立柱を門柱とし、この間に設置した板の取り外しによって排水する構造とみられる。SD1169に導水するために排水直後に向きを変える必要があるが、重複して検出されている土坑がその施設のものとして推定される。

**排水路SD1169** (PLAN 3・4, PL. 83) 樋門SX1168に接続する素掘りの斜行溝。南方のSX1168から排水した水は、排水直後に北方へ向きを変えてSD1169に導かれる。検出面での幅は1.0m前後、深さは10cm前後で、溝底は北に向かってわずかに下降する。堤の下をくぐらせて排水するためには、素掘りでは不適切であるから、後述する排水路SD1172のように、土管を樋管として用いていたと推定される。また本来は、西側丘陵の裾に沿って開削され、西壁は丘陵斜面に続いていたと推定され、樋門の間口と排水路が直交するのは、この地形を利用したものだろう。検出状況では、後に掘られたSD1172によってSD1169の西壁は削られたとみられる。

土管が  
樋管カ

**樋門SX1171** (PLAN 4・5、PL. 83) 先述した樋門SX1168の約2m西方に設けられた近世飛鳥池の樋門。SX1168よりも新しい。南北80cm、東西60cmほどの2つの柱穴を幅約40cmの溝で結んだ布掘掘方をもち、2つの柱穴は約1.2m(4尺)離れる。北の柱穴から布掘掘方にかけて、樋門の部材が遺存していた。SX1168同様、東方の池から排水して北方の排水路SD1172へ排水する。柱穴に対応するかたちで西側に重複する2つの土坑は、SD1172に導水するための施設に伴う遺構であろう。

樋門の部材  
が遺存

樋門の構造

遺構と部材から復元できる樋門の構造は、SX1168とは異なると考えられる。まず、樋門の部材をみると (Fig. 122)、全長129.3cm、断面は16.5cm(5.5尺)の方形で、一端は破損するものの、他端に平ホゾを残す。破損している端部側面には、幅6.6cm、長さ14.7cm以上の貫穴が貫通している。これとは別に、平ホゾを造り出した端部から62.1cmを心として、幅



Fig. 122 樋門SX1171出土部材 1:20

6.2cm、長さ17.3cm、深さ4.7cmのホゾ穴が貫穴と同一側面に彫られている。一端に平ホゾを造り出すことから、この材が水平材であれ垂直材であれ、これを受ける材が必要になる。この材が水平材とした場合、2穴それぞれに立つ門柱をつなぐ材となるが、少なくとも柱の底部および頂部に近い位置には水平材が入られると想定できる。一方、この材が垂直材とした場合、平ホゾのある端部の残存状況がよいため、これが下になっていたと推定でき、水平に置いた土台上に立てた門柱ということとなる。いずれにしても、掘立柱となるかどうかはともかく、2つの穴をつなぐ水平材が門柱の下部をつなぐ形を想定でき、このために布掘掘方が掘られていると考えられる。したがって、布掘掘方のないSX1168とは異なる構造であったと考えられるのである。

布掘掘方の  
用途

**排水路SD1172** (PLAN 3・4、PL. 83) 樋門SX1171に接続する素掘りの斜行溝。SD1169と同様、樋門からの排水は、直後に北に方向を変えてSD1172に導かれる。西側丘陵の斜面を利用して溝の西壁としており、樋門の位置をSX1169から西に移動した際、SX1169の西壁を削り取ったと推定される。溝の幅は溝底で1.0m程度、深さは20~50cmでやや凹凸があり、必ずしも北で低くならない部分がある。一部に素焼きの土管が設置されていた。

SD1169とSD1172は、西丘陵の落ち際のやや高いところを、わずかな勾配で導水しており、谷の中心部を流す単なる排水路ではないことがわかる。詳細は不明なものの、灌漑用水としての機能をもつことが理解できる。

**南北溝SD1198** (PLAN 3・4) 3条の掘立柱塀による変遷がある堰SX1199の東方に掘られた南北溝。瓦窯SY1200の西辺を破壊する。溝東岸の深さが1.5mに及ぶ深い溝で、幅は明確でないが、上端で6mほどとみられる。東の谷東岸の急斜面を削り込んでおり、性格および開削時期も明確ではないが、近世飛鳥池の機能時を遡るとみられ、ひとまずここに掲げる。

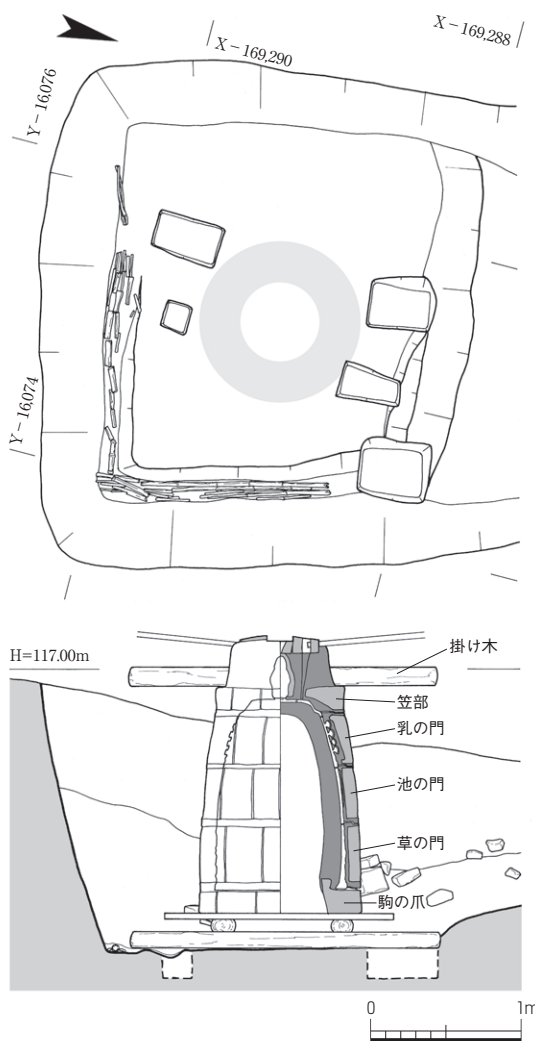
## D 梵鐘鑄造土坑SX1600 (PLAN 6・35、PL.82・83)

**遺構の概要** 調査区の西南部、西の谷地形の中ほどにあたる傾斜面で検出した (Fig. 123)。検出当初の土坑は東西3.3m、南北6.2mの長方形で、焼土 (鑄型外型) や炭の混じった土で埋まり、上面には近世陶磁器を含む南北方向の砂層が認められた。土坑は方形堅穴とその北に取り付く斜道とからなり、方形堅穴は上辺3.3×3.0m、下辺2.6×2.2mで、最大の深さは谷奥側の遺構検出面から1.7m下にある。斜道は長さ3.4mで、その中ほどの段よりも北側では底面をほぼ水平に造られ、鑄造後に鑄型を外す作業場であるとともに、搬出のスロープとなる。

方形堅穴と斜道

方形堅穴底の南壁際と東壁際には幅0.2m、深さ7cmの素掘溝が掘られるが、南壁の溝は中ほどから東に深く、東壁の溝は北に向かって深く造られて、土坑東北隅の南北方向が幾分長い方形孔にいたる。溝底には太さ3cmの丸竹が溝の進行方向に沿って多数詰められ、その上面と堅穴底とに、脚の長い草を分厚く敷き詰めている。これらは、土坑内に生じた水分を東北隅の方形孔に導き、汲み上げるための一連の施設と考えられる。

方形堅穴の構造



方形堅穴中央部の底には、南北一対で2組、合計4基の方形孔が掘られる。孔は一辺0.4~0.8mの不整形で、対をなす孔同士でも大きさ・形状はそろわないが、底面の高さ (深さ) は共通している。4基の方形孔は、これまでに確認された梵鐘鑄造土坑にもみられるもので、湯入れに際して起きる膨張による鑄型の崩壊を防ぐための緊縛作業に関わる孔とされ、具体的には次のように考えられている。鑄型を組むに際して、まず遠くに離れた2基の孔同士をまたぐように、下の掛け木を渡し、その中央部上に、板などによる平面をつくり、鑄型の最下段の「駒の爪」を据え、中子をつくる。次いで「草の間」「池の間」「乳の間」「笠部」の外型を積み重ね、別作の「龍頭」型を真土・鑄物砂で固定した後に、笠部の上に (龍頭を挟み込むように) 掛け木を通し、上と下の掛け木を荒縄などの綱で縛り、くさび状の木片などを使って強く締めつける。土坑底の4基の方形孔は綱を掛け木下をくぐらせる作業を容易にお

計4基の方形孔

方形孔と鑄型製作法

Fig. 123 梵鐘鑄造鑄型の復元図 1:50  
(土坑の平・断面図に加筆。名称は外型の仮称)

Tab. 7 梵鐘鑄造土坑SX1600出土梵鐘鑄造関係遺物一覧

	種 類	細 別	員 数	備 考
鑄 型	外 型 (コンニャク型)	駒の爪 (最下段)	6 個	外径103~106cm、内径52~61cm、高さ15cmの輪の内側上端に幅6.3cm、高さ8cmの突出部を設け、全体を6分割。側面に合印。上面中央に幅9cmの黒変した帯状部が残る。
		草の間 (第2段)	8 個	外径100~103cm、厚さ8.3cm、高さ36.6cmの円筒を8分割。側面に合印。内面に挟りを設け、唐獅子牡丹の別作范型を真土で埋め込み、縦横の浅い凹帯をつける。上下端にも真土が付着する。
		池の間 (第3段)	4 個	外径95~100cm、厚さ8.5cm、高さ34.2cmの円筒を8分割。側面に合印。縦帯部分に長方形の挟りを設け、銘の別作范型を真土で埋め込む。
		乳の間 (第4段)	8 個	外径84~94cm、厚さ4~10.3cm、高さ31cmの円筒を8分割。側面に合印。内面を方形に内削りし、各面4×5個の乳の別作范型を、真土で埋め込む。
		笠 部 (第5段)	6 個	外径80cm、高さ15cmの輪で、内側下部を削ぎ落す。6分割。側面に合印。
	真土型	笠 部	3 点以上	笠部下端での直径56cm、内高9.1cm。
		中帯部	2 点	中帯は幅3cmの緩やかな円弧。
		縦帯部	3 点	
		その他	多量	
	別作范型	竜頭 (鱗・宝珠)	3 片	鱗・宝珠部の破片。木製原型に粘土を被せてつくり、鑄型組みの最終段階に、鑄物砂で埋める。
		乳	38 片	円錐形の外表に菊花状の細弁を刻んだ抜型に粘土を押しつけてつくる。直径4.5cm、高さ3cm。
		撞 座	1 片	広い中房、八弁蓮華文。葉脈を細線で表示。仏隆寺、初生寺鐘などと類似。
		唐獅子牡丹	3 片	抜き型に粘土を押しつけてつくり、中帯下の文様区画に埋め込む。
		梵 字	3 点	厚さ6mmの板に浅い凹み。多聞天、広目天などの四天王を表すもの。
		文字 (飛鳥寺)	1 点	片面に反転文字の凹みをもつ素焼きの粘土板。幅6.5~7.2cm、長さ23.7cm、厚さ1.2cmの完形。
		文字 (鳥形山)	1 点	同上の「鳥形」部の小片。
	湯道・湯口	湯口の外枠	2 点	外径18cm、内径6.9cm、高さ12cm。
		ガス抜き外枠	1 点	外径11cm、内径7cm、高さ7cm。竜頭上の宝珠部に取りつける。
		湯樋 (丸・平瓦)	多数	炉から鑄型の湯口までの樋。平瓦を敷き、丸瓦を重ねる。丸瓦内面に黒褐色の焼けカスが付着。
		湯の塞ぎ	1 個	片面が強く加熱された粘土塊。樋の湯を止めるためのもの。
中 子		多数	やや強い加熱を受けた内反り面の残るものもある。	
金 属	熔 銅	押し湯三角錐形	1 点	竜頭の宝珠部上端に設けたガス抜きに溜まったもの。湯が全体にゆきわたったことを確認する。
		牡丹裏板状	2 点	唐獅子牡丹の別作范型の背後に流れ込んで固まったもの。
		その他板状	5 点	
	中子芯短冊		1 点	幅3cm、厚さ2mm、長さ16cmの銅板。
	キセル雁首		3 個	湯に溶かし入れたものの残りか。
	火 鉢		1 点	長さ40cmの完形。南端底出土。甑炉・作業場からの落とし物か。
	寛永通宝		1 枚	湯に溶かし入れたものの残りか。
そ の 他	楔状木片	長さ20cm前後	4 片	掛け木間を緊縛する際に使用したものか。
	木炭片		少量	型や中子などの乾燥用あるいは鑄型の子熱用か。
	近世陶器		少量	染付碗細片。鑄造作業時に使用されたものか。
	竹		多数	土坑底の排水用。南・東辺の溝に詰め込む。
	藁・草葉		多数	土坑底の排水用。



Fig. 124 飛鳥寺旧鐘

こなうための施設である。したがって、鑄型はこれらの方形孔の中央に位置して据えられ、Fig. 123の平面図には鑄型の大きさをアミかけの輪で示した。**梵鐘鑄造関係出土遺物** 土坑SX1600からは古代の工房関係の遺物も出土している。Tab. 7には、梵鐘鑄造関係の出土遺物を示した。また、Fig. 123の断面図にはそれらを総合して作成した鑄造鑄型の全容復元図を重ねて示した。鑄型は、駒の爪・草の間・池の間・乳の間・笠部の5段の外型、その内面に塗られた真土型、外型に埋め込まれた「別作范型」(撞座・銘文・唐獅子牡丹・乳など)、竜頭型のほかに、多量の中子塊があり、湯口・ガス抜き孔の外枠、溶解炉から湯を流し込む際の「樋」と湯入れの最終段階に湯を止める「塞ぎ」の粘土塊までが、投棄されている。また、唐獅子牡丹の別作范型を外型に埋め込む際に、裏面に空隙が生じたようで、そこへ流れ込んで固まった熔銅片があり、宝珠上に設けたガス抜き孔にたまった「押し湯」がある。その他、短冊形の銅製品は、中子を形成する際の芯の一部とみられ、キセル雁首・寛永通宝銅銭は湯に溶かし入れたものの残りの可能性がある。楔形の木片は掛け木を締めつける際に使われ、木炭は型や中子の乾燥あるいは予熱を加える際のものであろう。染付碗は土坑埋土の下部からも出

出土遺物から鑄型復元

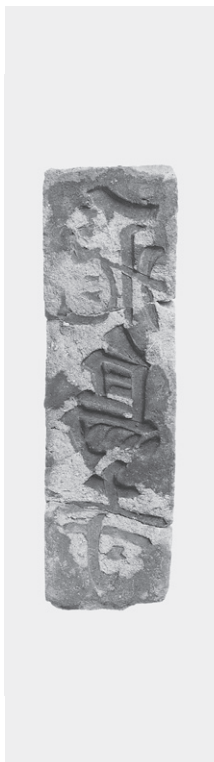


Fig. 125 飛鳥寺銘別作范型



Fig. 126 出土鑄型など (矢印は「飛鳥寺」別作范型)

土し、土坑上面を流れる南北流路出土例とともに、作業場で使われた茶碗の可能性はある。なお、土坑南壁際底面出土の火鉢は完存品で、溶解炉・作業場からの落とし物とみられる。

この土坑で造られた梵鐘は、現存しない。しかし、土坑内に廃棄された「飛鳥寺」銘の別作范型 (Fig. 125) から、梵鐘が『奈良縣高市郡寺院誌』(高市郡役所、1924年) に記された安居院の鐘楼に掛かっていた梵鐘であり、「鳥形山」・「梵字」の別作范型や草の間の唐獅子牡丹・撞座・乳の別作范型なども、安居院に残る記録や写真と一致することが判明した。Fig. 124は、昭和18年(1943)の金属回収令によって香川県直島に移送されるために鐘楼から降ろした時に撮影された写真を複写・加工したもので、側面には、チョークで「直島」と大書されている。梵鐘には、縦帯に陽鑄銘の「梵字+飛鳥寺」・「梵字+鳥形山」・「梵字+安居院」、陰刻銘の「住持良海」があり、池の間には「延享二乙丑年三月二十二日 鑄物師統領大工職」「和州葛下郡五位堂村住小原石見掾藤原昌次作」の陰刻銘がある。鐘の大きさは『奈良縣高市郡寺院誌』は「高さ四尺九寸八分、直径二尺七寸八分、厚さ二寸五分」とする。

安居院の  
資料と一致

延享2年  
(1745)

延享2年(1745)春に大和国五位堂村(現香芝市)からの「出吹き」で鑄造した作者は、翌3年に大字陀町抄福寺鐘、延享5年に榛原町初生寺鐘を「出吹き」する。現存する初生寺鐘と写真の飛鳥寺鐘は竜頭の鱗・顔面・宝珠の大きさや特徴が酷似し、撞座の蓮弁の形や、乳の形状なども、土坑出土鑄型片と一致する。これらの別作范型は五位堂村の工房内で共通の抜型から製作されたものと推測される。なお、安居院前住職山本雨宝氏が残した記録には、梵鐘の大きさや銘を記した後に「鑄造場所ハ飛鳥池ノ傍ニテアリシト古老言ヘリ」と記されており、調査はおよそ200年前の出来事についての伝承の正しさを裏づけることとなった。飛鳥池の西の谷奥で鑄造された梵鐘は、飛鳥池の西側の里道を下り、飛鳥寺瓦窯のある丘陵裾を迂回して、安居院境内の鐘楼に吊るされたのであろう。その間の直線距離は約260mである。

鑄造場所の  
伝承と一致

## 8 飛鳥池東方遺跡

### A 調査の概要

飛鳥池東方遺跡は、飛鳥寺の東南方に位置し、飛鳥池の東岸をなした丘陵と、飛鳥坐神社南の丘陵に挟まれた、南東から北西に下る谷筋における発掘調査で確認した遺跡に冠した名称である。ここでは2次（第86次・第92次）にわたり、小規模な調査区を計18カ所設定して遺跡の解明に努めた。このほか水路付け替え工事に伴う立会調査（第91-6次）も実施している（Fig. 127）。それらの調査の結果、谷筋の西寄りに大規模な流路SD1700が存在し、またそれとほぼ方位を合わせる掘立柱塀数条、掘立柱建物数棟などを確認した。このほか平安時代後期の水田遺構を検出している。

計18カ所の  
小調査区

#### i 調査区と検出遺構の概要

第86次調査は1～8区の調査区、第92次調査はA～J区の10カ所の調査区で、一部を第86次調査と隣接する位置、あるいは一部を重複させて設定した。これらの調査区は、万葉文化館の外構による盛土造成や水路の付け替え工事の予定地であり、遺構面の深度の把握を主目的に調査を実施した。このため溝の掘り下げや断割調査を最小限にとどめた調査区がある。これらとは別におこなった第91-6次調査（立会調査）は、小規模な計4カ所の施工区における調査で、断面観察にとどまったものの、第92次調査の成果を補う知見が得られた。この立会調査では平面的な遺構検出をおこなっておらず、個別に解説する遺構がないため、成果は調査の概要の中で触れることとする。

**第86次調査** 1区は、標高111.3mの水田に設定した南北45m、東西4mの調査区で、掘立柱建物1棟と、小穴列1条、東西溝1条（SD1720）などを検出した。

2区は、1区と同じ水田の北西に接して設けた南北25m、東西2mの調査区で、性格不明の礫群を検出したにとどまった。

3区は、2区の北西の水田（標高110.9m）に、東で北に振れる南北5m、東西18mの調査区を設定した。近接する2区より検出面の標高は低い、水田の標高差程度であり、『年報1998-II』53頁で述べたような大きな削平はない。調査区中央部で土坑1基を検出した。

4区は、1区の西方に位置する一段低い水田（標高111.0m）に、北で西に振れる南北25m、東西6mの調査区を設定した。調査の結果、調査区東南隅から北西方向に延びる平安時代前期頃の斜行流路の東北岸（SX1761）を検出した。北端部には比較的堅く締まった砂層が堆積していることから、中央部のみを深掘りし、さらにその深掘り北半を掘り下げて堆積状態の確認を試みた。その結果、調査区全体が流路SD1700の中にあり、古代から中世にかけての流路が重複し、SX1761を護岸とする斜行流路の中心は南西方向にあることが判明した。SX1761より古い流路の底や東岸は確認できていない。SD1700の中心は調査区より西方にあり、東岸も調査区の東方に位置すると考えられる。なお、1区で検出した東西溝SD1720もこの調査区で合流する可能性があるが、平面および断面の土層では確認できなかった。

平安前期の  
斜行流路

調査区全体  
がSD1700中



堀はすべて  
6区に連続

5区は、4区の北方にある一段低い水田（標高110.3m）に、東で北に振れる南北5m、東西15mの調査区を設定した。北で西に振れる5条の掘立柱堀を検出した。これらの堀はいずれも北西に設けた6区に連続する。

SD1700の  
最末期流路

6区は、5区から北へ一段下がった水田（標高109.8m）に設定した調査区で、当初は北で西に振れる南北22m、東西5mの調査区を設定したが、柱穴を複数検出したため、それらの解明のために西辺を5m拡張した。この東西10mに拡張した調査区を主調査区と呼ぶ。主調査区の西南隅では、落ち込み（最終的には整地SX1732と解釈した）と東西石組溝SD1734を検出し、調査時はこれらをオンドルをもつ竪穴建物と解釈したため、その全容解明を目的として西辺の南部をさらに南北9m、東西7mにわたって拡張した。その結果、この拡張区の西半は、古代の流路SD1700の最末期流路の氾濫原であることが判明したが、さらに落ち込み（先述の整地SX1732）が北方へ延びることから、その北肩を探するため、この北方の南北7m、東西5mを拡張した。このため最終的には西辺部が凸凹をなす不整形な調査区となった。主調査区西辺部に沿って2度にわたって拡張した調査区をまとめて拡張区と呼ぶ。

6区の主調査区では5区から連続する5条の掘立柱堀を検出した。この西方で竪穴建物と解



Fig. 127 飛鳥池東方遺跡調査位置図 1:1200 (Fig.番号は当該Fig.の断面位置を示す)

積した落ち込みは、結局、8区から4区へ続く流路SD1700の東岸に施した整地SX1732であることが判明した。竪穴建物のオンドル施設と解釈した東西石組溝SD1734は、時期や性格を解明することができなかった。このほか北で東に振れる斜行溝SD1733を検出した。

7区は、6区北方の一段落ちた水田（標高109.3m）に、北で西に振れる南北13.5m、東西5.5mの調査区を設けた。南北小穴列1条を検出した。

8区は、7区の北西にあたる水田（標高108.1m）に、当初、北で西に振れる南北20m、東西8.5mの調査区（主調査区と呼ぶ）を設定したが、そこで検出した流路SD1700の東岸を検出するために、東辺北端から東方へ幅3.0m、延長31mにわたって拡張した（拡張区と呼ぶ）。ここでは飛鳥池遺跡の石組方形池SG1100（第84次）から北東へ排水する溝SD1101の検出を主目的としたが、これは発見できなかった。SD1101が北へ振れるか、削平を受けたとみられる。拡張区東端付近で2条の掘立柱塀を検出し、これより西方では、これと同一面で平安時代後期まで遡る水田の畦畔4条と水田面3枚などを確認した。さらに調査区の北辺に沿って主調査区・拡張区で水田下層の調査をおこない、先述の水田に先行する水田畦畔1条のほか、平安時代まで存続した流路SD1700を検出した。

SD1101は  
確認できず

水田面と  
畦畔を確認

**第92次調査** A区は、飛鳥池東方遺跡では最も南に位置し、標高が最も高い水田（標高114.6m）に北で東に振れる南北4m、東西5mの調査区を設定した。南西方が飛鳥池遺跡の東を限る丘陵となるため、地山上の堆積状況を確認する目的で、西南隅を丘陵側に平面1m角で拡張したが顕著な遺構は存在しなかった。

B区は、A区から北東方向へ3段下の水田（標高112.4m）に、北で西に振れる南北6.0m、東西4.5mの調査区を既存の水路沿いに設定した。床土直下が流路堆積土となり、現水田面から深さ1.8mほど（標高110.7mまで）を重機で掘り下げたが、明瞭な遺構面を確認することができなかった。堆積土は砂や粘土の互層で非常に脆く、四周の壁面が崩壊しはじめたため、詳細な調査を断念し、土層の観察も略測にとどめざるをえなかった。したがって調査区全体の写真撮影や実測などもおこなっていない。

調査区は流  
路堆積土内

C区は、B区と同じ水田の西方丘陵裾に設けた南北5.0m、東西4.5mの調査区である。地形を反映して東に下がる整地がおこなわれており、柱穴などの遺構検出は困難をきわめた。まず床土直下で遺構検出をおこなったが、遺構を明瞭に検出できなかった。このため調査区北半の整地土を除去して遺構検出を試みた。これによりSB1748の柱穴1基を検出したことから、全体の再精査をおこない、2棟の掘立柱建物を検出した。また調査用の排水溝の断面観察により、溝あるいは自然流路の堆積土を埋めて整地を施していることが判明したため、遺構のない北半の中央部の整地土を除去して下層の調査（標高111.2m前後まで）をおこなったが、明瞭な遺構は確認できなかった。なお、最終的な断面の観察により、掘立柱建物の柱穴は床土直下の層から切り込んでいることが明らかになった。

2棟の建物  
の一部検出

D・E区は、B・C区北方の一段下の水田（標高111.9m）にあたる。D区は既存水路沿いに北で西に振れる南北5.0m、東西3.5mの調査区を設定し、南北掘立柱塀2条と、それより新しい東西素掘溝2条を検出した。E区は、丘陵裾に設けた南北5m、東西5mの調査区で、北東下がりの緩傾斜面に掘られた素掘小溝を検出したにすぎない。

F区は、新設する水路部分の調査で、第86次調査の1・2区の東に沿って設けた南北50m、

廂付の建物  
と堀を検出

東西3.5mの調査区である。北半で第86次2区と幅1m程度を重複させている。調査の結果、第86次1区で確認していた掘立柱建物が、西北面に廂をもつ建物SB1741となることが判明した。また、2区では確認できなかった掘立柱堀SA1724を新たに検出した。これらの堀と建物はほぼ並行する。

調査区全体  
流路堆積中

G区は、第86次6区西拡張区の西辺南端から既存の水路東方の舗装路まで、東西9.5m、南北5.0mの調査区を設定した。調査区は2段の水田（標高109.8m・109.3m）にまたがる。6区拡張区の西南部に古代の流路SD1700がかかっていたため、その全容解明を目的としたものである。調査の結果、G区はほぼ全体が流路堆積の中にあり、この調査区だけでも数時期の流路の変遷を把握した。ただし『年報1999-II』時点では、第86次6区とあわせた検討がなされておらず、今回の報告で堆積の所見をやや修正しなければならない。なお、平面では検出していないが、G区の土層断面で、3時期以上の古い水田畦畔を観察することができた。

H区は、第86次6区主調査区の東辺北端から東へ延ばした、東で北へ振れる南北8m、東西13mの調査区である。6区主調査区北端付近で検出した東に延びる掘立柱堀SA1726の延長部の検出を目的としたもので、予想通り6間分7基の柱穴を検出するとともに、これに取り付く掘立柱南北堀SA1753を検出した。

SD1700の堆  
積様相確認

I区は、L字形に調査した第86次8区の南に接して、東西31m、南北5.5mの調査区を設定し、8区で検出した古代の流路SD1700東岸の様相の解明を目的とした。その結果、SD1700の東岸は8区から南に連続することを確認し、数時期にわたる堆積の様相を把握することができた。また、8区で掘立柱堀とみていた柱穴列が掘立柱建物SB1745の北妻であることが判明し、8区では検出しきれなかった柱穴が、掘立柱堀SA1755となること、8区で掘立柱堀とみていた2基の柱穴が、I区では1基の柱穴を検出しただけで、それ以上南へ続かないことが明らかとなった。なお、I区におけるSD1700の調査は、掘り下げが深くなり、8区の埋戻土が崩落する恐れが生じたため、北に幅約2mの未掘部分を残し、幅4.5mの範囲を調査することにした。また、I区では、時間的な制約から、8区で確認した水田については調査をおこなわず、その下層にあるSD1700の検出を優先した。

SD1101は  
確認できず

J区は、第86次8区の北西に設けた一段低い水田（107.8m）内に、南北（南東-北西）5.5m、東西（南西-北東）5.0mの小調査区を設定した。飛鳥池東方遺跡では最も標高の低い水田である。調査目的は、飛鳥池遺跡の石組方形池SD1100から北東に排水する石組溝SD1101の延長部を明らかにすることにあったが、第86次8区に続いてこの調査区でも延長部を検出できなかった。延長部は、その後のSD1700の流れにより、攪乱を受けたものと考えられる。J区全体はSD1700の中にあり、標高106.2m以下がその堆積土となることを確認したが、調査区の規模が小さく、流路の底を確認することができなかった。なお、隣接する第86次8区で検出した水田面は、この調査区でもあるようだが、後世の攪乱が及んでおり、調査区の規模が小さいこともあって、平面および土層で明瞭に検出することはできなかった。

計4ヵ所の  
立会調査

**第91-6次調査** 水路付け替え工事の施工に際しておこなった立会調査。調査地は、第92次調査のB～E区を設定した上下2段の水田と、それより南の一段高い水田である。施工区は大きく南区と北区の2ヵ所に分かれ、さらにB区を挟んで小施工区が2ヵ所あり（Fig.127。ただし、平面位置はやや正確性を欠く）、計4ヵ所で立会調査を実施した。南区はその北半がB区の西方約6

mに位置する、南北（南東-北西）20m、幅3mの施工区で、南半がB・C区よりも一段高い水田（標高112.9m）となる。北区はE区の東北隅にかかる南北（南東-北西）15m、幅3mの施工区である。このほかB区を挟む2カ所の小施工区は、それぞれ幅1m、長さ3mの規模をもつ。ここでは標高112.2m前後まで掘り下げたが、いずれも流路堆積の中にあることを確認した。

小施工区は  
流路堆積中

南区では、北端で標高111.0m、南端で111.5mまで掘削した。北端の層序は耕土、暗褐色粘質土（床土）で、標高111.5m以下が流路堆積となり、全体を暗灰色粘土が覆い、その下に灰色粗砂、灰色粘土、灰色砂、灰色粘質土が堆積し、溝の中心が北東方向にある状況を確認した。灰色砂から7世紀代の平瓦が出土したものの、全体的に遺物の出土量は少なく、流路としては最終段階の堆積と解釈した。流路の底は検出していないが、灰色粘質土以下で検出した青灰色粘土（標高111.0~111.2m）は流路以前の自然堆積とみられ、この部分がある時期の別の流路の西岸を示すと考えられる。

古い別の  
流路の西岸

北区は、北半の東寄りが既存水路の施工時に破壊されていた。西辺北端で西方に上がる丘陵の斜面地山を確認し、また地山を削る素掘溝2条を検出した。北（上手）の溝は深さ70cmで、施工区の壁面に対して鋭角に交わるため幅は確定できない。南（下手）の溝は深さ25cmで、断面U字形を呈し、やはり幅は確定できない。いずれも水田耕作（あるいは棚田の段落ち際の溝）に伴う溝である可能性が高い。施工区中ほどは第92次E区の東北隅にかかる。E区で遺構面とした炭混じりの茶灰褐色砂質土、およびその下層の黄色粘土ブロック混じりの灰褐色～茶褐色粘質土は整地土であり、それらの下70cmほど、標高110.5m以下に青灰色粘質土の流路堆積を確認した。この流路堆積は自然流路に由来するとみられる。調査では標高110.2mまで掘り下げたが、流路の底には到達しなかった。地山面は東方の谷に向かって急激に落ち込むと考えられる。

自然流路  
由来の堆積

## ii 基本層序と谷の堆積状況

第86次1・2区および第92次F区は、同一水田（標高111.3m）に設けた調査区である。その基本層序は、上から①耕土・旧耕土（厚さ15~20cm）、②床土に相当する淡褐色～灰褐色～黄灰色の粘質土（厚さ20~40cm）があり、その下に中世の整地土とみられる③灰白色～灰褐色～淡褐色の砂質土（厚さ10~40cm）が堆積する。③層は、1・2区ではほぼ全面にあるが、F区では、2区の南端から7mに相当する位置から北方のみであって、それより南には④瓦や土器、炭、礫を含む暗灰褐色砂質土（『年報1998-II』52頁・『同1999-II』55頁で「瓦礫層」とした層。厚い所で10cm前後）がある。この層は、1区北端（2区南端）の南約13mより北に広がるが、2区では遺物や礫が貼り付いたような状態で出土しており、F区ではほぼ全面に現れたが、やはりごく薄い。その下は遺構検出面の⑤暗灰色～暗褐色の土で、2区では北端から南5mの範囲にはみられず、自然堆積の⑥褐色砂となり、この面で遺構検出をおこなった。

遺構検出面の⑤および⑥層の上面の標高は110.4~111.1mで、1区北端やや南のF区で最も高く、南北に緩やかに下り、1区中央やや南付近が最も低い。これは掘立柱建物SB1721付近の遺構検出面が高く、素掘溝SD1720付近が最も低いこととなり、遺構のあり方と整合する。なお、耕作に伴う素掘小溝は床土の直下（③・④層の上面）で検出し、また第92次F区北方で検出した小穴の多くも同様である。

F区北端が  
最も高い

第86次3区の基本層序は、耕土・床土下に、青褐色粘質土（厚さ20~30cm）、遺物包含層であ

る黒灰色粘質土（厚さ0～20cm）が堆積し、これを除去した茶褐色砂礫の上面で遺構検出をおこなった。検出面の標高は109.7～110.2mで、北西方向に下がる。黒灰色粘質土上面には遺物が貼り付いた状態で出土しており、第86次1・2区、第92次F区の④層の様相と似る。東端部の遺構検出面は、2区北端より40cmほど低いが、現状の水田面の標高差と同じであり、1・2・F区の④層が3区まで広がると考えられることから、『年報1998-II』53頁で報告したような大きな削平はなく、ほぼ旧地形に沿うと考えられる。

検出面の削平はない

第86次4区の基本層序は、耕土・床土直下の標高110.3m以下は、概ね調査区全体が古代以来の流路堆積である。平安時代前期頃の斜行流路東北岸SX1761の検出面の標高は110.0mで、それより上には11～12世紀の瓦器を含む暗灰色～灰褐色の砂質土・粘質土が西方に落ちるように堆積しており、さらにこれらを切り込む新しい流路堆積がある。流路の位置はほぼ踏襲されてきたようであるが、流路の埋土については後述する流路SD1700の解説（162頁）で触れる。

流路の位置はほぼ踏襲

第86次5区の層序は、耕土・床土下に、黄灰色粘質土（厚さ約10cm）、赤灰色粘質土（厚さ約10cm）が堆積し、その下には暗灰色土（厚さ5～15cm）の整地層があり、さらにその下に暗赤灰色～暗青灰色～青灰色の砂からなる自然堆積層がある。調査区の東半には黄灰色粘質土・赤灰色粘質土がなく、床土直下の暗灰色土の上面で遺構検出をおこなった。一方、西半には暗灰色土がなく、黄灰色粘質土と赤灰色粘質土を除去した自然堆積層の上面で遺構検出をおこなった。すなわち遺構検出面は、南東が高く北西が低い状況で、検出面の標高は109.5～109.8mである。

第86次6区および第92次G・H区は、6区拡張区とG区に流路SD1700がかかるため、東部と西部では土層の状況が異なる。東部の層序は第86次5区と類似し、耕土・床土の下に黄灰色粘質土（厚さ約10cm）と赤灰色粘質土（厚さ10～20cm）に相当する土があり、その下層の暗灰色土（約10～30cm）の上面で遺構検出をおこなった（『年報1999-II』56頁、第92次H区の報文で、灰色土、黄灰色土、暗褐色土とした土が、それぞれ上記の黄灰色粘質土、赤灰色粘質土、暗灰色土に相当する）。暗灰色土の下層は、礫を混えた暗青灰色～青灰色～灰色の砂（自然堆積層）となる。暗灰色土は6区の南方約8mには現れず、それより北方にあって北方ほど厚くなる。このため6区の南方は赤灰色粘質土下の自然堆積層で遺構検出をおこなった。遺構検出面の標高は109.1～109.5mで、H区では109.4mでほぼ一定だが、6区では北方ほど低い。なお、H区は第86次3区と東方で近接するが、3区でみられる遺物が上面に貼り付く黒灰色粘質土はみられないばかりか暗灰色土も薄く、東南隅付近では暗灰色土がなく灰色砂の上面で遺構検出をおこなった。したがって、3区よりH区のほうが削平は大きいと考えられる。

3区よりH区の削平大

一方、西部の6区拡張区およびG区では、上層にある黄灰色粘質土と、下層にある赤灰色粘質土との間に、黄褐色あるいは黄灰色・灰色・明灰色・青灰色の砂～粗砂層を複数はさみ、G区ではこれが古い水田畦畔にのるので、この砂～粗砂層は旧水田あるいは浅い溝（洪水の痕跡か）に伴うものらしい。赤灰色粘質土は6区拡張区西方で深く（最大厚さ30cm）なり、その下層にある（黄斑）灰色粘質土（厚さ20～40cm）を除去してG区では流路SD1700の後期流路を検出した。遺構検出は、赤灰色粘質土を除去した面、西方では（黄斑）灰色粘質土を除去した面でおこなった。この（黄斑）灰色粘質土は、『年報1999-II』図61でSD1700の末期流路の一部にあてていたもので、これが第86次6区拡張区まで氾濫原状に浅く及んでいる（Fig.130で「最末期カ」とした土層）。したがって、これを除去してその下層の遺構を確認したものである。なお、6区拡張区

やG区の西部では、東部で遺構検出面とした暗灰色土は現れず、礫混じりの灰色砂（自然堆積層）の上面が遺構検出面になる。G区の土層観察によれば、これらの自然堆積層の下層には青灰色粘土の地山があり、標高107.7m付近で青灰白色の岩盤に達する。すなわちSD1700は、これらの自然堆積層と岩盤を掘り込んでいる。

SD1700は  
自然堆積層  
や岩盤を  
掘り込む

遺構検出面の標高は、6区主調査区南方が最も高く109.5m、SD1700関連遺構の検出面を除くと、最も低いのが6区拡張区西部中央付近の108.7m、SD1700後期流路の検出面は、標高108.6m前後、最末期流路の検出面は109.2mである。

第86次7区の層序は、暗褐色～暗灰色粘質土（耕土・旧耕土、厚さ20cm）、褐色斑のある黄灰色粘質土（床土、厚さ20cm）の下に、調査区南端で黄灰色～褐灰色の粗砂（厚さ5～20cm）があり、調査区中央部や北部では茶色斑のある灰褐色粘質土（厚さ20～25cm）が広がる。それらの中には褐色斑のある褐灰色粘質土（厚さ10cm）があり、これを除去した赤褐色砂質土の上面、また調査区西南隅部では暗褐灰色粘質土の上面で遺構検出をおこなった。遺構検出面の標高は108.8～109.0mで、北方で低い。なお、耕作に伴うとみられる素掘小溝は、黄灰色～褐灰色の粗砂層上面あるいは褐灰色粘質土の上面から掘られている。なお、7区の遺構検出面付近の土層は6区とはほとんど共通しない。

第86次8区および第92次I・J区の層序は、耕土の下に暗灰褐色～褐灰色～褐色の砂質～粘質土（厚さ35～50cm）の床土があり、これを除去した褐灰色砂質土上面で遺構検出をおこなった。遺構検出面の標高は107.4～107.7mである。この下には、褐灰色～黄灰色～灰色の砂～粗砂が1m以上堆積し、淡青灰色～青白色のシルト～粘土の地山に至る。遺構面は、調査区東端から10～12mで西方に緩やかに下りはじめ、褐灰色砂質土はなくなり、その下層の砂～砂質土が現れる。これは平安時代後期まで遡る水田の土（暗灰色～粘質土上に灰色砂が堆積する）と考えられる。水田耕作面は少なくとも上下2層あり（標高107.2mおよび107.0m）、確認した範囲で最大の厚さは70cmである。下層の水田の厚い床土（淡褐灰色粘質土）を除去すると、平安時代後期まで存続した流路SD1700が現れる。SD1700を検出した面の標高は、8区およびI区では106.2～106.6mだが、自然地形が低いJ区では106.0m前後である。

水田床土下  
にSD1700

第92次A区の層序は、暗茶褐色粘質土（耕土）、褐灰色粘質土（床土、厚さ25cm）の直下に、地山の花崗岩風化土を切り崩して整地したとみられる、厚さ5～10cmの褐灰色～黄褐色～黄灰色などの粘質土が堆積する。調査区西南隅の拡張区では、表土直下で地山の岩盤を確認したが（標高114.3m）、地山は北東方向の谷に向かって急激に落ち込んでおり、調査区東北隅（標高113.8m）では地山を検出できなかった。遺構検出は、整地土を除去しておこなったが（標高114.1m前後）、等高線に沿う素掘小溝を3条検出したのみで顕著な遺構はみられなかった。

第92次B区の層序は、前記した事情から略測によるが、褐色粘質土（耕土）、暗青褐色粘土・青灰色粘土（床土、厚さ20cm、底面標高112.0m）の下に、流路の堆積土とみられる青灰色粘土、淡褐色砂、暗青灰色細砂、暗灰色粘土などが一層10cm前後の厚さで互層をなしていた。

B区と同じ水田の第92次C区の層序は、耕土・床土以下に、上から灰褐色粘質土、黄灰色粘質土、茶灰色粘質土など（いずれも厚さ20cm前後）が、地形を反映してやや東下がり堆積していた。これらは掘立柱建物のベースとなる整地土で、遺構検出面の標高は111.9mである。この下層（標高111.5m）には、青灰色粘質土、暗青灰色粘土などがやや急な東下がり堆積してお

り、地山は確認できなかった。これらはB区の流路堆積土とは様相を異にしており、自然堆積層と考えられる。

整地土上で  
遺構検出

第92次D区の層序は、耕土、黄褐色粘質土・黄灰褐色粘質土・灰褐色粘質土（いずれも床土、厚さ60cm）の下に、黄灰色～暗灰褐色の粘性砂質土（厚さ約10cm）があり、その下層に灰褐色～黄灰褐色の砂質土（厚さ10～20cm）が堆積している。その上面で遺構検出をおこない、2条の東西溝SD1751・1752とともに、掘立柱塀SA1749・1750を検出した。標高は111.2m。遺構検出面の下層は、西方で灰褐色粘性砂質土、東方で暗褐色粗砂となるが、これらは自然流路の堆積土とみられる。

D区と同じ水田である第92次E区の層序は、耕土下に黄褐色土・黄灰色土（いずれも床土、厚さ20～50cm）があり、その下に部分的に存在する炭混じり暗褐色砂質土を除去した茶灰褐色砂質土（炭を混入）の上面で遺構検出をおこなった。検出面の標高は南西で111.7m、北東で111.2mであり、北東に下がる緩斜面をなす。遺構は等高線に沿う素掘小溝数条のみであった。検出面以下の土層は、黄色粘土ブロック混じりの灰褐色～茶褐色の粘質土で、その下に地山の花崗岩風化土に由来する黄灰褐色の粘質土が堆積する。調査では確認できなかったが、第91-6次調査の成果から、この下（標高110.5m以下）は自然流路の堆積土になると考えられる。

## B 検出遺構

検出した遺構は、東方遺跡の谷西岸付近を流れる流路SD1700、これに関連する礫敷や溝3条などがあり、そのほか掘立柱建物6棟、掘立柱塀13条、平安時代後期に遡る水田とその関連遺構などに分けられる。ここではまず流路SD1700とそれに関連する遺構について記し、その後に掘立柱建物や塀などの建物遺構などについて触れ、最後に項を改めて第86次8区で調査した水田遺構について述べる。

### i 流路SD1700（PLAN13、PL.91・92）

SD1700を延  
長300m検出

流路SD1700は、断続的ながら4ヵ所、9調査区で延長約300mにわたって検出した。SD1700の初期流路の東岸を検出したのは、北から第86次8区、第92次I区、第92次G区で、西岸は、時期が不明確なもの第91-6次南区がそれにあたる可能性が大きい。また、調査区全体がSD1700の流路堆積の中にあるのは、北から第92次J区、第86次4区、第92次B区、その南北に位置する第91-6次立会調査の2ヵ所の小施工区であった。さらに、SD1700に関連する遺構として、第86次1区でSD1700に合流するとみられる溝SD1720を、第86次4区で平安時代前期頃の斜行流路の東北岸SX1761を検出した。

4 時 期 の  
流 路 堆 積

SD1700の流路堆積は大きく4時期に分かれる。それを古い順に、初期流路、前期流路、後期流路、最末期流路と呼ぶ。以下、調査区ごとにSD1700の検出状況を述べる。

**第86次8区** 第86次8区では、まず平安時代後期の水田の下層で最末期のSD1700を検出した。東岸は8区東端から西へ15m付近にあり、この堆積土（褐灰色粘質土・暗青灰色粘質土・暗青色砂質土、厚さ10～20cm）は調査区西辺付近まで延びる。ここから、この付近での最末期の流路幅は25m程度を測る。満水時の深さは70cmを越えるが、堆積土の観察からは常時水流があった様子

最末期流路  
幅は約25m

はなく、氾濫原状の広がり、常時は広く浅い自然流路的な溝と考えられる。

最末期の流路の堆積土を除去すると、調査区東端から西18m付近に、初期の流路の東岸とみられる深さ1.1mほどの急激な落ち込みがあり、底近くの堆積土からは7世紀中頃の遺物が出土した (Fig. 128)。ここから西方は、岩盤起源と考えられる淡青灰色粘質土の地山が9mほど平坦に (標高105.6m) 続いたのち、これらを切り込んだ後期流路が、さらに30cmほど落ち込んで最深部となる。後期流路の東岸は初期流路の東岸より約6m西方にあり、西岸は調査区の西外に続く。後期流路の幅は15m以上、深さは1.2m程度である。埋土は、上層が暗青灰色～黒灰色の粘質土や粘土で、下層が礫を含む褐灰色～灰色の砂や粗砂である。

後期流路幅  
は15m以上

前期流路の東岸は初期流路の東岸より5mほど西方にあって、東岸はやや浅く、後期流路の最深部と同じ深さでそれよりもやや西方で幅広の底部をもつ。西岸はやはり調査区の西外にあり、確認できる前期流路の幅は16m以上、深さはやはり1.2m程度を測る。埋土には大小の礫をまじえ、上層は暗灰色粘質土だが、下層は黒灰色～褐灰色～暗褐色の砂や粗砂である。溝底近くには長径40～60cmに及ぶ大礫が埋没しており、これらが護岸を形成していた可能性がある。

前期流路幅  
は16m以上

初期流路も西岸は調査区の西外となるため、全幅は21m以上となり、深さは最大で1.5m程度となる。埋土は東岸が礫を含む暗灰色～褐灰色の砂や粘土で、やや細かい堆積状況を示すのに対し、西岸は砂や礫を混じる褐灰色～暗灰色の粘質土が厚さ10～20cmに堆積しており、様相がやや異なる。あるいは東岸付近には、初期流路の段階で、さらなる埋没や浚渫の工程があるかもしれない。

初期流路幅  
は21m以上

溝底は岩盤起源とみられる青白色粘土あるいは淡青灰色粘質土で、東岸ではその上に固い淡青灰褐色の砂礫があり、これも地山に近いものと考えられる。したがって、この位置では、SD1700以前の自然流路は確認できず、少なくともSD1700の両岸はほぼ地山を掘り込んでいるとみられる。

SD1700  
両岸は地山  
を掘り込む

**第92次 I 区** 第86次8区に南接する第92次 I 区では、調査区東端から西18mで初期流路の東岸を検出した。第86次8区と合わせると東岸の平面は「く」字状に緩く屈曲する。第86次8区の調査成果からみて、第92次 I 区はSD1700の東半程度がかかり、西半は調査区西外にあると考えられるが、断面の観察ではここでも4時期の変遷を確認した (Fig. 129)。

最末期の流路は、深さ20～40cmの幅広かつ浅い流れで、後期流路の礫が頭を出す中洲状の部分がある。堆積土は暗褐灰色～暗灰褐色の粘質土で、平安時代前期の遺物を含む。後期の流路堆積は、長径が40cm前後の大礫を多く含む、暗灰色～暗褐色の礫層あるいは粗砂層などからなり、飛鳥Vから奈良時代の遺物を含む。I区北壁では、『年報1999-II』図63に示したように、調査区の西寄りに最深部をもつが、南壁ではFig. 129のように調査区やや東寄りに最深部をもつ。前期流路は、飛鳥Vまでの遺物を含む灰色～暗灰色の砂礫で、中央部を後期流路に削られてその両側下層に残る。初期流路はさらにその下層にあり、黒灰色砂質土や灰褐色の粗砂などが堆積する。溝底面は褐色砂や岩盤の風化土である青白色砂などの地山で、SD1700以前の自然流路の堆積土は確認できていない。初期流路からは7世紀前半の遺物が出土するが、これらは摩滅しており、失われた自然流路からの混入と推察される。

**第92次 G 区** 第92次G区では、SD1700の初期流路の東岸を検出し、東岸の軟弱地盤を補強したと考えられる整地SX1732を確認した。第86次6区拡張区では、SD1700の明確な落ち込みを検



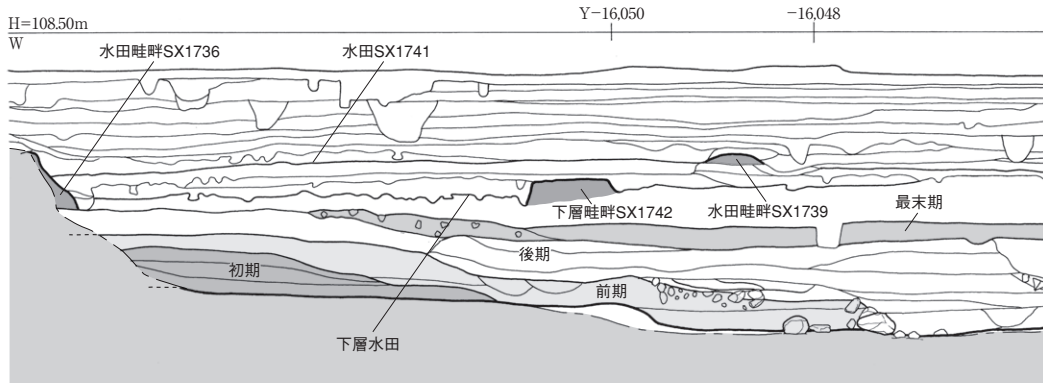


Fig. 128 流路SD1700断面図(1) 1:80

最末期流路  
の氾濫原

出していなかったため、(黄斑) 灰色粘質土を除去してその検出に努めたが、これは第92次G区  
の調査によって、SD1700の最末期流路が氾濫原状に広がったものと考えられる (Fig. 130)。『年  
報1999-II』56頁では、最末期流路の東岸をG区北壁西端付近で落ち込む暗灰色粘質土をあてて  
いる。西岸は調査区の西外に続くが、西方には丘陵が迫るため溝幅は限られ、検出標高からみても  
最末期流路と解釈してよいか確証がない。後期あるいは前期の流路埋土である可能性もある。

後期流路幅  
は3.5m以上

最末期流路を除去して検出したSD1700の後期流路は、灰色砂、暗灰色粘質土、褐灰色砂など  
の堆積からなり、少なくとも幅3.5m、深さ60cmの流路となる。先述した暗灰色粘質土を後期流  
路とすれば、西方にさらに広がることとなる。東岸はやや急傾斜で落ち、溝底の標高は108.00  
mである。堆積土には奈良時代後半までの遺物を含む。

前期流路幅  
は6~7m

後期流路の下層にある前期流路は、大小の礫を多く含み、東岸は氾濫原状に瓦を含む灰白色  
砂が広がる。この氾濫原部分は、礫混じりの灰色粗砂 (SD1700以前の自然流路堆積土) を切り込  
んでいる。後期流路の1mほど東に本流の落ち込みがあり、本流の埋土は暗灰色~暗灰褐色~  
暗褐色の粘質土などが堆積しており、木簡が1点出土した。溝底の標高は107.7mで、本流部分  
の幅は5.7m以上、深さは70cm以上である。流路の中央部には上から暗灰色砂と灰白色粗砂が堆  
積する。西方に地山の青灰白色の岩盤が盛り上がる部分があり、そこを境に東西で堆積の状況  
が異なる。西方には、底部に礫を含む黒灰色砂が、上部には人頭大からそれ以上の大きさの礫  
が堆積している。この地山の不自然な盛り上がり、これを境に流路の堆積状況に差があること  
を勘案すると、前期流路の開削に時期差がある可能性も残る。西岸は調査区外になるが、調  
査区のすぐ西には丘陵が迫っており、流路幅は6~7mと推測される。

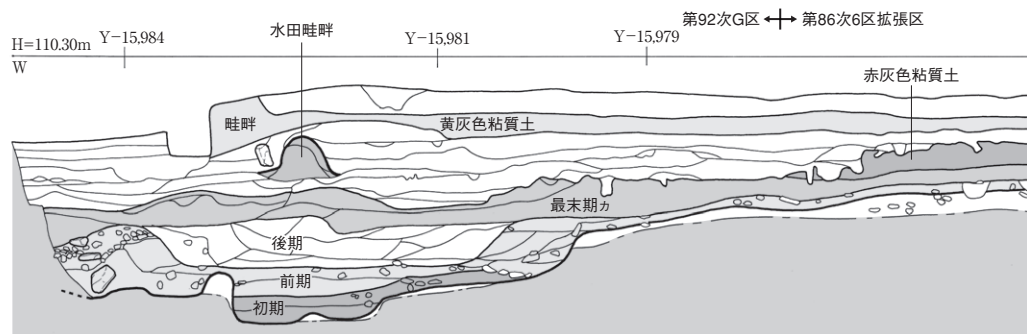
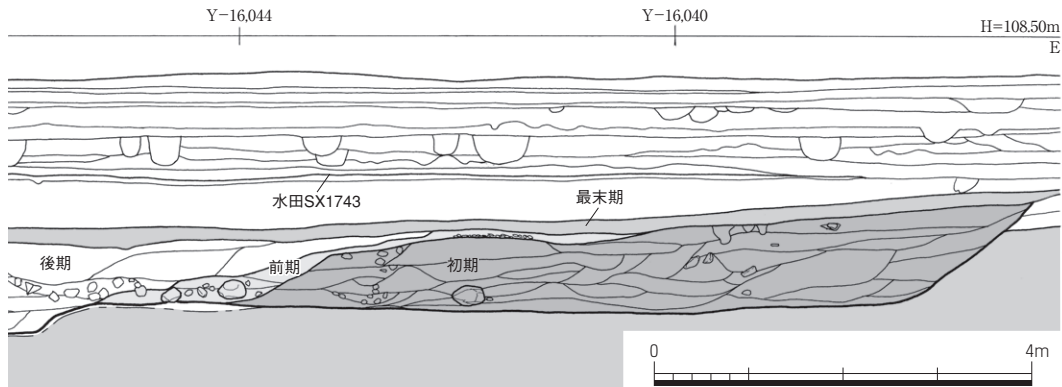


Fig. 130 流路SD1700断面図(3) 1:80 (第86次6区および)



(第86次8区。断面位置はFig. 127参照)

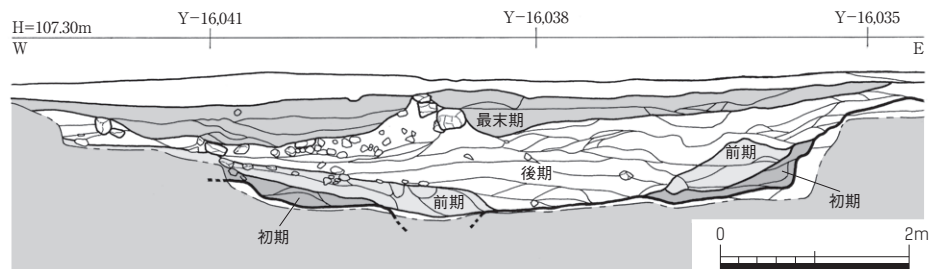


Fig. 129 流路SD1700断面図(2) 1:80 (第92次I区南壁を反転して図示。断面位置はFig. 127参照)

この下層には初期の流路堆積がわずかに残存する。東岸は前期流路とほぼ同位置とみられるが、堆積土は暗灰色～灰白色の粗砂で、平坦面(標高107.7~108.0m)が2mほど続き、さらに落ち込んで最深部となる。最深部の底面は青灰白色の岩盤で、標高は107.4mである。青灰白色の岩盤上には、先述した自然流路堆積土である礫混じりの灰色粗砂の間に、青灰色の粘土があるが、これも地山ではなく、自然流路の堆積土であろう。

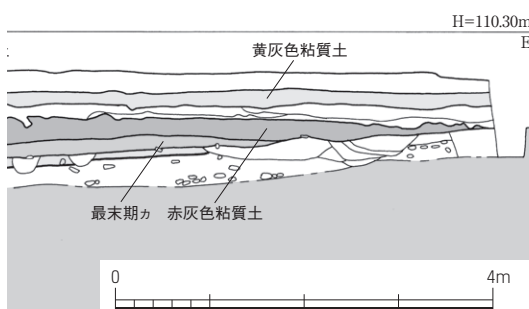
流路の平面は北で西へ50°ほど振れており、第86次5・6区で検出した5条の掘立柱塀SA1729などと並行する。初期流路の岸の標高は東岸の整地SX1732などを勘案すると、109.4mほどに復元でき、流路は本来2m近い深さがあり、石組護岸を施してあったと想像される。

初期流路は  
石組護岸カ

**第86次4区** 第86次4区は、調査区全体が流路堆積の中にある。調査区東南隅から不整形に屈曲しながら、人頭大とそれよりも大きめの礫が北西方向に連続する岸SX1761があり、これを平安時代前期頃の斜行流路の東北岸と解釈した。検出面の標高は109.7~110.0mで北西に低い。それより下層の堆積状況は、調査区中央部の断割調査で標高109.0mまで深掘りしたが、古い時期の岸は確認できず、およそ南西方向を

溝心とする流路堆積の中にある。また深掘りの底が溝底になるかどうか確認がない。したがってSD1700の東岸は、調査区の東方にあると推定される。4区より東方の第86次1区および第92次D区、西方の第92次E区では流路を検出していないため、この付近でのSD1700の当初の流路幅は19m未満と推測される。

当初流路幅  
は19m未満



第92次G区南壁を反転して図示。断面位置はFig. 127参照)

SX1761検出面の下には、暗灰色砂、灰褐色砂質土、暗褐色粘質土などが堆積し、部分的に拳大から人頭大の礫や有機質を含んだ層がある。流路堆積の下層上部（標高109.3m）から飛鳥Vの土器が出土した。なお第86次1区で検出した流路SD1720は、この調査区付近でSD1700と合流すると推定されるが、平面および土層断面では明瞭な遺構を確認できなかった。平安時代前期にはSX1761を東北岸とする流路が流れることから、この時期のSD1700の東岸は調査区の西方に位置するらしい。したがってこの時期の流路幅は、西方の第92次E区までの9m未満となる。

平安前期の  
流路幅は  
9m未満

**第92次B区** 床土直下の標高112.0m以下がSD1700上流部の流路堆積とみられ、青灰色粘土、淡褐色砂、暗青色細砂、暗灰色粘質土、褐色粗砂、暗灰色粘土などの互層が、標高110.6mまで続くことを確認した。水田面下1.8mの深さまで重機で掘り下げたため、平面的に溝の肩などを検出することはできなかった。

**第92次J区** 調査区全体がSD1700の流路堆積の中にあるJ区では、灰色砂混じりの礫層面（標高106.0～106.2m）を確認したが、調査区が小さく壁の崩落も激しいことから、流路の底を確認できず、堆積土の分層もできなかった。

**第91-6次調査** 4ヵ所の立会調査区。Fig. 127に調査区を図示したが、測量が十分でなく、位置や高さなどの情報にやや正確性を欠く。第92次B区を南北に挟む2ヵ所の小施工区が、流路堆積の中にあることを確認した。第92次E区の東北隅と接する北区では、自然流路がかかるのみでSD1700の堆積は確認できなかった。第92次B区西方に位置する南区では、南端には流路がかからないものの、北端は流路堆積の中にあり、調査区東壁は流路西岸の縦断面にあたると考えられる。底部には自然流路の堆積層とみられる土層があり、位置的にみてSD1700のある時期の西岸を示す可能性が大きい。

**流路SD1700の復元** 以上の成果を総合すると、SD1700は飛鳥池東方遺跡の谷筋を流れる自然流路を利用して開削した流路とみられ、谷を出た流路は飛鳥寺の寺域東辺に沿って北流すると考えられる（Fig. 127）。SD1700は、Fig. 128～130に示したように、初期、前期、後期、最末期と大きく4時期の流路の変遷が認められ、浚渫と浸食を繰り返しながら、流路の中心は徐々に西方に移動したようである。初期流路の東岸を検出した第92次G区では、西岸は未検出ながら、西方に丘陵が迫る地形的制約から、流路幅は最大6～7mと推定された。また、第92次C・D・E区、第91-6次北区では流路堆積がみられず、流路はこの間を通ると推定される。第91-6次北区南端とD区との間に流路が収まるとすれば、その幅は15m以下となるが、最も幅の広がる最末期の流路が両調査区で検出されていないことを勘案すると、この付近での初期の流路幅は10mに満たないと推測される。それより上流では、第91-6次南区東壁に流路西岸がかかるとすれば、第92次B区が流路の中にあることから、この付近での流路の幅は14m以上となり、上流でやや西に蛇行して幅も広がる可能性がある。一方、下流は第86次8区、第92次I区で初期流路の東岸を検出し、西岸は検出できないことから、この位置では幅が21m以上となる。

以上から、飛鳥池東方遺跡におけるSD1700の初期流路は、場所によって幅を変えながら、深さは2m程度と考えられ、堆積土中に比較的大型の石が散乱することから、石積で護岸されていた可能性がある。一方、最末期の流路は、下流で幅25m程度の浅い自然流路的な流れで、中洲状となる部分もあるらしい。SD1700は平安時代後期には完全に埋没して水田化する。

平安後期に  
は水田化

SD1700の出土遺物は、第86次8区の初期流路の堆積土と考えられる層から、7世紀中頃の

土器が出土しており、溝の開削時期はこの頃と考えられる。また飛鳥池遺跡第84次調査区の南北大溝SD1130出土の火舎と甕に接合する資料が、SD1700東岸の堆積土上層から出土しており、7世紀後半にこの地域が飛鳥池遺跡と一体的に利用されたことを物語っている。

溝の開削は  
7世紀中頃

飛鳥池遺跡  
と一体利用

**狂心渠との関連** この流路SD1700の性格については、すでに『年報1998-II』57頁、『同1999-II』61頁で「狂心渠」との関連を指摘した。『日本書紀』齊明2年(656)条に、「廻ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の誇りて曰はく、狂心の渠。」とみえる狂心渠とSD1700の関係が注目される場所である。飛鳥池東方遺跡の南西の丘陵に位置する酒船石遺跡からは、天理砂岩(天理産出の凝灰岩質細粒砂岩)を石垣状に巡らせた施設が発見されており(Fig. 51、82頁)、後飛鳥岡本宮の東の山に石を累ねて垣とした遺跡とみて間違いのない。この酒船石遺跡に石上山の石を運んだ狂心渠の開削ルートは、地理的、地形的にみて飛鳥池東方遺跡の谷筋が最有力視されており、調査で検出した流路SD1700と狂心渠との関係が問題となる。SD1700の規模や位置、開削時期などから考えると、流路SD1700が狂心渠にあたる蓋然性は高いが、SD1700からは「石上山の石」に相当する天理砂岩の出土がなく、調査では狂心渠であるとの確証は得られなかった。狂心渠か否かについては、周辺のさらなる調査の進展を待つて慎重に判断する必要があるだろう。

狂心渠との  
確証はない

## ii 流路SD1700関連遺構 (PLAN13~16、PL. 91・92)

**流路SD1720 (PLAN16)** 第86次1区で検出した流路SD1700の支流と推定される、北西に斜行する溝。当初の南岸は第86次1区南端から北約10mの位置にあり、幅は4.9mほどで、上層の埋土は暗褐色粘土だが、深さは不明である。これが埋没し氾濫原状に広がる過程で、礫敷SX1758を施して北岸としたようであるが、このときの南岸は明確でない。最末期の溝は、1区南端から約9mの地点を南岸とし、上から褐灰色砂質土、暗灰褐色砂質土、赤褐色砂、炭の混じる赤褐色砂質土などが堆積するが、北岸は、SX1758が埋没してさらに北に広がるようである。このときの溝の深さは40cmほどである。流路の方向は、最末期は『年報1998-II』図50に示したような東西方向になるものの、それ以前は明確でない。

SD1700の  
支 流

**礫敷SX1758 (PLAN16)** 第86次1区南部で検出した礫敷で、拳大~人頭大の礫が東西、南北各3mの範囲に密集する(Fig. 131)。当初の流路SD1720はこの礫敷よりも低い位置から掘り込んでおり、また礫を据えるための掘方や裏込めはみられず、氾濫原状の堆積土に直接据えられて



Fig. 131 礫敷SX1758 (東から)

いる。また最末期のSD1720の南岸は、礫敷よりも高い位置から掘り込まれている。したがって、ある時期に流路SD1720北岸の護岸として敷設されたものだが、最末期には埋まってしまっている。後世の削平により、南辺の見切りとなる石は明確でない。中央部を北西-南東方向の素掘小溝が破壊する。

SD1720の  
北 岸

**斜行流路東北岸SX1761 (PLAN16、PL. 90)** 第86次4区の西南隅で検出した平安時代前期頃の流路

東北岸。人頭大からそれ以上の礫が、調査区東南隅から北西方向にやや雑然と列をなしており、溝の東北岸と解釈した。溝の中心は南西方向にあり、埋土上層には暗灰白色～暗灰色の粘質土や砂が堆積する。それ以前の流路SD1700上に掘られているが、溝の深さは不明。

**石組溝SD1734** (PLAN14・15, PL. 88) 第86次6区主調査区から西拡張区にかけて検出した東西石組溝。北西-南東方向の整地SX1732の東南端から西方へ延びる (Fig. 132)。掘方はSX1732を切り込み、側石は拳大よりやや大きな石を溝の内側に面をそろえて1段並べ、底石は側石よりやや小振りの石を扁平な面を上にして並べる。遺存する溝の内法幅は6~14cm、深さは6~18cmで、西端は6区拡張区へ延び全長7.5mが残るが、西から4.5mは削平されて側石を失い、底石のみが残る。遺存する西端の底石は北西へ屈曲する。底石の一部には天理砂岩製の樽状の切石が使われていた。溝埋土は茶灰色土で、石組の裏込土と区別をつけがたい。本来はさらに東方に延び、掘立柱塀で囲まれた区画内の排水を担った溝と考えられる。5条ある掘立柱塀のうち、どれと併存するか明確ではないが、柱抜取穴に礫や石を含むSA1729が有力な候補となろう。西端は流路SD1700に接続すると考えられる。

SA1729と  
併存カ

**整地SX1732** (PLAN14・15, PL. 88) 第86次6区で検出した黄灰色粘質土による整地。SD1700東岸に沿って延長約14.5mを確認した。その範囲は、SA1727以下5条の掘立柱塀とほぼ同じく北で西に直線状に約53°振れ、北方は6区拡張区を越えて北西へ延び、南端は6区拡張区東南隅付近でとぎれる。西方は削平を受けて当初の範囲は不明。厚さは最大25cmで、幅2.2mの帯状に残る。赤灰色粘質土層の下で検出し、南端で標高109.4mから、北端で標高109.0mから暗灰色粗砂層(自然堆積層)を掘り込んで施工されている。当初、6区主調査区で竪穴建物の落ち込みと解釈して調査区を拡張したが、地業風の整地による土の違いと判明した。調査区中央付近で北東辺に人頭大の石が並ぶ箇所があり、見切りを伴っていた可能性もある。

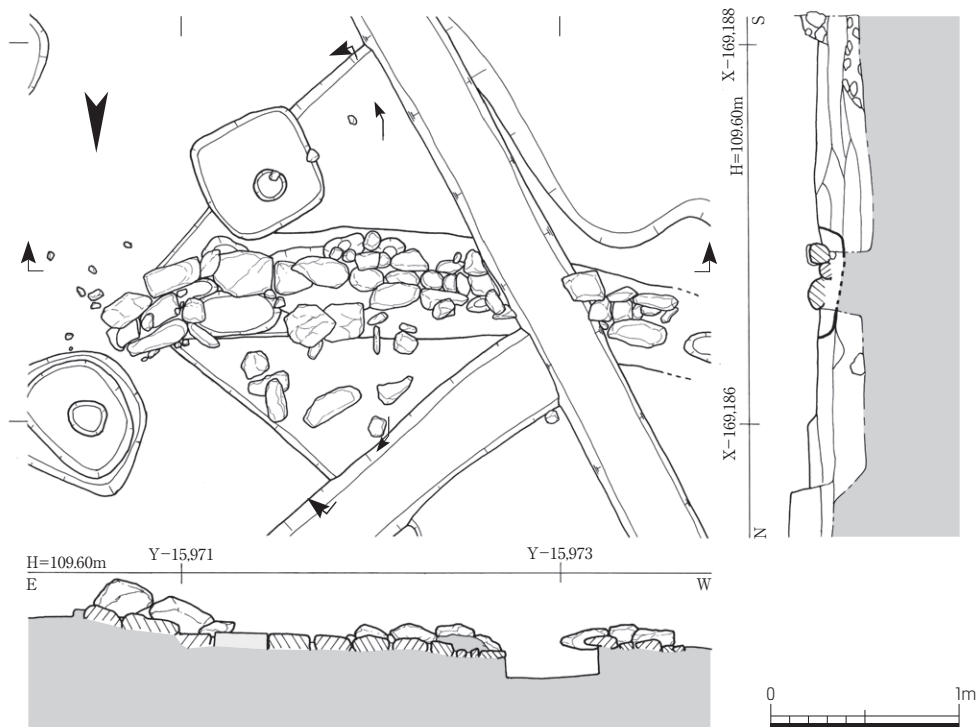


Fig. 132 石組溝SD1734 1:40

流路SD1700との関係が明瞭にわかる部分はないが、最末期の流路で西辺を削られているとみられ、後期以前の流路は検出面の標高からみれば、やや低い位置にある。したがって、比較的新しい時期のSD1700東岸の軟弱な地盤を掘削し、地盤改良をおこなった整地とみられる。石組溝SD1734がこれを切り込む。

軟弱地盤の改良整地カ

**斜行溝SD1733** (PLAN14・15, PL. 88) 第86次6区主調査区の中央やや南寄りにある北東から南西に下る素掘りの溝。溝の方位が他の素掘小溝と若干異なり、東端は調査区東外へ延び、西端は整地SX1732で破壊されている。幅40cm、深さ35cmで、暗灰色土を切り込んで造られ、埋土は灰色砂混じりの黄色粘土。北西-南東方向の掘立柱塀5条と重複しており、最も西にあるSA1731の掘方より新しいが、それより東の4条の塀よりも古い。造営の工程差とみれば、SA1731と併存するとみられ、古い時期の流路SD1700への排水溝とみられる。

SD1700への排水

### iii 建物遺構等

ここでは掘立柱建物や掘立柱塀などの建物遺構を中心に、便宜的に北方の調査区から順次説明する。



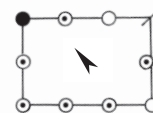
Fig. 133 掘立柱建物SB1746の柱穴

**掘立柱建物SB1746** (PLAN13) 第86次8区東端北壁で検出した柱根を残す掘立柱穴 (Fig. 133)。一辺1m前後の比較的大きな方形掘方を持ち、検出面からの深さは50cm。掘方埋土は3層に分かれる。これと組み合わせる柱穴がなく、北方に延びる建物の西南隅柱と解釈しておく。遺存する柱根は長さ52cm、径は22cmほどである。

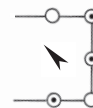
建物の西南隅柱と解釈

**掘立柱建物SB1745** (PLAN13, PL. 92) 第86次8区東端から第92次I区にかかる掘立柱建物。桁行3間、梁行2間で、棟方向は北西-南東(北で西に50°振れる)。

柱間寸法は桁行、梁行ともに1.65m (5.5尺)。柱掘方は一辺が0.6~1.0mの方形に近く、深さは40cm前後。柱痕跡を残す柱穴が多く、東北隅柱には柱根を残すがやせている。これらから柱径は15cm程度と考えられる。南妻中央の柱筋がややずれ、桁行4間以上となる可能性もあるが、西南側柱筋の南東延長部の第92次I区南壁に柱穴がかかっていないため、桁行は3間と考えておく。



**掘立柱建物SB1744** (PLAN13) 第86次8区東端付近で検出した掘立柱建物。平面は桁行2間以上、梁行2間で、棟方向は北西-南東(北で東に42°振れる)。柱間寸法は桁行が1.5m (5尺)、梁行が1.65m (5.5尺)とみられる。



柱掘方は平面一辺60~80cmの方形で、深さは45~60cm。『年報1998-II』では、西側柱(南西面)の2柱穴で掘立柱塀(SA033)と解釈したが、その南側の柱穴から北東方向に並ぶ柱穴2基と、調査区北壁の断面にかかる柱穴を、規模や深さの点から同一建物の柱穴と判断した。したがって、建物の南端(南東面)を検出し、北西に延びる建物である。柱痕跡を残す柱穴が多く、柱径は15cmに復元できる。これらの柱穴より古い柱穴が重複し、同位置で建て替えられた可能性がある。

同位置で建て替えカ

**掘立柱塼SA1754** (PLAN13) 第86次8区東端付近から第92次I区にかけて検出した柱穴3基。軸線は北西-南東(北で西へ50°振れる)で、2間の掘立柱塼と解釈した。柱間寸法は1.8m(6尺)等間。柱掘方は50cm前後のほぼ方形。深さは不明。この南西1.8mの位置に並行する径10cmの柱根をもつ柱穴2基(柱間1.8m)は別の掘立柱塼の可能性はある。

SB1744に  
伴う塼

**掘立柱塼SA1755** (PLAN13) 第92次I区東端付近、掘立柱建物SB1744の西南隅から南東方向に延びる掘立柱塼。SB1744に伴う塼と考えられる。SB1744との取り付け部を除き、4間分、柱穴5基を検出した。柱間寸法は南から3間分が1.5m(5尺)、その北が1.2m(4尺)で、SB1744との取り付け部が1.0mを測る。柱掘方は径50~70cmのやや不整形な方形~円形で、深さも20~75cmとばらつく。この柱筋にはいくつかの柱穴があり、SB1744と同様、同位置で建て替えた可能性がある。

**小穴列SA1735** (PLAN14) 第86次7区を南北に縦断する小穴列。調査区の西南隅から東北隅にかけて、径40~60cmの小穴6基を検出した。柱間寸法は1.5~2.5mとふぞろいで、深さは不明。北で西に10°振れる軸線をもち、第86次6区で検出した掘立柱塼などの軸線とは合わないため、性格は不明。

**土坑SK1725** (PLAN14) 第86次3区の中央付近で検出した南北5m以上、東西7mの、平面不整形で広く浅い土坑。断面観察をおこなわなかったため、深さや性格は不明。

**掘立柱塼SA1726** (PLAN14, PL. 89) 第86次6区と第92次H区で検出した掘立柱塼。棟方向は南西-北東(東で北に51°振れる)で、10間分を検出した。西南端で掘立柱塼SA1728が直交し、第92次H区東端でSA1753がおおよそ直交する。柱間寸法は、西南端が2.4m(8尺)、その東が1.8m(6尺)、それ以东は2.1m(7尺)等間に復元できる。柱掘方は0.7~1.0mのほぼ方形で、深さは平面規模の大きな柱穴が70~85cmで、他の柱穴は45~60cm(Fig. 134)。掘方底面の標高は、遺構検出面の地盤と並行して北東で徐々に上がる。平面の大きな柱穴ほど深い傾向があり、また柱痕跡や柱根を残すものが多く、復元できる柱径は20cm前後である。西南端に接続するSA1728とともに、この付近の区画を形成する塼と考えられる(Fig. 135)。

区画を  
形成する塼

**掘立柱塼SA1753** (PLAN14, PL. 89) 第92次H区の東端付近で検出した南北(南東-北西)の柱穴2基。柱間寸法は1.8m(6尺)で、同調査区を北東-南西に横断する掘立柱塼SA1726におおよそ直交する掘立柱塼と判断した。

柱掘方は径が80cm前後の不整形円形で、深さは50~60cmあり、いずれも抜取穴をもつ。調査区の東壁(東北辺)にかかる柱穴と組み合せて掘立柱建物の西北隅を形成する可能性もある。

**掘立柱塼SA1728** (PLAN14・15, PL. 87) 第86次6区にあたる、掘立柱塼SA1726の西南端に直交する掘立柱塼。棟は北西-南東方向で(便宜的にここではこれを南北方向

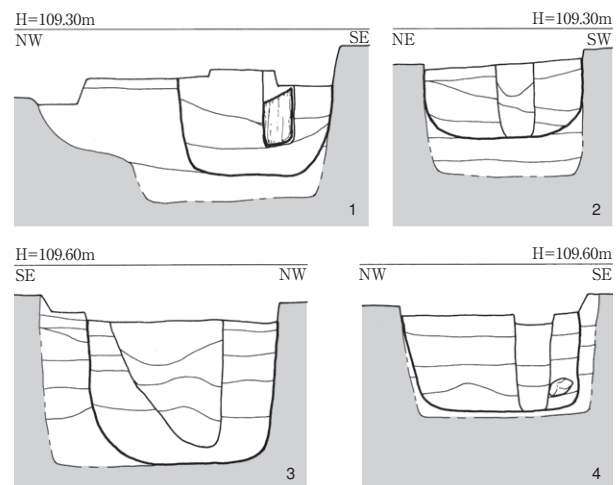


Fig. 134 掘立柱塼SA1726柱穴断面図 1:40

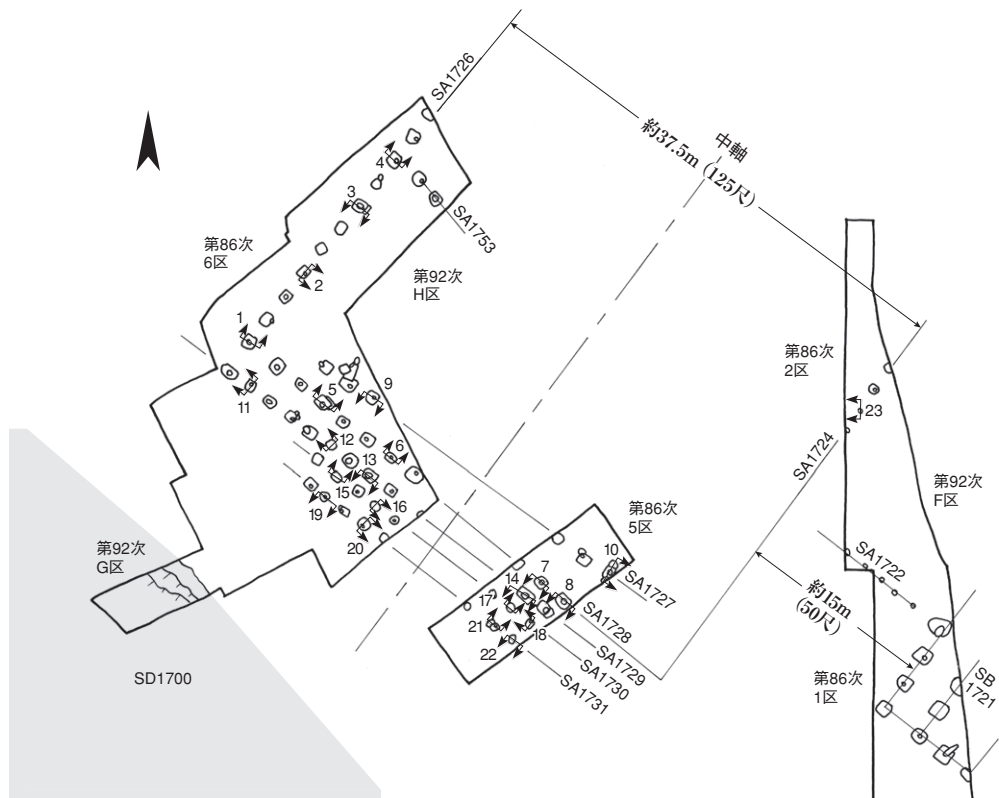


Fig. 135 掘立柱塀からなる区画の模式図 (数字はFig. 134~141に対応する柱穴断面位置)

と表現する)、北で西に51° 振れる。第86次6区で7間、同5区で2間分を検出した。柱間寸法はSA1726取り付け部分が2.7m (9尺) で、それ以南はほぼ7尺 (1.9~2.2m) に復元できる。しかし6区と5区間の未調査区を7尺等間で割ると、柱穴位置に齟齬が生じる。未調査区は、北方のSA1726と南方 (第86次2区・第92次F区) のSA1724で造られる南北37.5m (125尺) の区画の中央部分を含み、そこに門などの施設が存在する可能性もある。

区画の中央  
を含む

柱掘方の平面形は、塀の軸線方向に長い長方形で、長辺は1.0m前後の規模をもつ。掘方の深

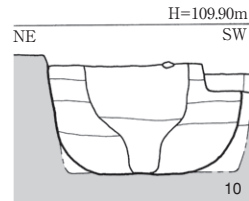
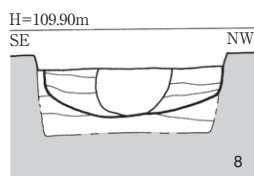
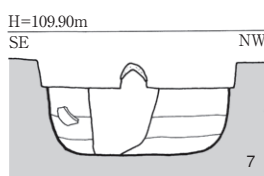
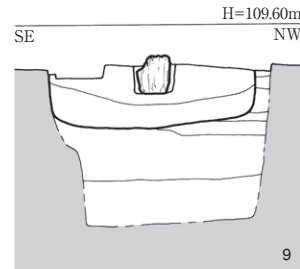
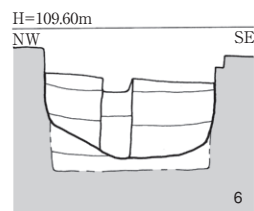
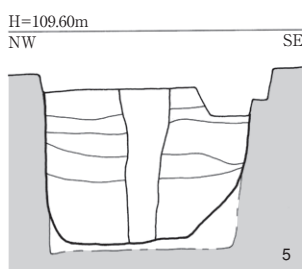


Fig. 136 掘立柱塀SA1728柱穴断面図 1:40

Fig. 137 掘立柱塀SA1727柱穴断面図 1:40



さは、6区では60~90cmで、SA1726と同様、平面の大きな柱穴ほど深い特徴がある (Fig. 136)。5区では南の柱掘方の深さが30cm、中央の柱穴が50cmと6区よりも相対的に浅く、5区のほうが削平が大きいとみられる。やはり柱根や柱痕跡を残す柱穴が多く、柱径はいずれも15~20cmに復元できる。

**掘立柱塼SA1727** (PLAN14・15, PL. 87) 第86次6区および5区で検出した、掘立柱塼SA1728の北東約2.5mの位置でほぼ並行する掘立柱塼。各調査区でそれぞれ3基の柱穴を検出した。棟通りは北西-南東で、北で西に53°振れる。柱間寸法は1.8~2.7mと不規則だが、2つの調査区に挟まれた未調査部分を含めると12間以上になると考えられる。柱掘方は0.7~1.0mの略方形で、第86次6区の南端柱穴に残る柱根は径20cm。柱穴の深さは、5区で深く50cm以上あるが、6区では15~35cmと浅く、また6区では北西ほど浅い傾向にある (Fig. 137)。ただし、掘方底面の標高は108.9~109.3mと概ね同高である。したがって、6区の北西延長部の柱穴は削平された可能性が高い。ただし北西に柱穴を延長させても、掘立柱塼SA1726とは柱穴を共有しない。

北西延長部  
柱穴は削平

**掘立柱塼SA1729** (PLAN14・15, PL. 87) 第86次6区および5区で検出した、前出の掘立柱塼SA1728の約2m南西の位置を並行する掘立柱塼。棟方向は北西-南東で、北で西に53°振れる。第86次6区で10間分、同5区で2間分を検出した。柱間寸法はほぼ1.8m (6尺)。柱掘方は一辺0.8~1.0mの略方形で、深さは35~50cmとほぼ一定であり (Fig. 138)、掘方底面の標高は現地地形に沿って上がるため、旧地表の削平度合いは一様と考えられる。

柱穴は柱根あるいは柱痕跡を残すものが北方にいくつかあるものの、柱が抜き取られた柱穴は採取穴に礫や石を含むのが特徴で、先述したようにこの塼は第86次6区で検出した石組溝SD1734と併存する可能性がある。西北端の柱穴はおよそ直交するSA1726の柱筋と若干ずれ、SA1726とは併存しないと考えられる。6区と5区に挟まれた未調査区を6尺等間で割ると、SA1728と同様、うまく柱が割り付けられない。

SD1734と  
併存カ

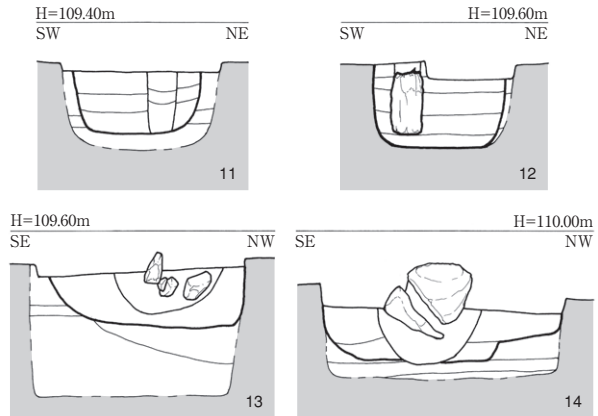


Fig. 138 掘立柱塼SA1729柱穴断面図 1:40

**掘立柱塼SA1730** (PLAN14・15, PL. 87) 掘立柱塼SA1729の約1.5m南西を並行する掘立柱塼。棟方向は北西-南東で、北で西に53°振れる。

第86次6区で4間分、同5区で2間分を検出した。柱間寸法はほぼ1.8m (6尺)で、6区と5区に挟まれた未調査区も、この柱間寸法で整合する。柱掘方は50~70cmの方形から円形で、深さはいずれも25~35cmと浅い (Fig. 139)。柱穴底面の標高は南高北低で現地地形の傾斜と合い、柱穴の深さからみて、旧地表面から一様に30cm前後の削平を受けているとみられる。北西延長

未調査区も  
6尺等間

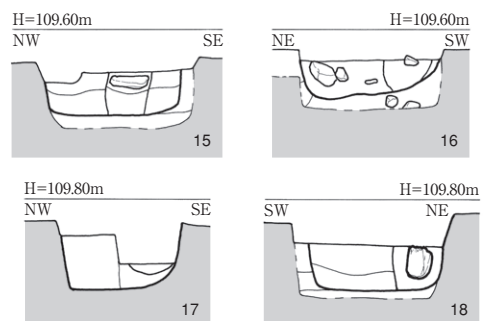


Fig. 139 掘立柱塼SA1730柱穴断面図 1:40

部の柱穴は削平されたと考えられるが、西北端の柱穴から2.7m北西に、柱筋にのる径約70cmの柱穴があり、この間に門などの施設を想定することも可能である。

**掘立柱塼SA1731** (PLAN14・15, PL. 87) 掘立柱塼SA1730の約1.5m南西を並行する掘立柱塼で、北で西に53°振れる軸線をもつ。第86次6区で4間分、同5区で2間分を検出した。柱間寸法は1.1~2.4mとふぞろいである。柱掘方は不整円形で、径50~70cm。深さは30~50cmである。6区の南から第2柱穴には径13cm、長さ37cmほどの柱根を残す。柱根は掘方底面から5cmほど沈下していた (Fig. 140-20)。柱穴が重複する箇所があり、同位置での建て替えも想定できる。西北端の柱穴から2.7m北西の柱筋上にも柱穴があり、SA1730同様、ここに門などの施設が存在した可能性もある。柱穴の平面と深さからみて、旧地表面は一様に20cm程度削平されていると考えられる。

同位置で  
建て替えカ

**塼と区画** 以上の5条の塼は棟通りの軸線がほぼ並行するが、これは西方にある流路SD1700にその向きを規制された結果と考えられる。これらの塼の数度の建て替えは、流路の東方に重要な施設が存在した可能性を示唆する。しかし、これら一連の塼は南東の第86次1区には延びず、第86次2区・第92次F区で検出した北東-南西に軸線をもつ掘立柱塼SA1724 (後述) と接続し、第86次6区・第92次H区で検出したSA1726を西北辺、SA1724を東南辺とする、その距離37.5m (125尺) の方形区画の西南辺を形成した可能性が高い。SA1726を基準とすれば、SA1724東北端の柱穴までの南西-北東の区画の規模は27.9m以上となる。東南辺と西北辺の区画塼SA1724・1726には建て替えがなく、西南辺のみ数度の建て替えが認められるのは特徴的である。残念ながら区画内は未調査であり、その性格の解明は今後の調査を待たなければならない。

125尺幅の  
方形区画

西南辺のみ  
建て替え

**掘立柱塼SA1724** (PLAN14・15, PL. 85・86) 第86次2区と第92次F区北端部にかけて検出した柱穴4基。棟方向は北東-南西で、東で北へ54°振れる。柱間寸法は1.8m (6尺)。柱掘方は70cmほどで、深さは55cm前後。径20cm前後の柱痕跡を残す (Fig. 141)。

この塼は南東に建つ西廂をもつ掘立柱建物SB1721 (後述) から約15m (50尺) 離れた位置にあり、また先述したように、北西の掘立柱塼SA1726とは37.5m (125尺) 隔ててほぼ並行しており、周囲の区画施設や建物が計画的に配置されていた可能性がある。

SB1721から  
50尺離れる

**掘立柱建物SB1721** (PLAN15, PL. 86) 第86次1区から第92次F区にかけて検出した掘立柱建物。棟方向は北東-南西で、西北面 (以下、西面と称す) に廂をもつ、桁行3間以上、身舎梁行2間以上の建物である。建物の軸線は東で北に54°振れる。柱間寸法は身舎が桁行・梁行とも

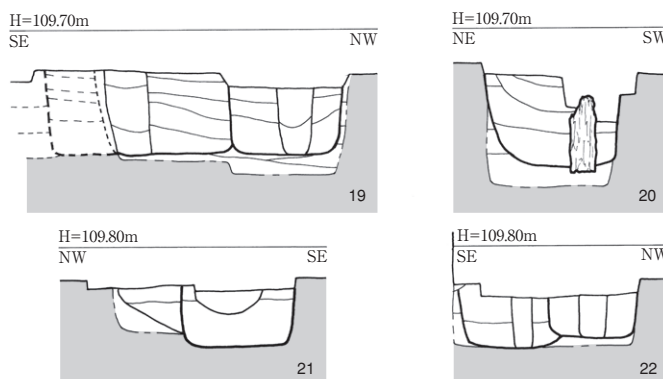


Fig. 140 掘立柱塼SA1731柱穴断面図 1:40

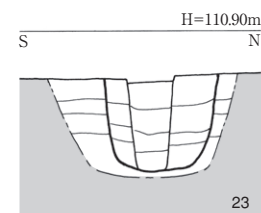


Fig. 141 掘立柱塼SA1724柱穴断面図 1:40

掘方底面に  
礫 敷

2.4m（8尺）、西廂の出は3.0m（10尺）。柱掘方は1.0～1.2mのほぼ方形で、検出面からの深さは70～80cmであるが、西廂南端柱のみが1.3mと深い。また西身舎柱南から第2柱穴の掘方底面には拳大～人頭大の礫を敷き詰めている（PL. 86-3、Fig. 142-D）。南妻棟通りの柱にも、抜取穴より下部に石が数石あり、いずれも柱の沈下を防ぐ役割を担ったものと考えられる。柱は抜き取られているものもあるが、西廂の南から第2柱穴には、長さ93cm、径23cmの柱根が残っていた（PL. 86-2、Fig. 142-A）。

区画南の  
重要建物

西廂の柱穴規模も身舎の柱穴と遜色なく、廂の出が身舎梁行よりも大きいなどの特徴があり、身舎梁行が3間で両面廂をもつ格の高い建物となる可能性もあろう。先述のように、約15m（50尺）北西には掘立柱塼SA1724が並行し、北西には掘立柱塼で区画された施設の存在が想定されるが、本建物はその南方に建つ重要な建物とみられる。

基本層序の項でも触れた「瓦礫層」と称する瓦の混じる土層がこのSB1721周辺に分布する。ここからSB1721は、礫を用いた基壇状の高まりを備え、一部に瓦を用いた建物であった可能性がある。

**掘立柱塼SA1722**（PLAN14・15、PL. 85） 第86次1区北端と同2区南端にまたがる小穴列。掘立柱建物SB1721と直交して南東－北西方向にならぶ。計4間分柱穴5基を検出した。北で西に44°振れる。柱掘方は径30cm程度の円形で、柱間寸法は3.6～4.8m。この柱列の約3.2m北東に、これとほぼ並行するふぞろいな小穴列があり、SA1722の西北端柱と北東に並ぶこの小穴列との中間にも小穴が存在することから、建物になる可能性もある。断割をおこなっておらず小穴の深さや時期は不明。

**礫群SX1723**（PLAN14・15、PL. 85・86） 第86次2区南端から8m北の位置にあって、第92次F区にまたがる礫群。東西・南北とも約1mの範囲内に拳大～人頭大の礫が集中するが、時期・性格ともに不明である。

**掘立柱塼SA1749**（PLAN17、PL. 94） 第92次D区の東北隅付近で検出した、南東－北西方向の柱穴2基。柱間寸法は1.8m（6尺）で、北で西に43°振れる。柱掘方の平面は一辺が80cmの略

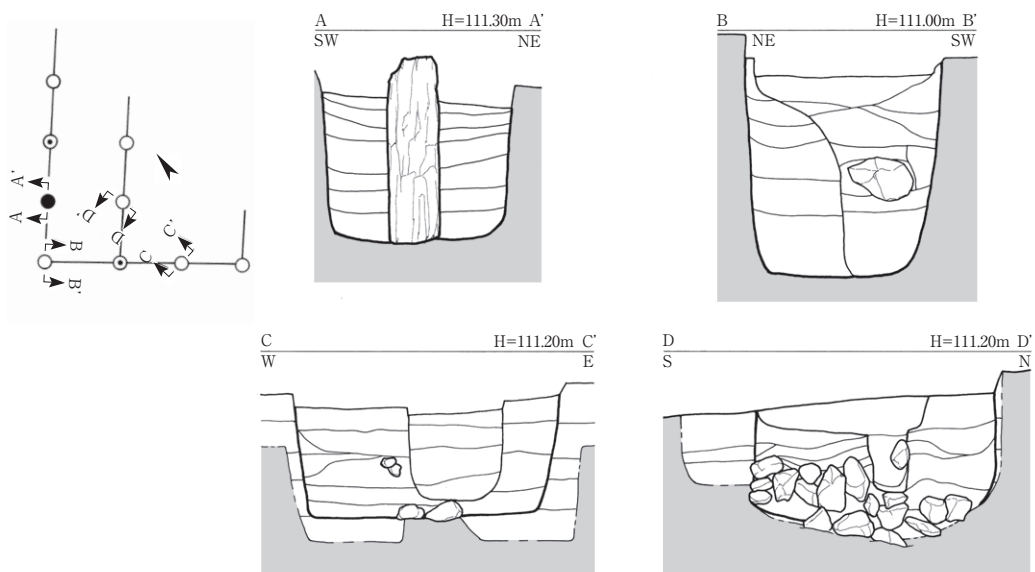


Fig. 142 掘立柱建物SB1721柱穴断面図 1:40

方形で、深さは40～55cm。南の柱穴には抜取穴があり、北の柱穴には径15～20cmに復元できる柱痕跡を残す。D区西方に想定される流路SD1700に沿う掘立柱塀であろう。

流路に沿う  
掘立柱塀

**掘立柱塀SA1750** (PLAN17, PL. 94) 第92次D区の西北隅付近から南辺中央にかけて検出した柱穴4基。柱間寸法は1.2m (4尺) ほどで、北で西へ約20° 振れる。柱掘方は80cm程度の円形あるいは方形で、深さは45～60cm。北端と北端から第3柱穴は抜取穴をもち、南端と南端から第3柱穴は径15cm程度の柱痕跡を残す。柱間寸法が短いことから、柱抜取穴と柱痕跡をもつ柱穴同士が組み合い、柱間8尺の塀が同位置で建て替えられた可能性も想定できる。先述したSA

塀の  
建て替えカ

**東西溝SD1751** (PLAN17, PL. 94) 第92次D区を横断する2条の素掘溝のうち南に位置する東西溝。溝幅は70～90cm、深さは35cmで、埋土は灰褐色粘性砂。掘立柱塀SA1750の南から2基めの柱穴と重複し、これより新しい。後世の耕作に伴う素掘小溝の可能性はある。

**東西溝SD1752** (PLAN17, PL. 94) 第92次D区を横断する2条の素掘溝のうち北に位置する東西溝。溝幅は30～40cm、深さは30cm。掘立柱塀SA1749の南の柱穴と重複するが、これより新しい。やはり後世の素掘小溝の可能性はある。

**掘立柱建物SB1747** (PLAN17, PL. 94) 第92次C区で検出した逆L字形に並ぶ柱穴3基。掘立柱建物の東北隅にあたと解釈した。柱間寸法は東西が2.7m (9尺)、南北が2.4m (8尺)。棟方向は不明であるが、建物方位は北で東へ5° 振れる。柱掘方は1m前後の方形で、深さは75～90cmと深く、いずれも柱径20cm前後に復元できる柱痕跡を残す (Fig. 143)。

**掘立柱建物SB1748** (PLAN17, PL. 94) 同じく第92次C区で検出した柱穴3基。SB1747と重複する掘立柱建物の東南隅と解釈した。柱間寸法は東西が3.3m (11尺)、南北が2.3m (7.5尺) で、北で西へ5° 振れる。柱掘方は径80cmほどの円形で、深さは65～90cmと深い。いずれも柱径15～20cmに復元できる柱痕跡を残す (Fig. 144)。

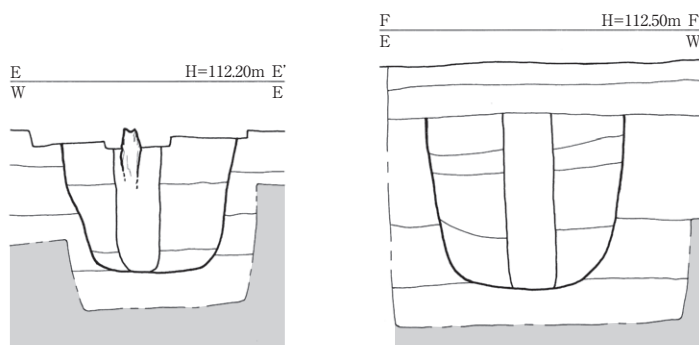


Fig. 143 掘立柱建物SB1747柱穴断面図 1:40

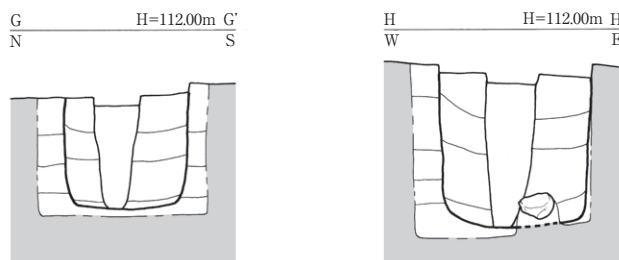


Fig. 144 掘立柱建物SB1748柱穴断面図 1:40

iv 水田遺構

第86次8区の調査で、平安時代後期に遡る水田面3枚とそれに伴う畦畔4条、水口2ヵ所を平面検出した。また8区主調査区北辺および拡張区では、この水田面の下層を調査し、先行する水田畦畔を検出した。また、第86次6区、第92次G区・I区でも調査区の土層断面で水田の畦畔を確認することができた。

第86次8区の水田は、床土直下にある黄灰色～灰色の砂層や砂質土を除去していく過程で、後述する調査区西辺部の水口SX1762・1763から流入した暗灰色～白色の砂を水たまり状に検出し、その後、暗灰色～暗青灰色の粘質土からなる畦畔を、さらに暗灰色粘土の水田面を検出した。7世紀中頃に遡る流路SD1700は、これらの水田の下にあるが、出土遺物からみて平安時代後期には完全に埋没し水田化したようである。

SD1700は  
平安後期  
には水田化

**水田畦畔SX1736** (PLAN13, PL. 93) 第86次8区主調査区の西辺に沿って検出した南北方向の水田畦畔。幅は60cm以上で、畦畔の西辺は西方の未調査区にある。盛土は黒青灰色粘土で、調査区北端における上面の標高は107.25mを測り、南方で高くなるようだ。後述する水田SX1741の下層にある水田畦畔SX1742（後述）とも併存するらしく、8区北壁の土層断面 (Fig. 128) の観察によると、築成時は高さが60cmを越え周囲の中心的水田であったとみられる。

周囲の中心  
的な畦畔

**水田畦畔SX1737** (PLAN13, PL. 93) 第86次8区主調査区の南辺に沿う水田畦畔。幅1.1m以上と幅広く、畦畔の南辺は南の調査区外にある。盛土は暗灰色粘質土。上面の標高は東端で107.3m前後を測り、北方の水田SX1740（後述）上面との比高は10cm前後である。調査区西南隅は先述した畦畔SX1736と接する部分にあたるが、ここでSX1737は幅40cmにわたってとぎれ、南方の水田から水を落とす水口SX1762（後述）が造られている。なおこの調査区西南隅には、新しい時期の石組井戸が掘られており、SX1736とSX1762を破壊している。

**水田畦畔SX1738** (PLAN13, PL. 93) 第86次8区主調査区の中央部で検出した東西（西南西-東北東）方向の水田畦畔。幅は0.5～1.0mで、上面の標高は東端で107.2mほどである。調査区東辺の土層観察によると、南方の水田SX1740（後述）との比高は10cm前後、北方の水田SX1743もしくはSX1741（いずれも後述）との比高は30cm前後を測る (Fig. 145)。調査区西辺に沿う水田畦畔SX1736との間が50cmほどとぎれており、SX1740からSX1741に水を落とす水口SX1763が造られている。

南から北に  
落とす水口

**水田畦畔SX1739** (PLAN13, PL. 93) 第86次8区主調査区の東北隅で検出した南北（南南東-北北西）方向の水田畦畔。幅30～40cmで、盛土は黒灰色粘質土～暗灰色細砂。調査区北辺の土層で観察できる上面の標高は107.2m前後で、西方の水田SX1741（後述）との比高は約20cm、東方の水田SX1743（後述）との比高は約15cmである (Fig. 128)。先述した東西方向の水田畦畔SX1738との間3.5mほどが砂の堆

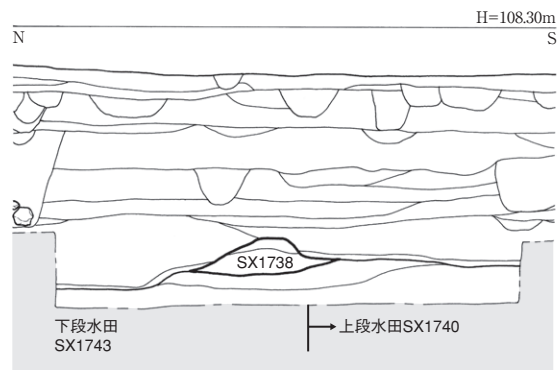


Fig. 145 調査区東辺における水田畦畔SX1738 1:40

積でとぎれている。『年報1998-II』55・56頁では小畦であった可能性を指摘しており、先述のように、北壁の土層観察では東西の水田面の高低差はわずかであって、一体化した水田の小畦であった可能性を否定できない。洪水などによって畦畔が決壊した状態で埋没した可能性とともに考慮しておきたい。

**水田SX1740** (PLAN13, PL. 93) 第86次8区主調査区の南半で検出した水田。規模は南北7.3m、東西は4.8m以上。南・西・北をそれぞれ畦畔SX1737・1736・1738で区画する。上段の水田からは、この水田の西南隅に設けた水口SX1762により導水し、西北隅に設けた水口SX1763で下段の水田SX1741（いずれも後述）に排水する。水田上面の標高は107.1mほどで、北方がわずかに（5cm程度）低い。また水田面では、砂に覆われたヒトおよび偶蹄目の足跡（SX1759）を多数

西南隅の水口から導水

足跡を検出

検出した。7cm前後と25cm前後の円形・長円形の足跡で、牛耕がおこなわれた状況を示すと考えられるが、足跡の配列は不規則で重複が多く耕作方向などを確認するには至らなかった。

**水田SX1741** (PLAN13・PL. 39) 第86次8区主調査区の北半で検出した水田。南北10.5m以上、東西7.0mの規模があり、南・西・東をそれぞれ畦畔SX1738・1736・1739で区画する。水田上面の標高は107.0m前後で、これは後述する東方の水田SX1743の水田上面の標高と大差はない（Fig. 128）。この水田の西南隅に設けた水口SX1763により、上段（南）の水田SX1740から水の供給を受ける。SX1743との間の水口は不明。また、この水田では足跡類の痕跡は明瞭でない。

**水田SX1743** 第86次8区拡張区の西半に広がる水田。南辺の畦畔はSX1738で、西辺の畦畔はSX1739であるが、先述のようにこれは途中でとぎれるため、西方の水田SX1741と一体であった可能性もある。東辺の畦畔は明確でなく、削平された可能性が高い。水田上面の標高は、調査区北壁の観察では107.00～107.05mだが（Fig. 128）、8区主調査区の東壁の観察では106.9mと若干低い（Fig. 145）。

西方のSX1741と一体か

**水口SX1762** (PLAN13, PL. 93) 8区主調査区西南隅で検出した東西方向の畦畔SX1737と南北方向の畦畔SX1736との間に造られた水口。SX1737が幅40cmにわたってとぎれ、暗灰白色砂が堆積する。この砂は水田SX1740の西辺に沿って流れ込み、水たまり状に堆積しており、南方の水田から水が供給されていたことを示す。

**水口SX1763** (PLAN13・PL. 93) 第86次8区主調査区の西辺中央部で検出した南北方向の畦畔SX1736と東西方向の畦畔SX1738の接する部分に設けられた水口。SX1738がSX1736との間で幅50cmほどとぎれ、砂が堆積する。北方の水田SX1741にも水たまり状のくぼみがあり、南方上段の水田SX1740から北方下段の水田SX1741に水が供給されていたことがわかる。

**下層水田畦畔SX1742** 第86次8区北壁際の深掘り部分で検出したSX1741に先行する水田畦畔（Fig. 128）。上層の畦畔SX1739の西方1.7mの位置にあり、これと南北方向に並行すると考えられる。幅は80cmで、上面の標高は106.9mほどである。東西の水田上面からの比高はいずれも10cm程度だが、東が若干高いかもしれない。

Tab. 8 検出遺構一覧(1)

凡 例

- \*本書で取り上げた遺構について、掲載頁などを示した。
- \*番号は空き(欠番)もあるが、飛鳥寺1991-1次調査を中心に、本書には現れないものの付番している遺構番号もある(内部資料)。これらはいずれもこの一覧への記載を省略した。
- \*概報で報告したものの、本書には掲載しなかった遺構は、ここには収録しなかった。
- \*地区は大きく北地区、堰SX1199付近、南地区、東方遺跡に分け、北地区は北端部の飛鳥寺寺域東南区画関係遺構とそれ以外に細分し、南地区は東の谷、西の谷、東の谷上流部に細分した。
- \* ( )内の数字は、詳細な報告はないが、本文中でふれている頁を示す。

遺構名	遺構番号	地 区	本 文 掲 載 頁	Fig. 番 号	概 報	備 考
掘立柱建物	SB747	南 西の谷	66		SB747	柱穴2基
掘立柱塼	SA748	南 西の谷	147		SA748	平安以降
炉	SX750	南 西の谷	84		SX750	谷合流点付近の工房
掘立柱塼	SA751	南 西の谷	62		SA751	1間分の塼
掘立柱塼	SA753	南 西の谷	62	32・34	SA753	4間分の塼
掘立柱建物	SB754	南 西の谷	63	32・36	SB754	谷合流点付近の工房
掘立柱塼	SA756	南 西の谷	62	35	SA756	3間分の塼
掘立柱建物	SB757	南 西の谷	63	32・36・37	SB757	谷合流点付近の工房
掘立柱塼	SA759	南 西の谷	62	32	SA759	3間分の塼
大型炉	SX760	南 西の谷	85		SX760	谷合流点付近の工房
水溜状土坑	SX761	南 西の谷	59	32	SX761	下流にSD809接続
土坑	SK764	南 西の谷	66		SK764	性格不明
掘立柱建物	SB767	南 西の谷	63	32	SB767	谷合流点付近の工房
土坑	SK770	南 西の谷	66	32	SK770	貯水用の土坑カ
素掘溝	SD771	南 西の谷	146	26	SD771	平安時代の排水溝
炉	SX774	南 西の谷	85	55・56	SX774	SB781内の炉
炉	SX775	南 西の谷	85	55・56	SX775	SB781内の炉
炉	SX776	南 西の谷	85	55・56	SX776	SB781内の炉
井戸	SE777	南 西の谷	146	118	SE777	平安時代と推測
掘立柱建物	SB781	南 西の谷	63	32・55	SB781	谷合流点付近の工房
素掘溝	SD784	南 西の谷	60	32	SD784	西の谷最末期の流路
掘立柱建物	SB785	南 西の谷	64	32・38・55	SB785	谷合流点付近の工房
炉	SX787	南 西の谷	Tab. 6	55	SX787	SB781内の炉
炉	SX788	南 西の谷	85	55・57	SX788	SB781内の炉
土坑	SK789	南 西の谷	64		SK789	SB781内の土坑
炉	SX791	南 西の谷	85	55・58	SX791	SB781内の炉
炉	SX800	南 西の谷	85		SX800	SB805に伴う炉
素掘溝	SD802	南 西の谷	65		SD802	SD804が接続
素掘溝	SD803	南 西の谷	65	41	SD803	SB805を巡る溝
素掘溝	SD804	南 西の谷	65	41	SD804	SB805を巡る溝
掘立柱建物	SB805	南 西の谷	64	32・39・55	SB805	谷合流点付近の工房
瓦列	SX807	南 西の谷	65	41	SX807	SD804より古
掘立柱建物	SB808	南 西の谷	64	40	SB808	谷合流点付近の工房
素掘溝	SD809	南 西の谷	59	32・34	SD809	工房期の基幹排水路
		南 西の谷	(47・48)		SD810	水溜SX1222と同じ 概報では谷筋
南北溝	SD811	南 西の谷	28		SD811	7世紀中頃の遺構
落ち込み	SX812	南 西の谷	28		SX812	7世紀中頃の遺構
東西溝	SD813	南 西の谷	28		SD813	7世紀中頃の遺構
石敷	SX814	南 西の谷	28		SX814	7世紀中頃の遺構
石敷	SX815	南 西の谷	28		SX815	7世紀中頃の遺構
南北溝	SD816	南 西の谷	28		SD816	7世紀中頃の遺構

Tab. 8 検出遺構一覧(2)

遺構名	遺構番号	地区	本文掲載頁	Fig.番号	概報	備考
石列	SX817	南 西の谷	28		SX817	7世紀中頃の遺構
石敷	SX818	南 西の谷	28	34	SX818	7世紀中頃の遺構
素掘溝	SD819	南 西の谷	29	34	SD819	7世紀中頃の遺構
石組	SX820	南 西の谷	29		SX820	7世紀中頃の遺構
素掘溝	SD821	南 西の谷	29		SD821	7世紀中頃の遺構
井戸	SE822	南 西の谷	30	19	SE822	7世紀中頃の遺構
石敷	SX823	南 西の谷	29	18	SX823	7世紀中頃の遺構
弧状石列	SX824	南 西の谷	30		SX824	7世紀中頃の遺構
石組溝	SD825	南 西の谷	29	18	SD825	7世紀中頃の遺構
土坑	SK826	南 西の谷	66		SK826	炭入り土坑 瓦出土
7世紀中頃以前の流路	SD829	南 西の谷	33	21	SD829	7世紀中頃の遺構と併存カ
古墳時代以前の旧河川	SD831	南 西の谷	24	8	SD831	流路不明確
南面大垣	SA1060	北 寺東南区画	113	5	SA100	のちにSA1061へ建替
南面大垣	SA1061	北 寺東南区画	114		SX101・102	SA1060からの建替
南雨落溝	SD1063	北 寺東南区画	115	5	SD103	SA1060の南雨落溝 A・Bの変遷あり
石敷	SX1065	北 寺東南区画	115	5	SX105	SA1060に開く門に伴う施設カ
南北溝	SD1066	北 寺東南区画	119	5・92・93	SD106	SD1130の下流カ
土坑	SK1067	北 寺東南区画	138	5		瓦・須恵器破片出土
東西道路	SF1070	北 寺東南区画	116	90	SF50	飛鳥寺東南区画南の道路
東西溝	SD1071	北 寺東南区画	119	5・90・92	SD51	調査区東に抜ける古い溝
東西溝	SD1072	北 寺東南区画	118	5・90・92	SD52	SD1071からの造り替え
土坑(池状)	SK1073	北 寺東南区画	120	5・92	SK49	溝合流点の池状土坑
瓦敷	SX1075	北 寺東南区画	116	5		A・Bの変遷あり 舗装カ
道路南側溝	SD1080	北 寺東南区画	117	90	SD47	SF1070の南側溝 A・Bの変遷あり
掘立柱塀	SA1081	北 寺東南区画	129		SX44	SD1080にかかると一時的な橋カ
橋状遺構	SX1082	北 寺東南区画	117	91	SX48	SD1080Bにかかると
東西塀	SA1083	北	129		SA45	SD1080の南に並行する塀
東西棟建物	SB1084	北 寺東南区画	125	95	SB46	SF1070上に建つ
土坑	SK1085	北	137			滑石製白玉出土
東西塀	SA1086	北	129	104		SD1115の南に沿う東西塀
東西塀	SA1087	北	129	111		SD1118に沿う東西塀
東西塀	SA1088	北	130	89・111・113	SA8	SD1116に沿う東西塀
南北塀	SA1089	北	145	89・111・116		平安時代の南北塀
石敷井戸	SE1090	北	121		SE42	西北部の石敷井戸
石敷	SX1091	北	121			井戸周囲の石敷
排水溝	SD1092	北	121			井戸外周の排水溝
石組排水溝	SD1093	北	122			井戸から北に延びる排水溝
石組暗渠	SX1094	北	123		SX43	SD1080に注ぐ
斜行溝	SD1095	北	149	121		中世
石組方形池	SG1100	北	111	108・付図2	SX30	調査区西北部の池
石組排水路	SD1101	北	112	108・付図2	SD31	SG1100東北隅から北東に排水
南北溝	SD1103	北	112	108・109・付図2	SD29	SG1100東南隅に接続
土坑	SK1104	北	137	108		瓦が数点出土



Tab. 8 検出遺構一覧 (3)

遺構名	遺構番号	地 区	本 文 掲 載 頁	Fig 番 号	概 報	備 考
土坑	SK1105	北	138			銅製の大型鋳造品の破片出土
瓦堆積遺構	SX1106	北	143	111・115		平瓦数枚を重ねた遺構
南北溝	SD1108	堰	41	50		堰SX1199を越える古溝
南北溝	SD1109	堰	41	50		堰SX1199を越える新溝
南北溝	SD1110	北	109	4・86・87・ 89・104・111	SD1	北地区基幹排水路
堰	SX1111	北	110	86・88・89・111	SX16	SD1110中の石組の堰
東西溝	SD1112	北	149	111・121	SD20	中世
東西溝	SD1113	北	141	113		SD1116の下層溝
木樋暗渠	SX1114	北	139	4・104・112	SX3	クランク形の木樋暗渠
東西溝	SD1115	北	140	104	SD4	SA1086に沿う溝
東西溝	SD1116	北	141	89・111・113	SD7	A・Bの変遷あり SX1175に接続しSD1110へ注ぐ
東西溝	SD1117	北	143	111	SD21	SD1118Bに接続
東西溝	SD1118	北	142	111・114	SD22	A・Bの変遷あり SX1119に接続しSD1110へ注ぐ
木樋暗渠	SX1119	北	142	111・114	SX23	東端でSD1118Bに接続
南北堀	SA1120	北	130	4・89・104・ 105・111	SA2	SD1110に沿う南北堀南半
南北堀	SA1121	北	130	89・111	SA2	SD1110に沿う南北堀北半
石敷	SX1122	北	143	89・111	SX17	SX1175西の石敷
踏石列	SX1123	北	143	111・113	SX15	SX1174の上層にある東西踏石列
東西堀	SA1124	北	131	111	SA19	SD1110を越えて東に続く
南北溝	SD1125	北	143	111・113	SD18	SA1120の西を北流
土坑	SK1126	北	137	108・110	SK26	木簡多数出土
東西溝	SD1127	北	148	108・121	SD27	鎌倉時代カ
土坑	SK1128	北	135	108・付図2	SK28	木簡9点出土
土坑	SK1129	北	138			SG1100の西深掘り部分で検出
南北大溝	SD1130	北	109	4・113	SD5	SD1110に先行する基幹流路
土坑	SK1131	北	138			SG1100の北西20mの位置
南北堀	SA1132	北	131		SA32	SB1134の目隠堀カ
東西堀	SA1133	北	132		SA33	SB1134の目隠堀カ
東西棟建物	SB1134	北	126	97	SB34	桁行6間×梁行2間
掘立柱建物	SB1135	北	126	98	SB35	桁行2間×梁行2間
東西棟建物	SB1136	北	127	99	SB36	桁行4間×梁行2間
南北棟建物	SB1137	北	127	100	SB37	桁行2間×梁行2間
南北堀	SA1138	北	132	106	SA38	北端でSA1139に接続
東西堀	SA1139	北	132	106	SA39	東端でSA1138に接続
南北堀	SA1140	北	133		SA40	SA1133と接続カ
南北棟建物	SB1141	北	125	96	SB41	桁行6間×梁行2間
井戸	SE1142	北	146	111・117	SE12	平安時代 延喜通寶出土
東西棟建物	SB1143	北 寺東南区画	127		SB53	SX1075Bの下層で検出
炉	SX1144	北	85	59	SX13	SA1124の柱穴に近接
南北堀	SA1145	北	133		SA25	SA1124と接続カ
南北棟建物	SB1146	北	127	101・111	SB24	桁行3間×梁行2間
南北棟建物	SB1147	北	128	102・104	SB6	桁行3間×梁行1間以上
土坑	SK1148	北	138	89・111	SK60	SX1111の東方に所在
橋	SX1149	北	111	89・111	SB11	SD1110に架かる橋

Tab. 8 検出遺構一覧(4)

遺構名	遺構番号	地区	本文掲載頁	Fig.番号	概報	備考
東西堀	SA1150	堰	39		SA56	南列 変遷の前期 炉SX1195~1197と併存
東西堀	SA1151	堰	40・50		SA57	中央列 変遷の後期
東西堀	SA1152	堰	41・50		SA58	北列 変遷の中期
土坑	SK1153	北	139		SK10	木簡2,174点出土
南北棟建物	SB1154	北	104・145		SB65	平安時代の掘立柱建物
東西棟建物	SB1155	北	145		SB62	平安時代の掘立柱建物
東西堀	SA1156	北	133		SA64	SA1120南端に接続
掘立柱堀	SA1157	北	145		SA63	SB1155の西廂カ
東西堀	SA1158	北	133	104	SA66	SA1120に接続する4間の堀
井戸	SE1159	堰	124	94	SE59	SX1199北の井戸
石敷井戸	SE1160	堰	123		SE60	SX1199付近の井戸
溝	SD1161	堰	123		SD61	井戸周囲の溝
石敷	SX1162	堰	123			井戸周囲の石敷
石組溝	SD1163	堰	124			井戸から東に排水する溝
階段	SX1164	堰	124			石敷西北に設けられた石敷階段
土坑	SK1166	堰	(71)			東の谷西岸の工房関連
南北堀	SA1167	北	133	107	SA67	2間分の堀
飛鳥池樋門	SX1168	堰	149		SX68	近世
排水路	SD1169	堰	149		SD69	近世 SX1168から排水
土坑	SK1170	堰	71	32	SK70	東の谷西岸の工房関連
飛鳥池樋門	SX1171	堰	150	122	SX71	近世 布掘掘方
排水路	SD1172	堰	150		SD72	近世 SX1171から排水
7世紀中頃の流路	SD1173	南 東の谷	30	4・7・12・20・31	SD73	東の谷の基幹流路
踏石列	SX1174	北	143	111・113	SX14	SX1123の上層にある踏石列
木樋暗渠	SX1175	北	142	89・111	SX9	SD1116の水をSD1110に排水
旧河川	SD1176	南 東の谷	21	4・5・7・12・ 13・23・25・26・ 30・31・93		東の谷の旧河川
斜行溝	SD1177	南 東の谷	147	25・45~48		東岸の工房1を破壊
工房建物	SB1178	南 東の谷	77	45~48	SB242	東岸の工房1の覆屋
土坑	SK1180	南 東の谷	77	45~48	SK260	SB1178西外の土坑
土坑	SK1181	南 東の谷	77	45~48	SK261	SB1178内の土坑
土坑	SK1182	南 東の谷	77	45~48	SK262	SB1178内の土坑
土坑	SK1183	南 東の谷	77	45~49	SK263	SB1178内の土坑
土坑	SK1184	南 東の谷	77	45~48	SK264	SB1178内の土坑
土坑	SK1185	南 東の谷	77	45~48	SK265	SB1178内の土坑
土坑	SK1186	南 東の谷	77	45~48	SK266	SB1178内の土坑
土坑	SK1187	南 東の谷	77	45~48	SK267	SB1178内の土坑
土坑	SK1188	南 東の谷	77		SK268	SB1178北外の土坑
土坑	SK1189	南 東の谷	77		SK269	SB1178北外の土坑
区画溝	SD1190	南 東の谷	77	45~48	SD238	SB1178西の南北溝
区画溝	SD1191	南 東の谷	77	45~48	SD239	SB1178西の南北溝
区画溝	SD1192	南 東の谷	77		SD244	SB1178北の東西溝
区画溝	SD1193	南 東の谷	72・77	7・44~48	SD237	SB1178東の南北溝
区画溝	SD1194	南 東の谷	72	7・44~48	SD236	SB1178東の南北溝
炉	SX1195	堰	(81)・Tab. 6	50		堰SX1199付近の工房

Tab. 8 検出遺構一覧 (5)

遺構名	遺構番号	地 区	本 文 掲 載 頁	Fig. 番 号	概 報	備 考
炉	SX1196	堰	(81)・Tab. 6	50		堰SX1199付近の工房
炉	SX1197	堰	(81)・Tab. 6	50		堰SX1199付近の工房
南北溝	SD1198	堰	150			性格・時期とも不明
堰	SX1199	堰	39			3条の堀が変遷する堰
瓦窯	SY1200	南 東の谷	79		SY50	飛鳥寺東南禅院の瓦を焼成
石列	SX1201	南 東の谷	80		SX51	瓦窯構築に伴う石列
土坑	SK1202	南 東の谷	80		SK52	瓦窯に伴う処理土坑
土坑	SK1203	南 東の谷	80			瓦窯に伴う性格不明土坑
南北溝	SD1204	北	113			SD1103と一連カ
東西溝	SD1205	北	113			SD1204に合流
南北溝	SD1206	南 東の谷	46			SX1221の水口 性格不明
南北溝	SD1207	南 東の谷	47	24		SX1221の水口
南北溝	SD1208	南 東の谷	47	24		工房期最末期の排水路
土坑	SK1210	南 東の谷	78	45		東岸工房1 富本銭鑄型出土
粘土採掘坑	SX1211	南 東の谷	78		SX241	東岸工房1
炉	SX1217	堰	(81)・Tab. 6	50		堰SX1199付近の工房
土坑	SK1219	南 東の谷	49	27	SK217	比重選鉱土坑
水溜	SX1220	南 東の谷	43	23・24・32	SX55	最下流の水溜
陸橋	SX1221	南 東の谷	44	23・24・32	SX54	敷葉構法採用
水溜	SX1222	南 東の谷	47	23~27・32	SX53	東岸に炭層が厚く堆積
陸橋	SX1223	南 東の谷	48	27	SX216A・B	工房当初は存在しない陸橋
水溜	SX1224	南 東の谷	49	27・30	SX215	富本銭と鑄型片出土
陸橋	SX1225	南 東の谷	50	30	SX214	SK1240・1241設置
水溜	SX1226	南 東の谷	51	29・30	SX211	東岸に炭層が堆積
陸橋	SX1227	南 東の谷	51	30	SX210	敷葉構法採用
水溜	SX1228	南 東の谷	52	30	SX209	盛時の下流から5基め
陸橋	SX1229	南 東の谷	52	30	SX208	工房当初は存在しない陸橋
水溜	SX1230	南 東の谷	53	12・30・31	SX207	上流から2基めの水溜
水溜	SX1231	南 東の谷	56		SX201	最南端の水溜
陸橋	SX1232	南 東の谷	53		SX202	SX1233を改修
陸橋	SX1233	南 東の谷	54	31	SX203	敷葉構法採用
斜行溝	SD1234	南 東の谷	81	12	SD204	東岸の西縁に沿う溝
掘立柱堀	SA1235	南 東の谷	100	31・76	SA205	陸橋SX1233上に造る
掘立柱堀	SA1236	南 東の谷	100		SA220	東岸の工房2の東を画す
掘立柱堀	SA1237	南 東の谷	103	31・77・78	SA1	東の谷西岸に沿う
掘立柱堀	SA1238	南 東の谷	101	31・78	SA2	工房の南を画す
井戸	SE1239	南 東の谷	147	119・120	SE219	削り抜き井戸枠 9世紀
富本銭土坑	SK1240	南 東の谷	78		SK212	SX1225西部
富本銭土坑	SK1241	南 東の谷	78		SK213	SX1225西部
大型方形炉	SX1242	南 東の谷	85		SX221	SX1280内
大型方形炉	SX1243	南 東の谷	85		SX222	SX1280内
大型方形炉	SX1244	南 東の谷	85		SX223	SX1280内
炉	SX1245	南 東の谷	87		SX224	SX1280内
炉	SX1246	南 東の谷	87		SX225	SX1280内
炉	SX1247	南 東の谷	87		SX226	SX1280内
炉	SX1248	南 東の谷	87		SX227	SX1280内 SX1270の下層炉

Tab. 8 検出遺構一覧(6)

遺構名	遺構番号	地区	本文掲載頁	Fig.番号	概報	備考
炉	SX1249	南 東の谷	Tab. 6			SX1280内カ
大型方形炉	SX1250	南 東の谷	84	53	SX250	SX1280内カ
土坑	SK1251	南 東の谷	84		SX251	SX1280内カ
しがらみ	SX1252	南 東の谷	56	31		SX1233 と同時につくる
掘立柱建物	SB1253	南 東の谷	105	81・82	SB253	桁行4間以上×梁行2間
掘立柱建物	SB1254	南 東の谷	106	83	SB254	方2間
掘立柱塀	SA1255	南 東の谷	106	84	SB255	2間の東西塀
掘立柱塀	SA1256	南 東の谷	106		SA256	1間以上の南北塀
炉	SX1257	南 東の谷	87		SX218	SX1223西南部に構築
石組	SX1258	南 東の谷	51	28	SX232	階段状施設
炉	SX1259	南 東の谷	(106)・Tab. 6	82	SX257	SB1253柱穴より古い
溝	SD1260	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1261	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1262	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1263	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1264	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1265	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1266	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1267	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1268	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
溝	SD1269	南 東の谷	54			SX1232B上面の排水溝
炉	SX1270	南 東の谷	Tab. 6		SX227	SX1280内 SX1248の上層炉
炉	SX1271	南 東の谷	Tab. 6		SX240	7基が重複
炉	SX1273	南 東の谷	Tab. 6		SX240	7基が重複
炉	SX1274	南 東の谷	Tab. 6		SX240	7基が重複
炉	SX1275	南 東の谷	Tab. 6		SX240	7基が重複
炉	SX1276	南 東の谷	87		SX240	7基が重複
炉	SX1277	南 東の谷	Tab. 6		SX240	7基が重複
東岸の工房2	SX1280	南 東の谷	80			東岸の工房2の総称
東岸の工房1 上層工房	SX1300	南 東の谷	78	48		上層工房の総称 この間 上層工房の炉
東岸の工房1 中層工房	SX1400	南 東の谷	72	47		中層工房の総称 この間 中層工房の炉
東岸の工房1 下層工房	SX1500	南 東の谷	72	46		下層工房の総称 この間 下層工房の炉
梵鐘鑄造 土坑	SX1600	南 西の谷	151	42・123~126	SX6	1745年飛鳥寺梵鐘鑄造
掘立柱建物	SB1603	南 西の谷	104	32		総柱建物
掘立柱建物	SB1604	南 西の谷	104	32・80		側柱建物
西の谷 中段の工房	SX1610	南 西の谷	66	32・42		中段の工房の総称
炉	SX1611	南 西の谷	89	43・71		上段の工房の炉
炉	SX1612	南 西の谷	90	43		上段の工房の炉
炉	SX1613	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1614	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉

Tab. 8 検出遺構一覧 (7)

遺構名	遺構番号	地 区	本 文 掲 載 頁	Fig. 番 号	概 報	備 考
炉	SX1615	南 西の谷	Tab. 6	43・71		上段の工房の炉
炉	SX1616	南 西の谷	90	43・72		上段の工房の炉
炉	SX1617	南 西の谷	90	43		上段の工房の炉
炉	SX1618	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1619	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1620	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1621	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1622	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1623	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1624	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
下層の炉	SX1625	南 西の谷	(66)・Tab. 6	42		竪穴建物SB1651内
炉	SX1626	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1627	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1628	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1629	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1630	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
下層の炉	SX1631	南 西の谷	(66)・Tab. 6	42		古墳時代の遺物出土
炉	SX1632	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1633	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1634	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1635	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1636	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1637	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1638	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1639	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
下層の炉	SX1640	南 西の谷	84	54		古墳時代の遺物出土
水溜状土坑	SX1641	南 西の谷	57	32・33・42	廃棄物土坑	中段の工房SX1610に伴う
炉	SX1642	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
鉾滓集積土坑?	SK1643	南 西の谷	(66)・Tab. 6	42		鍛冶の金床カ
鉾滓集積土坑?	SK1644	南 西の谷	(66)・Tab. 6	42		鍛冶の金床カ
鉾滓集積土坑?	SK1645	南 西の谷	(66)・Tab. 6	42		鍛冶の金床カ
炉	SX1646	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1647	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1648	南 西の谷	90	42・73		中段の工房の炉
炉	SX1649	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
竪穴建物	SB1650	南 西の谷	25	14	竪穴住居跡A	古墳時代
竪穴建物	SB1651	南 西の谷	25	15	竪穴住居跡B	古墳時代
弧状溝	SD1652	南 西の谷	26		弧状溝	古墳時代
南北溝	SD1653	南 西の谷	26	8	南北溝	古墳時代
炉	SX1654	南 西の谷	90	42・74		中段の工房の炉
炉	SX1655	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
炉	SX1656	南 西の谷	Tab. 6	42		中段の工房の炉
素掘溝	SD1657	南 西の谷	66	42		中段の工房の排水溝
南北堀	SA1660	南 西の谷	104	9・32・79	掘立柱堀	工房の西限堀 建替あり
炉	SX1661	南 西の谷	90		炉跡	西丘陵東斜面の工房
炉	SX1662	南 西の谷	91		炉跡	西丘陵東斜面の工房

Tab. 8 検出遺構一覧(8)

遺構名	遺構番号	地区	本文掲載頁	Fig.番号	概報	備考
炉	SX1663	南 西の谷	91			西丘陵東斜面の工房
素掘溝	SD1665	南 西の谷	(68)	43		上段の工房の排水溝
西の谷 上段の工房	SX1680	南 西の谷	68	11・32・43	工房	上段の工房の総称
炉	SX1683	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1684	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1685	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1686	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1687	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1688	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1689	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1690	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1691	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
炉	SX1692	南 西の谷	Tab. 6	43		上段の工房の炉
流路	SD1700	東方	162	128~130・135		狂心渠カ
斜行溝	SD1701	南 東上流	27	17	斜行溝	古墳時代
炉	SX1702	南 東上流	91		炉跡1	上段平坦面の炉
炉	SX1703	南 東上流	91		炉跡2	下段平坦面SX1704の上
炉	SX1704	南 東上流	91		炉跡3	下段平坦面SX1703の下
南北溝	SD1705	南 東上流	26	16	南北溝1	古墳時代
竪穴状遺構	SX1706	南 東上流	26		竪穴状遺構	古墳時代
南北溝	SD1707	南 東上流	30		南北溝2	7世紀中頃
南北溝	SD1708	南 東上流	26	16	南北溝3	古墳時代
護岸石	SX1709	南 東上流	148		護岸石	下層護岸石 平安時代
石組遺構	SX1710	南 東上流	82		石組遺構	上段平坦面
護岸石	SX1711	南 東上流	148			上層護岸石 平安時代
炉	SX1713	南 東上流	91	75		下段平坦面SX1714の下
炉	SX1714	南 東上流	91	75		下段平坦面SX1713の上
流路	SD1720	東方	167			86次1区 SD1700の支流
掘立柱建物	SB1721	東方	173	135・142		桁行3間以上×梁行2間以上 西廂をもつ格の高い建物
掘立柱塀	SA1722	東方	174	135		86次1・2区 4間分
礫群	SX1723	東方	174			86次2区と92次F区にまたがる
掘立柱塀	SA1724	東方	173	135・141		86次2区と92次F区の4基の柱穴
土坑	SK1725	東方	170			86次3区の広く浅い土坑
掘立柱塀	SA1726	東方	170	134・135		SA1728とSA1753が直交
掘立柱塀	SA1727	東方	172	135・137		86次5区と6区にまたがる
掘立柱塀	SA1728	東方	170	135・136		東北端でSA1726に直交
掘立柱塀	SA1729	東方	172	135・138		86次5区と6区にまたがる
掘立柱塀	SA1730	東方	172	135・139		86次5区と6区にまたがる
掘立柱塀	SA1731	東方	173	135・140		86次5区と6区にまたがる
整地	SX1732	東方	168			SD1700東岸の地盤改良カ
斜行溝	SD1733	東方	169			SD1700への排水溝カ
石組溝	SD1734	東方	168	132		SA1729と併存カ
小穴列	SA1735	東方	170			86次7区を縦断 性格不明
水田畦畔	SX1736	東方	176	128		平安後期

Tab. 8 検出遺構一覧 (9)

遺構名	遺構番号	地 区	本 文 掲 載 頁	Fig. 番 号	概 報	備 考
水田畦畔	SX1737	東方	176			平安後期
水田畦畔	SX1738	東方	176	145		平安後期
水田畦畔	SX1739	東方	176	128		平安後期
水田	SX1740	東方	177	145		平安後期
水田	SX1741	東方	177	128		平安後期
下層水田畦畔	SX1742	東方	177	128		SX1741に先行する畦畔
水田	SX1743	東方	177	128・145		平安後期
掘立柱建物	SB1744	東方	169			桁行2間以上×梁行2間の東端カ
掘立柱建物	SB1745	東方	169			桁行3間×梁行2間
掘立柱建物	SB1746	東方	169	133		1基の柱穴 建物西南隅カ
掘立柱建物	SB1747	東方	175			92次C区 建物東北隅カ
掘立柱建物	SB1748	東方	175	144		92次C区 建物東南隅カ
掘立柱堀	SA1749	東方	174			流路SD1700に沿う堀
掘立柱堀	SA1750	東方	175			流路SD1700に沿う堀
東西溝	SD1751	東方	175			SA1750より新 素掘小溝カ
東西溝	SD1752	東方	175			SA1749より新 素掘小溝カ
掘立柱堀	SA1753	東方	170	135		92次H区の柱穴2基
掘立柱堀	SA1754	東方	170			86次8区と92次I区にまたがる
掘立柱堀	SA1755	東方	170			SB1744に伴う堀 建替ありカ
磔敷	SX1758	東方	167			86次1区 SD1720の北護岸カ
足跡	SX1759	東方	(177)			SX1740で検出した足跡
斜行流路東北岸	SX1761	東方	167			平安前期頃
水口	SX1762	東方	177			平安後期
水口	SX1763	東方	177			平安後期
土坑	SK1803	北	136	108		SG1100南辺東端付近
土坑	SK1806	北	134	108・109・付図2		SG1103より古い
土坑	SK1807	北	136	109		SG1100南辺中央部
土坑	SK1808	北	136	108・109		SG1100南辺中央部
土坑	SK1809	北	134	108・109・付図2		断面描鉢形
土坑	SK1810	北	134	108・109・付図2		SG1100南辺中央部
土坑	SK1811	北	135	109		SD1100堆積土の一部カ
土坑	SK1813	北	136	109		SK1809・1814の下層
土坑	SK1814	北	137	109		SK1813とは一連カ
土坑	SK1815	北	137	109		SK1821より新
土坑	SK1816	北	137	108・109		SK1813～15より新
土坑	SK1817	北	135	108・付図2		SG1100石積掘方より古
土坑	SK1818	北	136	108・付図2		木簡1点出土
土坑	SK1819	北	136	108・付図2		木簡2点出土
土坑	SK1820	北	136	108・付図2		SG1100西北隅付近
土坑	SK1821	北	138	108		木簡6点・海老錠1点出土
東西堀	SA1822	北	134			3間分を検出
南北堀	SA1823	北	134			2間分を検出
土坑	SK1824	北	136	108・付図2		SG1100からSG1101西岸付近